

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第18集

一般国道4号線春日部古河バイパス道路関係

埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告

下 権

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道4号線は東京中央区日本橋を起点とし、埼玉県東部を南北に縦断して青森県青森市に至る日本一長い国道であります。

交通量の増大および車輌の大型化などの道路交通事情からみたとき、バイパスの開通は関係住民の等しく熱望するところではありますが、予定地内に埋蔵文化財包蔵地の含まれていることが確認されたため、協議の結果、発掘調査・記録保存の措置が講ぜられることとなりました。

発掘調査事業は昭和56年建設省関東地方建設局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものであります。

調査の結果、予想以上の埋蔵文化財の検出がありました。これらを記録保存したのが本報告書であります。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、県内文化財関係者はもとより、多大の御協力・御援助くださされた建設省北首都国道工事事務所、杉戸町教育委員会、地元関係者各位に改めて感謝いたします。

昭和57年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

例　　言

1. 本書は埼玉県南埼玉郡杉戸町大字椿に所在する下椿遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は一般国道4号線バイパス建設に先だつ事前調査であり、埼玉県教育委員会が調整し、建設省の委託により財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、昭和56年4月11日から8月31日に亘って実施した。整理・報告書作成作業は昭和57年度に受託し、実施した。
なお、調査の組織は2ページに示したとおりである。
3. 出土品の整理および図の作成は宮昌之があたった。
4. 発掘調査における写真は宮昌之、田中正夫が、遺物写真は宮が撮影した。
5. 本書の執筆は主として宮が行ったが、宮以外の部分については文末に氏名を記した。
6. 本書に掲載した挿入図類の縮尺は次のとおりである。
遺構　住居・土坑%，溝%・%，カマド%
遺物　土器%，石器%，鐵製品・木製品%
7. 土層図、断面図の標高は6.00mに統一している。
8. 住居跡のピット内に示した数字は、ピットの最深部の深さである。
9. 土器実測図中の矢印は工具の移動した方向を示し、断面図の実線はヨコナデの範囲を示している。
10. 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究部第五課職員があたり、横川好富が監修した。
11. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示を受けた。
　　榎崎彰一（名古屋大学）
　　荻野繁春（福井工業高等専門学校）

目 次

序

例 言

I 調査の概要.....	1
1. 発掘調査に至るまでの経過.....	1
2. 調査の経過.....	3
II 遺跡の立地と環境.....	4
III 遺跡の概観.....	8
IV 遺構と出土遺物	11
1. 住居跡.....	11
2. 土 坑	80
3. 溝.....	101
4. その他の遺物.....	108
V 結 語.....	110

挿図目次

第1図 遺跡位置図	4	第31図 10号住居跡	47
第2図 周辺の遺跡分布図	5	第32図 11号住居跡	48
第3図 土層断面図	8	第33図 11号住居跡カマド	49
第4図 遺構配置図	9	第34図 11号住居跡出土遺物	49
第5図 1号住居跡	11	第35図 12号住居跡	50
第6図 1号住居跡カマド	12	第36図 13号住居跡	51
第7図 1号住居跡出土遺物	13	第37図 14号住居跡	52
第8図 2号住居跡	16	第38図 14号住居跡出土遺物	53
第9図 2号住居跡出土遺物	16	第39図 5号住居跡	54
第10図 3号住居跡	18	第40図 15号住居跡出土遺物	55
第11図 3号住居跡出土遺物	19	第41図 16号・23号住居跡	57
第12図 4号住居跡	20	第42図 16号住居跡出土遺物	59
第13図 4号住居跡カマド	21	第43図 17号・18号住居跡	61
第14図 4号住居跡出土遺物	23	第44図 17号住居跡出土遺物	63
第15図 5号住居跡	24	第45図 18号住居跡出土遺物	64
第16図 5号住居跡カマド	25	第46図 19号住居跡	65
第17図 5号住居跡出土遺物	26	第47図 19号住居跡出土遺物	66
第18図 6号住居跡カマド	28	第48図 20号住居跡	68
第19図 6号住居跡	29	第49図 20号住居跡出土遺物	69
第20図 6号住居跡出土遺物（1）	32	第50図 21号住居跡	72
第21図 6号住居跡出土遺物（2）	33	第51図 21号住居跡出土遺物	73
第22図 6号住居跡出土遺物（3）	34	第52図 22号住居跡	74
第23図 7号住居跡	40	第53図 22号住居跡出土遺物	75
第24図 7号住居跡出土遺物	41	第54図 24号住居跡	78
第25図 8号住居跡	42	第55図 24号住居跡出土遺物	79
第26図 8号住居跡出土遺物	42	第56図 土坑（1）	83
第27図 9号住居跡	43	第57図 土坑（2）	84
第28図 9号住居跡カマド	44	第58図 土坑（3）	85
第29図 9号住居跡出土遺物	45	第59図 土坑（4）	86
第30図 10号住居跡出土遺物	46	第60図 土坑（5）	87

第61図 土坑（6）	88	第67図 土坑出土遺物（3）	94
第62図 土坑（7）	89	第68図 1・4・5・6号溝	103
第63図 土坑（8）	90	第69図 2・3・8・9号溝	105
第64図 土坑（9）	91	第70図 溝出土遺物	107
第65図 土坑出土遺物（1）	92	第71図 その他の遺物	109
第66図 土坑出土遺物（2）	93		

図 版 目 次

- 図版 1 調査前遺跡全景
- 図版 2 1号住居跡
 - 4号住居跡
- 図版 3 4号住居跡カマド
 - 5号住居跡
- 図版 4 5号住居跡カマド
 - 5号住居跡貯藏穴遺物出土状態
- 図版 5 6号住居跡
 - 6号住居跡カマド
- 図版 6 6号住居跡カマド脇遺物出土状態
 - 6号住居跡貯藏穴遺物出土状態
- 図版 7 9号住居跡
 - 9号住居跡カマド
- 図版 8 10号住居跡
 - 13号住居跡
- 図版 9 17・18号住居跡
 - 17号住居跡遺物出土状態
- 図版10 20号住居跡
 - 21号住居跡
- 図版11 2号土坑
 - 3号土坑
 - 12号土坑
- 図版12 24号土坑
 - 83号土坑

2・3号溝

- 図版13 2・4・5号住居跡出土遺物
図版14 5・6号住居跡出土遺物
図版15 6号住居跡出土遺物
図版16 6・9号住居跡出土遺物
図版17 9・10・11・14・15号住居跡出土遺物
図版18 15・16・17号住居跡出土遺物
図版19 17・20・21・22・24号住居跡出土遺物
図版20 住居跡・土坑出土砥石
図版21 住居跡出土土板、刀子
住居跡出土土製玉、紡錘車
図版22 8・12・18・25・27・32号土坑出土遺物
図版23 55・64・77・83号土坑出土遺物
図版24 96・104・108号土坑出土遺物
図版25 溝・グリッド出土遺物

I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

東京・青森間を結ぶ幹線道路である国道4号線は、北葛飾郡、南埼玉郡という埼玉県東部地区を走る。建設省では増大する交通量に対処するために、国道4号線について春日部市、古河市間のバイパス建設を計画した。この春日部・古河バイパスは埼玉県では幸手町、杉戸町、庄和町、春日部市を通る。

昭和53年12月、建設省北首都国道工事事務所長から、昭和53年12月25日付け北国調第143号をもって「春日部・古河バイパス予定地における文化財の所在と取扱いについて」照会がされた。

県教育局文化財保護課では、遺跡地図と照合したのち、現地調査を行い遺跡所在の確認と取扱いについて検討した。そして、昭和55年9月18日付け教文第564号をもって、建設省北首都国道工事事務所長あて、おおよそのとおり回答した。

1. 建設予定地内に現状では文化財は所在しないが、杉戸町内はNo.9遺跡の隣接地であるため、事前に試掘調査を実施する必要があること。

2. 試掘調査の結果、遺跡が確認された場合は、文化財保護法第57条3の規定により事前に文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

続いて、北首都国道工事事務所と文化財保護課で杉戸町内の試掘調査について協議を行い、昭和55年10月に試掘調査を実施した。その結果、バイパス予定地内にも杉戸町No.9遺跡が所在する事が確認された。文化財保護課では、昭和55年11月1日付け教文第697号をもって、1. 杉戸町No.9遺跡が路線内に拡大する事、2. 工事に先立ち発掘調査を実施すること、3. 調査の実施にあたっては、文化財保護課及び埼玉県埋蔵文化財調査事業団と事前に協議することを改めて北首都国道工事事務所長あて通知した。

從来、国・県・公社・公団等の公共事業に伴う発掘調査については、県教育委員会が実施してきたが、増大するこれら公共事業に対処するため、昭和55年度に財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立され、発掘調査は事業団において実施することになった。国道4号バイパス地内の杉戸町No.9遺跡（下椿遺跡）の発掘調査についても事業団が実施する事が決まり、北首都国道工事事務所、文化財保護課、事業団の三者で協議を行い、昭和56年度に発掘調査を実施することが決定した。

法的手続きを済ませた後、昭和56年4月から発掘調査は開始された。

文化庁からは、委保第5の1249号により文化財保護法第57条第一項に基づく埋蔵文化財発掘調査届に対する通知があった。

(宮崎 朝雄)

発掘調査の組織

1 発 振

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長 井 五 郎
副 理 事 長		沼 尾 和 也	
常 務 理 事		渡 辺 澄 夫	
庶 務 経 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	伊 藤 悅 光
發 振	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研 究 部 長	開 野 栄 一
		調 査 研 究 第 一 課 長	福 田 浩 泰
			本 庄 朗 人
			横 川 好 富
			高 橋 一 夫
			宮 昌 之
			田 中 正 夫

2 整 理

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長 井 五 郎
副 理 事 長		岩 上 進	
常 務 理 事		渡 辺 澄 夫	
庶 務 経 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	佐 野 長 二
整 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研 究 部 長	開 野 栄 一
		調 査 研 究 副 部 長 (兼調査研究第五課長)	江 田 和 美 子
			福 田 浩 子
			本 庄 朗 人
			横 川 好 富
			小 川 良 喬
			宮 昌 之

3 協 力 者

杉戸町教育委員会、地元区長および地元住民

2. 調査の経過

4月20日に発掘調査を開始。調査予定区域は排水路を挟んで北側の最初の道路までと、庄和町境の道路までであった。発掘区を排水路を境としてそれぞれ北地区・南地区と仮称し、まず北地区より着手した。北地区は周知の遺跡（県遺跡地図コード番号89009）に隣接していたが、遺物の分布がほとんどなかった。遺跡の範囲を早めに確認するため10ヵ所の試掘を行ったが、用地内では灰色のシルト質粘土層からすぐ砂層となってしまった。このため北地区は遺跡外と判断し、引き続いて遺物分布の多い南地区を行った。南地区は北側が北地区に続いた同様な土層状態であり、遺構は検出されなかったが、他はほぼ全面に遺構が検出された。

このため遺跡用地中心杭に平行する基線を東側に2mずらし、これに直交する線を基準とし、用地全体に一辺10mのグリッドを組み、北から0→20の整数で、東からA→Fのグリッドポイントで表現することとし、「D-12区」などとした。出土遺物、検出遺構はグリッドポイントにより実測した。発掘調査進行状況の概略は以下のとおりである。

4月下旬 北地区の試掘調査を行う。表土以下は砂層および粘土層となり、河川跡であることが判明し、調査を放棄する。

5月上旬 南地区の試掘調査を行い、遺構の存在が随所に確認された。確認面までの土量は多くないが非常に堅いため重機を使用して表土層を排土する。排土は遺跡外の国道建設用地に集積する。

5月中旬～6月上旬 表土の排土と並行して遺構の確認作業を行うが、土が堅く乾燥しているため、排土、確認作業ともに困難する。

6月中旬 表土の排土および遺構の確認作業を続け、10・11号住の調査を始める。

6月下旬 3・4・5・12号住の調査を始める。土坑・溝も随時確認順に調査を行う。

7月上旬 4・5・10・11号住の土層断面および遺物の実測を行う。1・6・7・8・9号住の調査調査を始める。

7月中旬 10・11号住の写真撮影および平面実測を行う。13・14号住の調査を始める。

7月下旬 6・7・9・14号住の土層断面および遺物の実測を行う。15・16・17・18・19・20・21・22号住居跡の調査を始める。

8月上旬 3・4・5・6・9・12・13・14号住の写真撮影および平面実測を行う。2・23・24号住の調査を始める。1・20号住の土層および遺物の実測を行う。

8月中旬 2・15・24号住の土層断面および遺物の実測、1・7・8・17・18・20・21・22・24号住の写真撮影および平面実測を行う。

8月下旬 1・3・4・5・6・9・11号住のカマドの写真撮影および実測、16・19・23号住の平面実測を行い、図面の点検で不備な部分を修正し、31日で総ての作業を終了する。

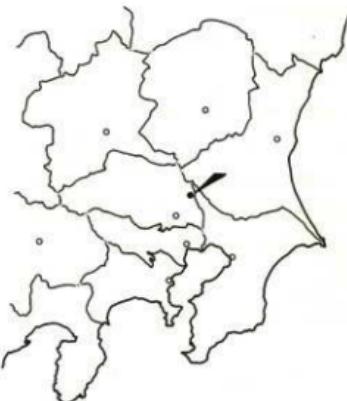
II 遺跡の立地と環境

下椿遺跡は北葛飾郡杉戸町大字椿字下椿153-1他に所在し、東武伊勢崎線東武動物公園駅より東に約5kmの所に位置する。今回4号バイパスの開通に伴い新たに発見された遺跡である。遺跡の所在する杉戸町は、県東端中央部に位置し、北は幸手町、西は大落古利根川を挟んで久喜市、宮代町、南は春日部市、庄和町、東は江戸川を挟んで千葉県館宿町と接し、鎌倉時代には鎌倉街道が通り、江戸時代には宿場町として栄えていた。町の西側には古利根川に並行して国道4号線が通り、その交通量はかなり多い。町の中央には庄内古川が南北に流れ、遺跡の周辺地域は、その多くが、大落古利根川と庄内古川（現在では中川と呼ばれている）の氾濫原による中川低地によって占められている。江戸川沿いには幸手町中島から庄和町宝珠花にかけて宝珠花台地が存在し、杉戸町目沼字浅間の浅間塚古墳上の標高が最も高く、17.9mを示す。この台地は館宿町側の下総台地と本来は統一した台地で、近世の江戸川開削によって分断されてしまっている。このような一部の台地部分を除いて、そのほとんどが沖積地であり、現在は主に水田として利用されている。近年は目沼から木野川にかけての台地上に多くの宅地が開発され、かなりの面積が宅地と化しており、4号バイパスの開通に伴って本遺跡のような沖積地まで開発が進行することが予想される。

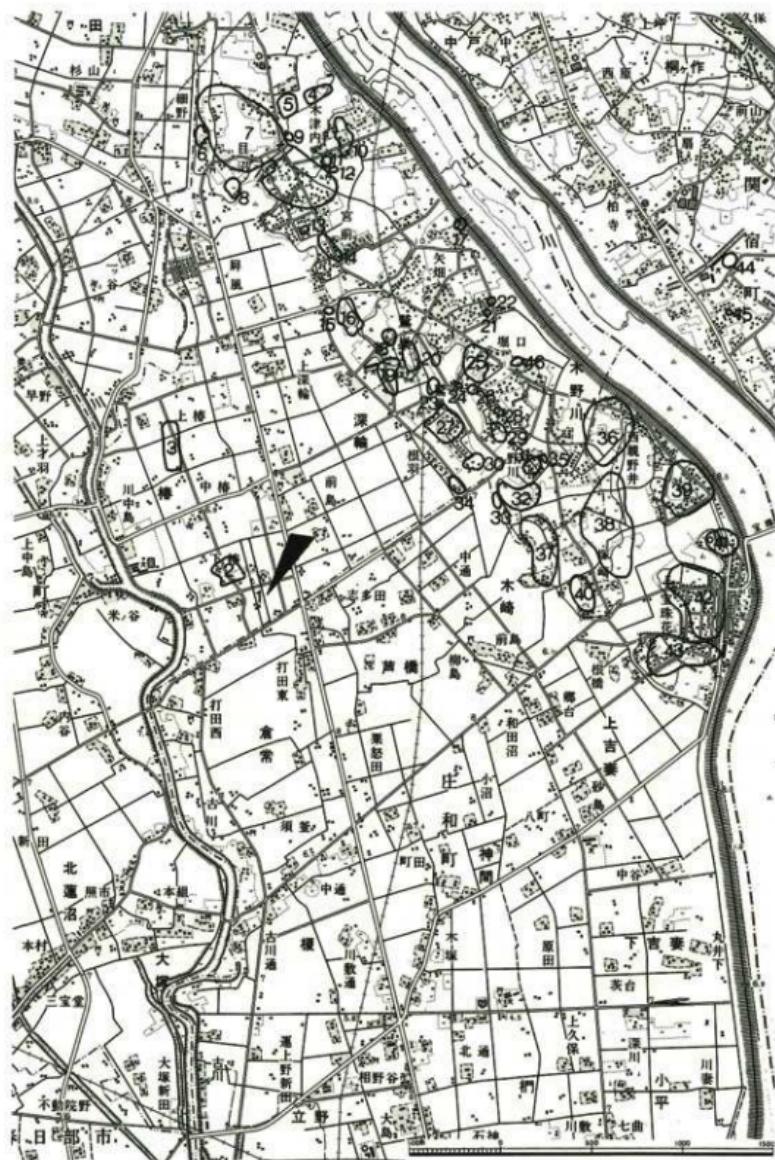
この様な地理的景観の中にあって、遺跡は庄内古川の左岸約500mの所に位置する。以下、時代を追って周辺の遺跡を概観してみる。

先土器時代の遺跡は遺跡分布図内では発見されていない。最も近い遺跡として庄和町西金野井に風早遺跡がある。黒色帶（武藏野台地の第2黒色帶）下部から局部磨製石斧が出土したことで知られている¹⁾。

縄文時代の遺跡は、4、5、8~17、19~22、24~31、33、34、36~39、41、44がある。その多くは前期に属する貝塚で、5の木津内貝塚では、覆土中に貝塚を持つ竪穴式住居跡が3軒検出された。貝種はアサリ、マガキ、シオフキガイを中心として、ナミマガシワガイ、ハマグリ、ハイガイ、サルボウガイ、アカニシの8種類が出土している。住居内からは黒浜式、諸磯式、浮島式土器が出土しており、繊維を含む浮線文の諸磯式土器が出土し注目されている²⁾。13の目沼貝塚では、2か所の貝塚が調査され、竪穴式住居跡覆土にハマグリ、ハイガイ、サルボウ、マガキ、オキシジミ、マラガイ、ヘナタリ等の貝と花積下層式土器が出土している³⁾。19の鷺の巣貝塚でも同様な遺構が2か所調査され、ハイガイ、ヤマトシジミ、カキ、ハマ



第1図 遺跡位置図



第2図 周辺の遺跡分布図

グリ等の貝と関山式土器が出土している。⁴⁾ 36の神明貝塚は後期に属する貝塚で、外径が東西120m、南北160mの環状貝塚である。貝層下には住居跡や土坑群が存在し、堀之内I・II式、加曾利B I・B II式土器と、ヤマトシジミを主体として、アカニシ、ウミニナ、カキ、サルボウ、ハイガイ、ハマグリ等の貝や獸骨、魚骨、鳥骨等が出土している⁵⁾。その他9、10~17、20~22、24~26、28、31、37、38、44においても貝塚が確認されている。

縄文前期・中期に飛躍的に増加した集落・貝塚は、後期に入ると激減し、36~38に分布が確認されただけである。晩期および弥生時代の遺跡はいまのところ確認されていない。

当地域に再び集落が営まれるようになったのは、古墳時代に入ってからである。前期の集落跡は3、6、19と少ない。3の上椿遺跡では五領期2軒、和泉期3軒の竪穴住居跡が確認されている⁶⁾。後期の集落跡は3、19、23、38、41~43がある。上椿遺跡では8軒、43の陣屋遺跡では3軒の鬼高期の竪穴住居跡が確認されている。陣屋遺跡では住居跡の覆土中から金環が出土している⁷⁾。

古墳は6~8、32、35、45で確認されている。7は目沼古墳群で、前方後円墳2基を含む20基の古墳が確認されている。時期は竪穴式石室で銅鏡を出土した瓢箪塚が5世紀末~6世紀初頭で古く⁸⁾。新しいものは7世紀末に及ぶと考えられている⁹⁾。32、35は木野川古墳群で、9基確認され、時期は古墳時代終末期と考えられている¹⁰⁾。

奈良・平安時代の遺跡としては、2~4、10、13、18、20、30、37~40、42、43があり、数多く発見されている。上椿遺跡ではこの時期の竪穴住居跡が1軒検出されている¹¹⁾。

鎌倉時代以降の遺跡は現在のところ下椿遺跡での発見が唯一である。鎌倉時代の当地周辺は「吾妻鏡」の記載事項から下総国下河辺荘に属していたようであり¹²⁾。同時代の遺物として鷺の巣では永仁7(1299)年の銘を持つ板碑が存在する¹³⁾。

室町時代に入ると九州探題として大宰府に赴いていた一色氏が本領である幸手に応永6(1339)年に戻り、留守中杉戸の高野に砦を構えていた藤堂左衛門尉長泰を攻めた。その後一色氏は鎌倉(古河)公方足利氏と関係していたが、天文23(1554)年北条氏康の古河城攻略の時に攻められ、一色氏は公方家とともに北条氏の支配下に入った¹⁴⁾。この時代の遺物として椿で応久12・16(1405・1409)年の銘、鷺の巣では延徳2(1490)年の銘を持つ板碑が存在する¹⁵⁾。

近世における当地域は下総国葛飾郡庄内領にしていた。また当地域は利根川の改修による影響を受けたところでもあった。利根川の改修は文禄3(1594)年に第1次改修が行なわれ、利根川の主流が当時の渡良瀬・庄内太日川(現在は中川と呼ばれている庄内古川と江戸川の下流域)筋に流され利根川となったが、出水するので元和7(1621)年に利根川と渡良瀬川の流れを常陸川に筋に流すようにした。しかし常陸川筋が整備されていないため失敗し、庄内領を乱流してしまった。その後寛永12(1635)年から18年にかけて関宿一金杉間に水路が開かれ(現在の江戸川)さらに承応3(1654)年に利根・渡良瀬両川の流れが常陸川、鬼怒川筋を通り太平洋に流されるようになり庄内川は古川となり安定した¹⁶⁾。

以上、下椿遺跡周辺の歴史的景観をみてみたが、低地部分には発見された遺跡が少ない。しかし、上椿遺跡や、下椿遺跡などの低地にも遺跡が存在することから、低地部分に数多くみられる自然堤防上¹⁷⁾の多くに、古墳時代以降の集落が営まれていた可能性が極めて高いと考えられる。

引用・参考文献

- 1) 庄和町風早遺跡調査会『風早遺跡』1979.
- 2) 杉戸町木津内目沼遺跡調査会『木津内貝塚』埼玉県北葛飾郡杉戸町文化財調査報告書第4集, 杉戸町教育委員会, 1981.
- 3) 杉戸町教育委員会『杉戸町目沼遺跡』埼玉県北葛飾郡杉戸町文化財調査報告書第1集, 杉戸町教育委員会, 1964.
- 4) 埼玉県教育委員会『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』II, 1979, p.54.
- 5) 埼玉県立浦和第一女子高等学校郷土研究部『埼玉県北葛飾郡庄和村西親野井 神明貝塚の発掘概報』1960.
庄和町教育委員会『神明貝塚』庄和町文化財調査報告第2集, 1970.
- 庄和町教育委員会『神明遺跡』一範囲確認調査一, 1979.
- 6) 埼玉県遺跡調査会『上椿遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第21集, 1974.
- 7) 埼玉県教育委員会『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』1973, pp.95~98.
- 8) 大塚初重『埼玉県北葛飾郡瓢箪塚古墳』『日本考古学年報』5.
- 9) 埼玉県教育委員会『古墳調査報告書』第三編, 1959.
前掲3)
- 蚊爪良祐「杉戸町目沼古墳群4・5・6号墳発掘調査報告」『埼玉考古』第6号, 1969.
- 杉戸町教育委員会『目沼8・9号墳』埼玉県北葛飾郡杉戸町文化財調査報告書第3集, 1981.
- 10) 埼玉県教育委員会『古墳調査報告書』第3編, 1959.
- 11) 前掲6)
- 12) 水原慶二監修『吾妻鏡』2 新人物往来社, 1977.
- 13) 杉戸町教育委員会『杉戸町の板石塔婆』郷土史料第5集, 1977.
- 14) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典』11埼玉県 角川書店, 1980.
- 15) 前掲13)
- 16) 本間清利『利根川』埼玉新聞社, 1980.
- 17) 埼玉県『土地分類基本調査 水海道・東京東北部・東京西北部』1980.

III 遺跡の概観

下椿遺跡は、庄内古川の左岸約500mの所に位置する。調査区域の北側には旧河川の流路が確認され、遺跡はその河川に一部切られた形で存在する。この河川は渡良瀬川（現在の庄内古川）の一支流であると考えられるが、本遺跡においては古墳時代後期の住居跡を破壊しており、江戸時代以後と考えられる溝が流路跡に重複している事や、17世紀中頃には利根川と渡良瀬川が現在の河道に変更され、庄内川は古川となった事実から、その流れた時期が推察出来る。

遺跡はこの河川が流れる以前の自然堤防上に分布する。標高は遺構検出面が約5.9m、周辺の宅地・畠地が約6.5mであり、堤防外の低い水田面に近い比高差を持つ。用地内は土取りされていないとの事であったが、当地だけ周辺より低く、若干の表土の移動があったと考えられる。また用地両端には側溝が既に作られており、遺跡上にも耕作やごみ穴等によってかなり破壊されている。

検出された遺構は、住居跡・土坑・溝である。

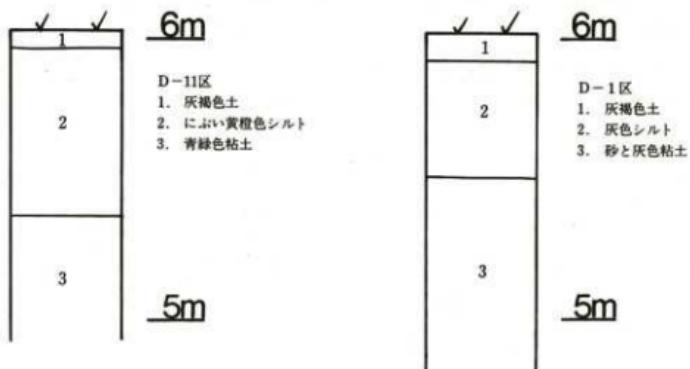
住居跡は遺物の出土が少ないものや、柱穴等の存在していない例もあるが、24軒確認された。また住居跡として確認されていないが、遺物が集中して出土した区域もあり、なお数軒の住居跡が存在していたものと考えられる。

土坑は平面形・断面形に違いがみられるが、古墳時代・中世および時期不明を含めて108基確認された。

溝は9本検出されており、そのうちの2本は幅1.5m前後と大きく、他の7本は幅60cm前後である。先の2本は中世、他の7本は近世以後と考えられる。

今回の発掘調査面積は、約9500m²である。当初は約22000m²であったが、調査の経過で述べたように遺跡外が多かったことにより面積は減少した。

遺跡内の地層断面は以下のとおりである。



第3図 土層断面図



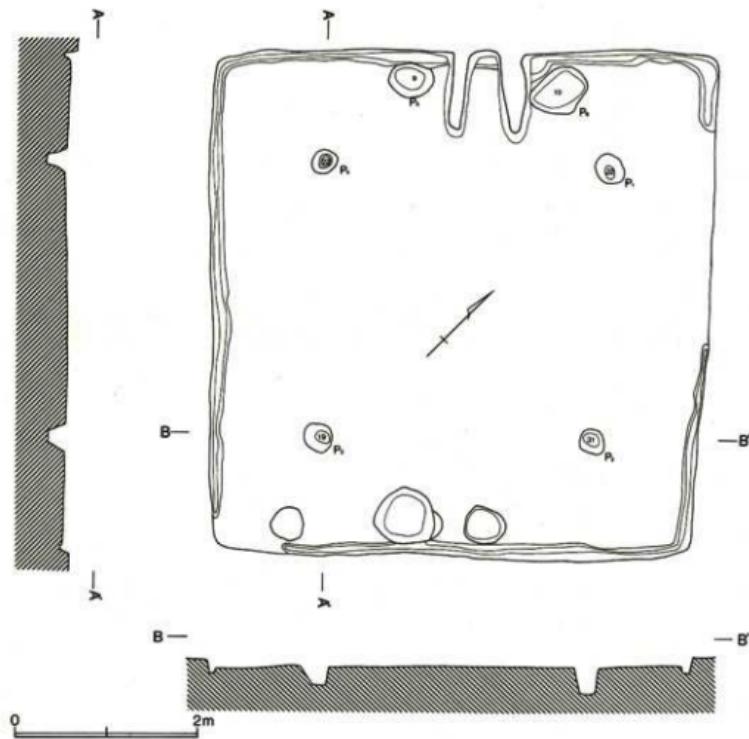
第6図 造構配図

IV 遺構と出土遺物

1. 住居跡

1号住居跡（第5図・第6図）

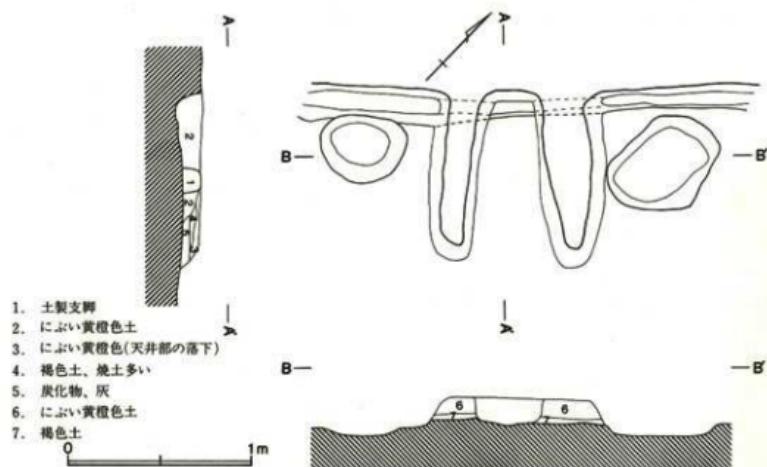
B-13-14区に位置し、96号、97号、98号土坑、19号住居が重複する。住居のプランはカマド対辺が短かい台形を呈し、規模は長軸5.50m、短軸5.42mを測る。カマドを通る主軸はN-45°-Wである。壁は残存状態の最も良好な部分で12cmを測る。覆土は図示しなかったが灰色のシルトを主体とし、上位はやや褐色を呈する。壁溝の存在する部分上は黒褐色のシルトである。



第5図 1号住居跡

ピットは6か所検出された。 P_1 ~ P_4 の主柱穴以外に、不定形で浅い P_5 と P_6 がカマド両脇に位置する。壁溝は東北壁の一部と南隅を除いて存在した。壁構内には特に付属施設は認められなかつたが、住居跡確認時に壁付近の覆土が黒色を呈し、周溝内へ続いている。カマドは北西壁中央部に付設され、両側壁ともにぶい黄橙色シルトで構築されるが、削平のため煙道部の存在は不明である。カマド下には壁溝が存在し、中央には土製支脚が存在した。もうく、取り上げる事が出来なかつたが、最大径約15cmの円筒状を呈していた。

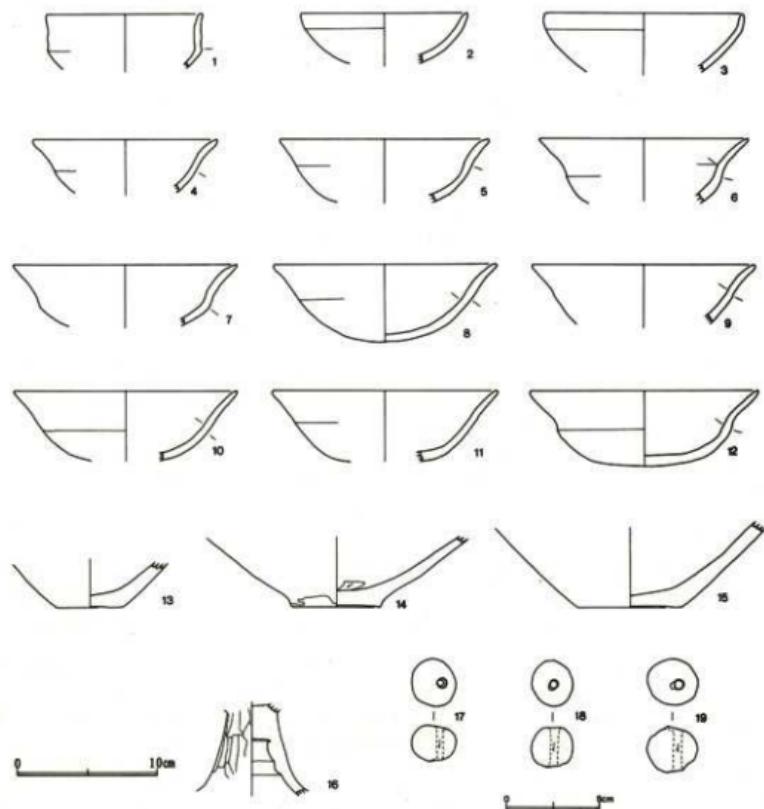
出土した遺物は杯、甕、高杯、土製玉、不明鉄製品があるが、いずれも覆土中である。



第6図 1号住居跡カマド

1号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径(11.2)	口縁部は垂直に立ち上り、端部近くで僅かに外反する。端部は平坦で、条線が2本走る。底部との境は棱で区別される。	内面：ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリ。	胎土：白色、黒色粒子含有。 色調：内面はにぶい橙色、外面は橙色。 残存状態：良好、口縁部1/7。
2	杯	口径(12.0)	口縁部は外傾するが、丸い底部からスムーズに端部に至る。端部は丸い。底部との境は内外面とも不明瞭。	内面：ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色重彩。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、口縁部1/6。



第7図 1号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	杯	口径(14.4)	口縁部は内済気味に僅かに外傾するが、丸い底部からスムーズに端部に至る。端部は丸い。口縁部と底部の境は内外面とも不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：内縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有。 色：内外面ともにぶい黄橙色。 残：不良、口縁部1/8。
4	杯	口径(13.2)	口縁部は外反し外傾する。端部は丸い。口縁部と底部の境は内外面とも不明瞭。	内面：ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ一部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明粒子含有。 色：内面にはぶい橙色、外面はぶい橙色一褐灰色。 残：不良、口縁部1/9。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	杯	口径(15.0)	口縁部は僅かに外反し外傾する。端部は丸い。口縁部と底部の境は内外面とも僅かな稜で区別される。	内面：口縁部ヨコナデ、底部斜方向へのヘラケズリ。 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：内面はにぶい橙色、外面はにぶい橙色～にぶい褐色。 残：不良、口縁部1/2。
6	杯	口径(15.0)	口縁部は底部との境付近で外反し、直線的に外傾して尖り気味の端部に至る。底部との境は僅かな稜を持つ。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、灰色半透明粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、口縁部1/5。
7	杯	口径(16.0)	口縁部は外反し外傾する。端部は尖る。口縁部と底部の境は僅かな稜で区別されるが、外面は不明瞭。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、口縁部1/8。
8	杯	口径(16.0) 器高 5.5	丸い底部から僅かな稜を経て外反し外傾する口縁部に至る。端部は丸い。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向にヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明粒子含有するが極めて僅か。 色：灰白色～灰黄色。 残：不良、1/4。
9	杯	口径(16.0)	口縁部は外反し外傾する。端部は丸い。口縁部と底部の境は内外面とも不明瞭。	内面：ヨコナデ。 外面：不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明粒子含有。 色：にぶい橙色～褐色。 残：不良、口縁部1/5。
10	杯	口径(16.0)	口縁部は外反し外傾する。端部は尖り気味。口縁部と底部の境は外面では僅かな稜で区別されるが、内面は不明瞭。	内面：ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：にぶい橙色～にぶい褐色。 残：不良、口縁部1/8。
11	杯	口径(16.2)	口縁部は外反し外傾する。端部は丸く修められている。口縁部と底部の境は外面では僅かな稜で区別されるが、内面は不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有、僅かに黒色がラス質粒子含む。 色：橙色～にぶい橙色。 残：不良、口縁部1/8。
12	杯	口径(16.4)	口縁部は底部との境付近で大きく外反した後、直線的に外傾し端部に至る。端部は尖る。口縁部と底部の境は外面は稜で区別されるが内面は不明瞭。	内面：ヨコナデ（底部中央付近不明）。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向にヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：にぶい黄橙色であるが、外面中央寄りは黒色。 残：不良、1/2（口縁部は1/5）。
13	甕	底径 (4.8)	わずかに上底となる平底。	内面：ヘラナデ。 外面：横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。底部	胎：透明白色、黑色粒子含有。 色：内面は橙色、外面はに

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
14	甕	底径 6.3	わずかに上底となる平底。	外面は木葉痕。 内面：ヘラナデ。 外面：底部寄りは斜方向のヘラケズリ、他は縦方向のヘラケズリ、底部外面不定方向のヘラケズリ。	ぶい黄橙色。 残：不良、底部完。
15	甕	底径 7.3	わずかに上底となる平底。	内面：ヘラナデ。 外面：不明。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：内面はにぶい橙色～橙色、外面は橙色～明赤褐色。 残：不良、底部完。
16	高杯		脚部短脚。脚部は開きながら据部に移行。	内面：輪積み痕残り、裾部にヘラナデが施される。 外面：脚部縦方向のヘラナデ。 杯部不明。	胎：白色、透明粒子、砂粒含有。 色：内面はにぶい橙色、外面はにぶい橙色～明赤褐色。 残：不良、脚部のみ。
17	土製玉	1.8-2.5 孔径 0.4 9.9g	僅かに扁平な球形。	指頭成形の後穿孔されていく。	胎：白色、黒色粒子僅かに含有。 色：にぶい橙褐色。 残：良好、完形。
18	土製玉	2.1-2.5 孔径 0.4 10.1g	僅かに扁平な球形	指頭成形の後穿孔されていく。粘土の接合部分が一部みられる。	胎：白色、透明粒子僅かに含む。 色：橙色～明褐灰色。 残：良好、完形。
19	土製玉	2.3-2.7 孔径 0.45 12.0g	僅かに扁平な球形。	指頭成形の後穿孔されていく。	胎：混入物少ない。 色：にぶい橙色～黒色。 残：良好、完形。

注

- 遺構内出土の遺物は、伴出関係の不明な覆土出土のものであっても遺構の項に示した。
- 遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の「新版標準土色帖」(1976)を用いて判別したが、土器の色調は部分により異なるため厳密とはいいがたい。
- 残存状態の基準については次のとおりである。

良：整形痕が明瞭に残る。

やや不良：胎土粒子離れ、整形痕はあまりはっきりしない。

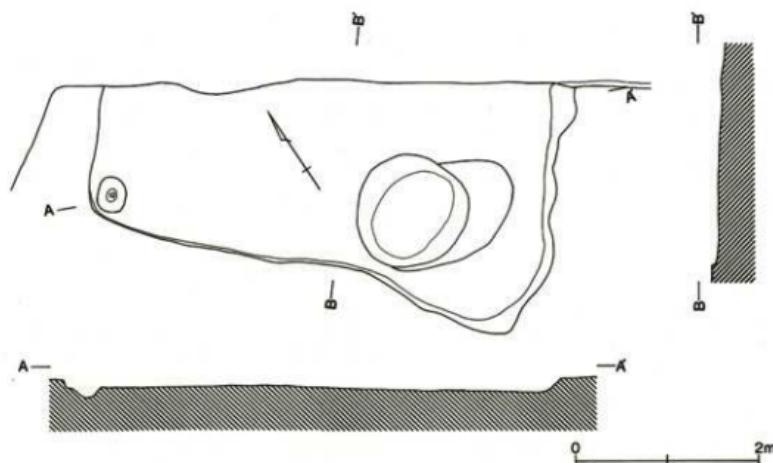
不良：くずれやすく、整形痕はほとんど不明。

2号住居跡（第8図）

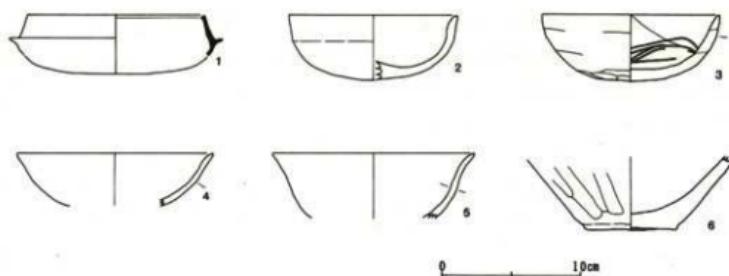
F—4区に位置し、39号土坑が重複する。流路跡により北東側が流失している。規模は残存部分で一辺約5.00mを測り、南隅部分が膨む。壁は残存状態の最も良好な部分で12cmを測る。覆土は灰色シルトである。

西隅にピットが検出されたが性格は不明である。壁溝、カマド、炉等は残存部分では検出されていない。

出土した遺物は杯、甕で、甕を除いて覆土中である。



第8図 2号住居跡



第9図 2号住居跡出土遺物

2号住居跡出土遺物觀察表（第9図）

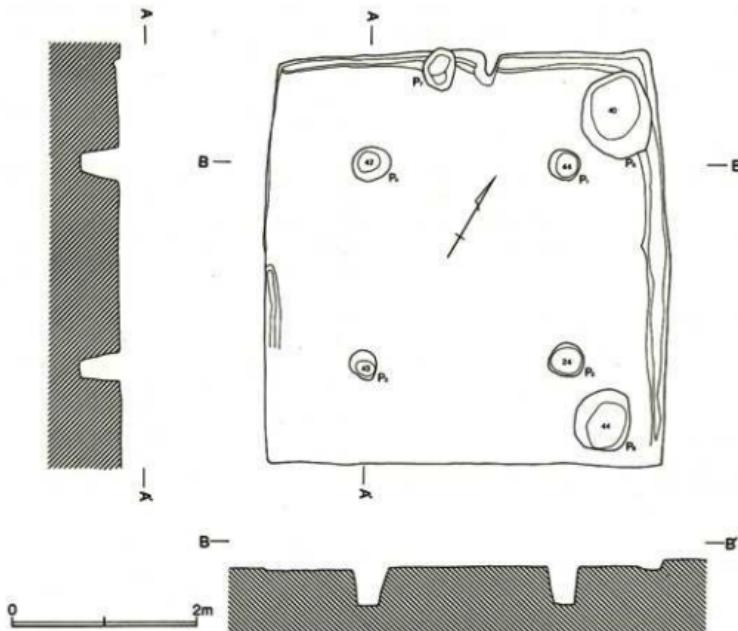
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径(12.8) 受部径 (15.4)	口縁部は長く、直線的に内傾し、端部は平坦で中央がやや突き出る。蓋受けはやや上方に突き出る。	内外面ともロクロ使用時のナデ。	胎：混入物ほとんど無く緻密。 色：暗青灰色。 残：良好、小破片。
2	杯	口径(12.2) 器高 4.6	口縁部は上方へ僅かに外傾しながら立ち上り、端部で少し外反する。器壁が厚く底部中央が盛り上る。底部との境は内外面とも不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデが施されるが不鮮明 外面：不明	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：橙色。 残：不良、1/5。
3	杯	口径(12.8)	丸い底部から境が不明瞭なまま内湾しながら外傾し、口縁部に至る。端部は尖り気味。全体的に器壁が厚い。	内面：不規則なヘラミガキ以外不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部下位不定方向のヘラケズリ。粘土帶の接合痕残る。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい褐色、底部外面は多くが黒色。
4	杯	口径(14.2)	口縁部は外反し、外傾する。端部は丸い。口縁部と底部の境は滑らかで内外面とも不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラミガキが施されるが不明瞭。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、1/6。
5	杯	口径(15.2)	丸い底部から口縁部は外反し、外傾する。端部は尖り気味。内外面とも口縁部と底部の境は不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明粒子含有。 色：内面は浅黄橙色、外面は灰白色～浅黄橙色。 残：不良、口縁部1/6。
6	甕	底径 6.5	僅かに上底となる平底。底部から上方方に立ち上がりた後、大きく開く胴部が続く。	内面：不明。 外面：縱方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色、透明、黒色。赤色粒子含有。 色：内面はにぶい黄橙色～褐灰色、外面はにぶい橙色～明赤褐色。 残：不良、底部完、床面出土（覆土中と接合）。

3号住居跡（第10図）

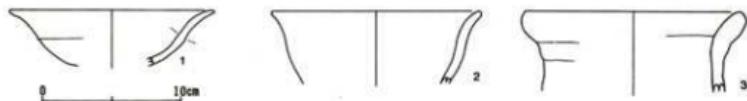
D-11、12区、E-12区に位置し、南東側壁は削平のため消失している。住居のプランはカマド対辺が長い台形を呈し、規模は、 $4.70m \times 4.70$ 前後と推定される。カマドを通る主軸はN-32°-Wである。壁のほとんどが削平され、北側の残存状態の最も良好な部分でも8cmを計る。覆土は灰色シルトで、黒褐色粒子を多く含有する。

ピットは7か所検出され、P₁～P₄が主柱穴であるが、P₅は他に比べて浅い。P₁・P₆はどちらも貯蔵穴風であるが、住居跡の覆土が浅いため、掘り込み面の確認が出来ず住居跡に伴うか否かは断定出来ない。P₇は後世の掘り込みである。壁溝は南西側の一部を除いて残存部分に存在する。1号住居同様カマド下にも周る。カマドは北西中央に付設され、両側壁ともによい黄橙色シルトで構築されている。残存状態は不良で、右軸が僅かに残るだけである。

出土した遺物は杯、甕、高杯脚部破片で、いずれも覆土中である。



第10図 3号住居跡



第11図 3号住居跡出土遺物

3号住居跡出土遺物観察表（第11図）

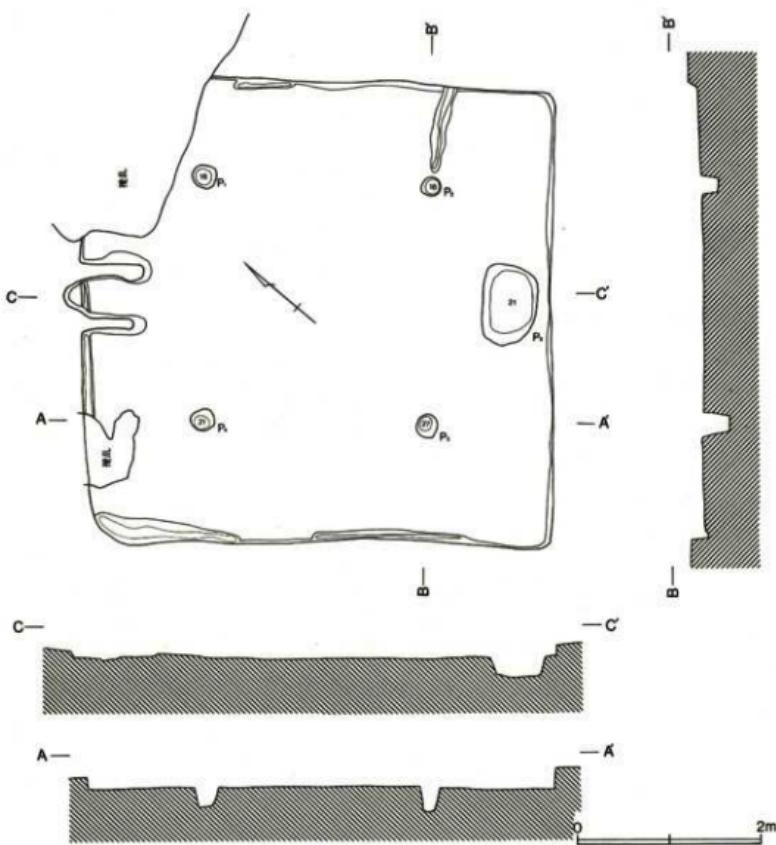
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径(15.4)	口縁部は上方に立ち上り、外反する。端部は丸い。口縁部と底部の境は僅かな棱で区別される。	内面：ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有。 色：にほい黄橙色～褐灰色。 残：不良：口縁部1/4。
2	甕	口径(14.6)	口縁部は外反し、端部は丸い。胴部は大きく張り、最大径を有する。	内外面：口縁部ヨコナデ、胴部不明。	胎：白色粒子含有。 色：橙色～にほい橙色。 残：不良、口縁部1/5。
3	甕	口径(20.0)	口縁部は肥厚して外厚し、端部は丸い。頭部も肥厚し、口縁部は屈折的に移行する。口縁部の端部寄りに一段弱い段がつく。	内面：口縁部ヨコナデ、頭部ヘラナデが施されるが不鮮明。 外面：口縁部ヨコナデ、頭部不明。	胎：白色粒子含有。 色：にほい橙色～赤灰色。 残：良、口縁部1/6。

4号住居跡（第12図・第13図）

D-12・13区に位置し、北隅と北西壁の一部が擾乱されて消失している。住居のプランはほぼ正方形を呈し、規模は長軸5.08cm、短軸5.00cmを測る。カマドを通る主軸はN-39°-Wである。壁は残存状態の最も良好な部分で23cmを測る。覆土は上位に灰を含み、灰色～にほい褐色のシルトである。

ピットは5か所検出され、P₁～P₄が主柱穴である。P₅は貯蔵穴で87×60cmを呈する。壁溝は南東壁を除いた3か所の壁に部分的に存在する。カマドは北西壁中央に付設され、両壁とも褐灰色シルトで構築されるが、床面との間に褐色土を挟む。煙道部は壁外に20cm程船先形に掘り込まれており、1、3号住同様カマド下には壁溝が存在する。またP₂と北東壁の間には間仕切りが確認された。

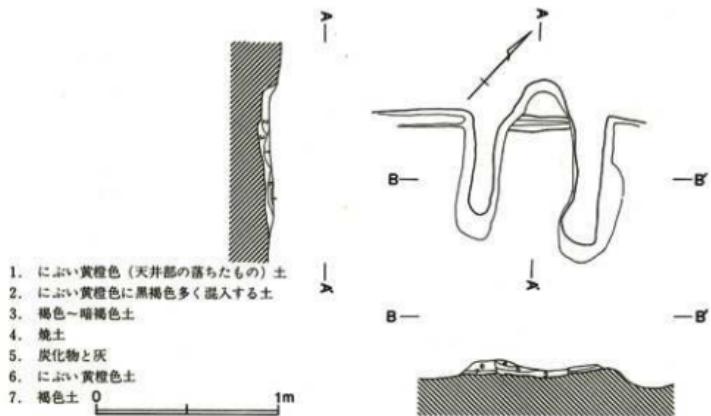
出土した遺物は杯、甕、瓶、土製玉の他鉄製刀子があるが多くが覆土中である。



第12図 4号住居跡

4号住居跡出土遺物観察表（第14図）

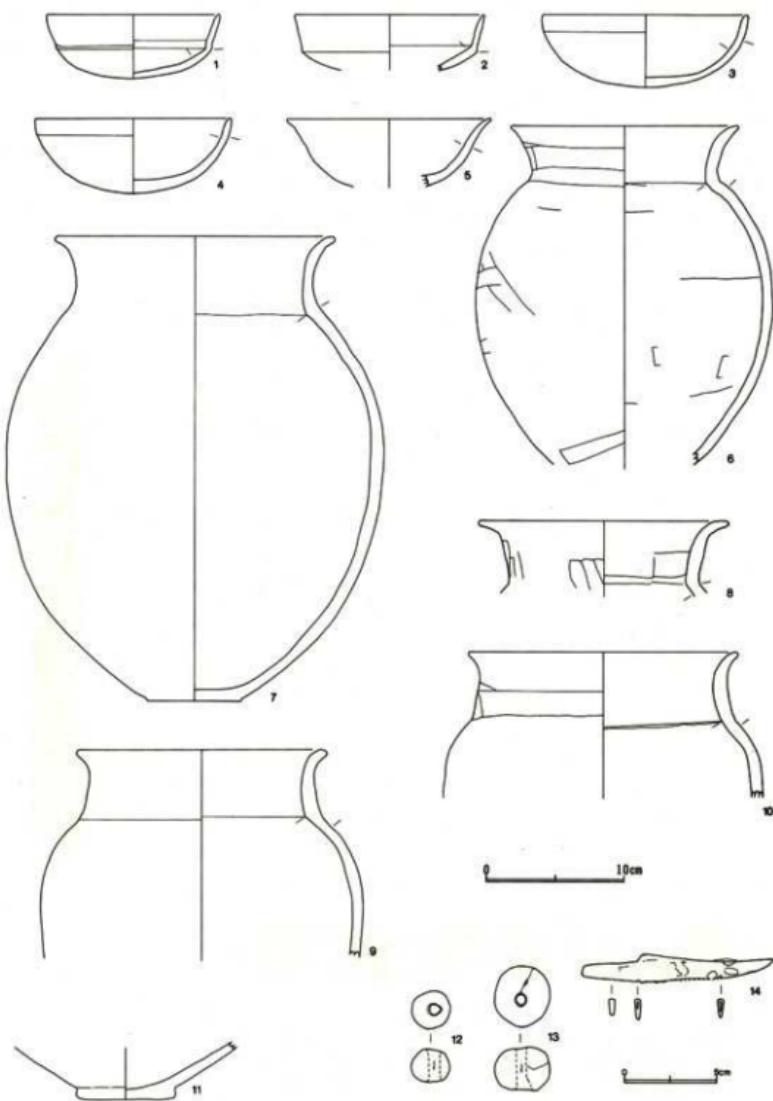
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径 12.6 器高 4.6	口縁部は底部との境付近で垂直に立ち上り、すぐ直線的に外傾する。端部は尖り気味。内外面とも口縁部と底部の境は明瞭な棱で区別される。	内面：口縁部ヨコナデ、底部途中までヨコナデ、中央寄りは不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部は不定方向へのラケズリが施されるが不鮮明。 内外面赤色塗彩。	胎：灰色半透明、黒色粒子・砂粒含有。 色：にぶい黄褐色。 残：不良、口縁部1/4欠。



第13図 4号住居跡カマド

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	杯	口径 13.8	口縁部は底部との境部分から外傾して立ち上る。端部は尖り気味で、つままれて薄くなる。内外面とも底部との境は明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、底部は不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部は横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色、黒色、赤色粒子・砂粒含有。 色：浅黄橙色～橙色。 残：不良、口縁部1/2。
3	杯	口径(14.3)	口縁部は内湾しながら外傾するが、丸い底部からスムーズに端部に至る。端部は丸い。口縁部と底部の境は内外面とも不明瞭。	内面：不明。 外面：口縁部にはヨコナデが施されるが不鮮明。他は不明。内外面赤色塗彩。	胎：白色、灰色透明粒子、砂粒含有。 色：内面は橙色、外面はにぶい黄橙色～橙色。 残：不良、3/5。
4	杯	口径 15.0	口縁部は内湾しながら外傾するが、丸い底部からスムーズに端部に至る。端部は丸い。底部は丸いがやや平坦。口縁部と底部の境は内外面とも不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、底部は放射状のヘラミガキが施されるが不鮮明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部は横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、灰色半透明、砂粒含有。 色：にぶい黄橙色、外面底部は黒色。 残：不良、3/5。
5	杯	口径 14.8	口縁部は外反し、外傾する。端部近くでさらに大きく外反する。端部は尖る。口縁部と底部の境は内外面とも不明瞭。	内面：不明。 外面：口縁部はヨコナデ底部に横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：内面はにぶい褐色～褐色、外面は明褐灰色、底部は黒色。 残：不良、口縁部1/4。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	甕	口径 16.6 胴部最大径 21.6	口縁部は外反しながら外傾し途中で肥厚する。端部は丸い。胴部は膨み中位に最大径を持つ。内外面とも頸部と胴部の境の線は明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部部分的にヘラナデ。 外面：口縁部3段にヨコナデ、胴部に斜あるいは横方向へのラケズリが施されるが不明。内外面に粘土帯の接合痕が残る。	胎：白色、赤色粒子含有。 色：内面はにぶい黄橙色～褐灰色、外面はにぶい黄橙色～橙色。 残：不良、口縁部完、胴部下位2/3、貯藏穴出土。
7	甕	口径 20.4	口縁部は胴部との境から外反しながら内傾した後、外傾する。端部は丸い。口縁部と胴部との境は内面は明瞭だが外面は不明瞭。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部不明。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子、砂粒含有。 色：内面はにぶい橙～褐灰色、外面はにぶい橙～黒褐色。
8	甕	口径(18.2) 頸径(13.8)	頸部は直線的に外傾し、口縁部は大きく横方向へ開き端部は丸い。頸部と胴部の境は不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、頸部縱方向のヘラナデ。	胎：白色、透明、赤色粒子砂粒含有。 色：明褐灰色～橙色。 残：不良、口縁部1/4。
9	甕	口径(18.1) 胴径(23.4)	口縁部は頸部状に内傾して立ち上り、端部近くで大きく外反する。端部は丸い。口縁部と胴部の境は後を有するが不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデが施されるが不明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部不明。	胎：白色、灰色半透明、透明含有。 色：橙色～褐灰色。 残：不良、口縁部1/2、胴部上位1/4。
10	甕	口径(19.6)	器形は9に似るが、口縁部の外反が若干弱い。口縁部と胴部の境は不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデが施されるが不明。 外面：口縁部2段にヨコナデ、胴部不明。口縁部内外面に粘土帯の接合痕残る。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：橙色～褐灰色。 残：不良、口縁部1/3。
11	甕	底径 7.2	底は平底で、上方に立ち上がった後、胴部は大きく開く。	内面：不明。 外面：胴部の底部寄りに縱方向へのラケズリが施されるが不明。	胎：白色、灰色半透明、赤色粒子含有。 色：にぶい橙色～橙色。 残：不良、底部完。
12	土製玉	1.8-2.1 孔径 0.6 6.7g	僅かに扁平な球形。	指頭成形の後穿孔されている。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい赤褐色～褐灰色。 残：不良、完形。
13	土製玉	2.3-3.3 孔径 0.65 24.1g	扁平な球形。	指頭成形の後穿孔されている。成形時に生じた粘土の接合部分が残る。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい橙色～褐灰色。 残：良、完形。
14	刀子	長さ 10.3 幅 1.5 厚さ 0.35	両開造りと考えられるが、刃部側の間は弱い。柄部はやや短かい。	断面は中空となっている。	ほぼ完形。



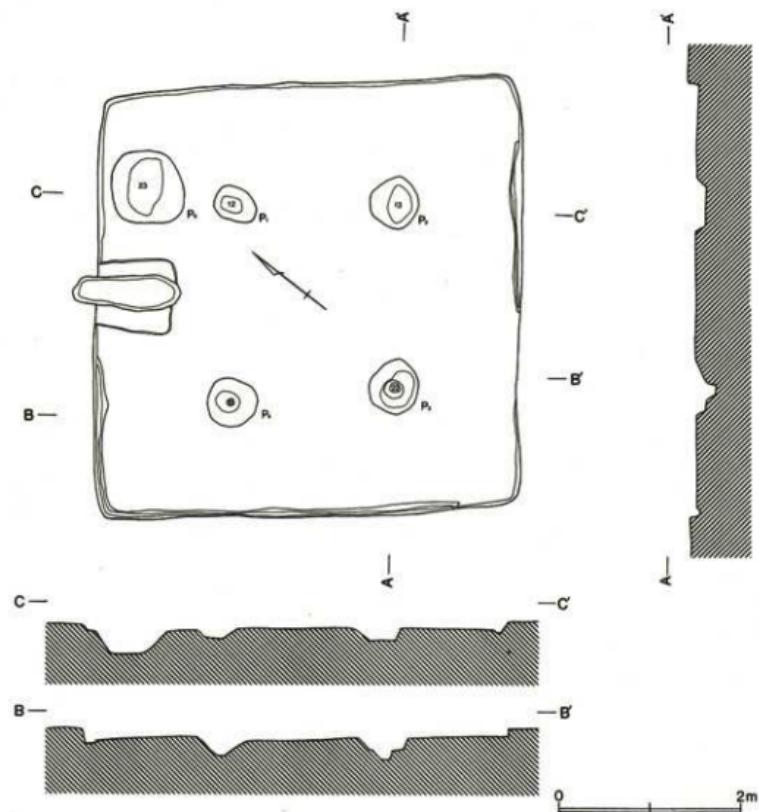
第14図 4号住居跡出土遺物

5号住居跡（第15図・第16図）

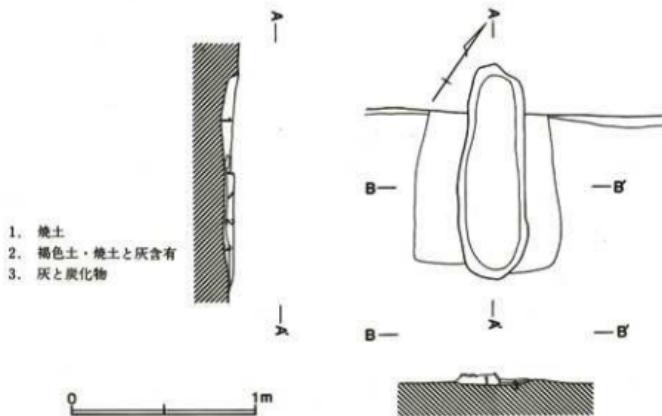
C-12・13区、D-12・13区に位置する。住居のプランはほぼ正方形を呈し、規模は長軸4.67m、短軸4.60mを測る。カマドを通る主軸はN-41°-Wである。壁は残存状態の最も良好な部分で12cmを測る。覆土は灰色～にい褐色のシルトである。

ピットは5か所検出され、P₁～P₄が主柱穴である。P₅は貯蔵穴で88×80cmを呈する。壁溝は北東壁を除いた壁に一部存在する。カマドは北西壁中央部やや北寄りに付設され、煙道部は壁外に25cm程掘り込まれているが、残存状態は不良で痕跡を残すだけである。

出土した遺物は杯、甕、鉢で、住居に伴うものが多い。



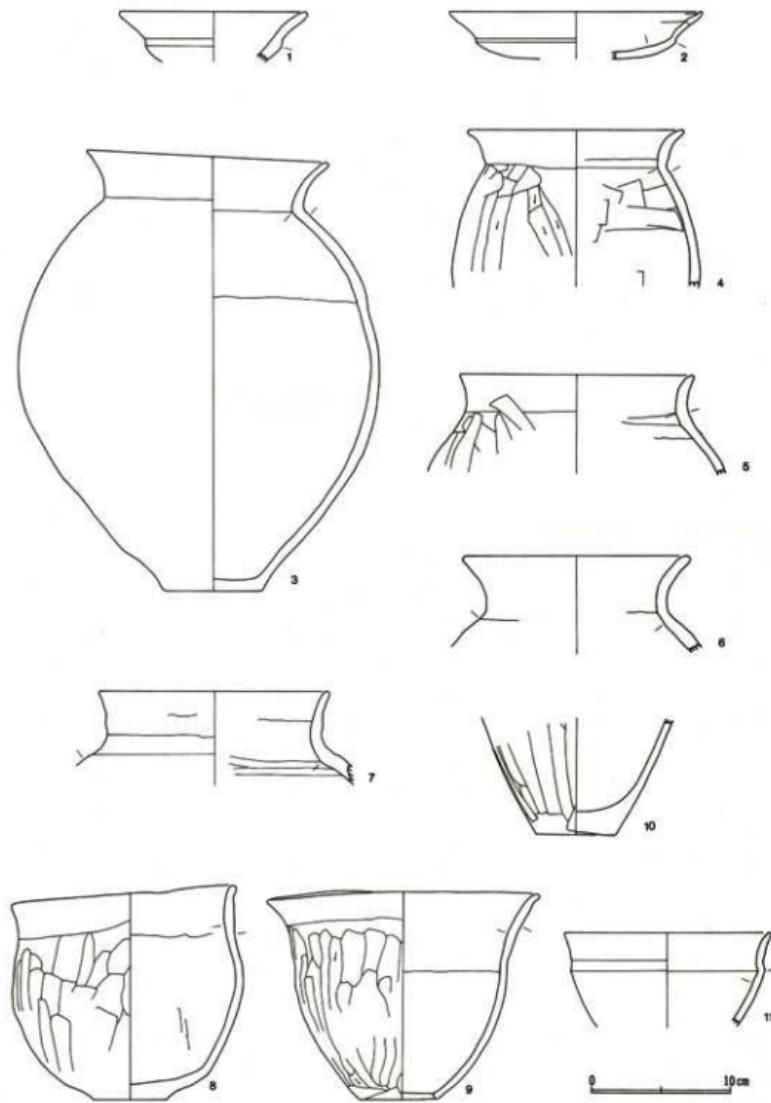
第15図 5号住居跡



第16図 5号住居跡カマド

5号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径(13.6)	口縁部は直線的に外傾する。端部は丸い。底部と口縁部の境は外面で明瞭な段となる。	口縁部外面にヨコナデ、他不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有、僅かに灰色半透明粒子含む。 色：にぶい橙色。 残：不良、1/6. P ₂ 出土。
2	杯	口径(18.2) 器高(3.4)	口縁部は外上方に大きく外傾する。端部は尖る。口縁部と底部の境は内外面とも明瞭で、外面は段となる。	内面：口縁部と底部の口縁部側にはヨコナデ、他は不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリ。	胎：白色、黒色粒子含有。 色：内面は橙色～明赤褐色 外面は橙色～灰赤色。 残：不良、破片。
3	甕	口径 17.5 胴部最大径 26.0 底径 7.0 器高 31.3	口縁部は外反しながら外傾する。端部は丸い。胴部最大径は中位にあり、僅かに尖り気味の平底の底部に至る。口縁部と底部の境は屈折的だが不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横あるいは斜方向のヘラナデ、粘土帶の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部口縁部から底部方向へのヘラケズリで一部口縁部に及ぶ。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：橙色・にぶい橙色、褐色、黒色。 残：不良、口縁部及び胴部一部欠。
4	甕	口径(15.6) 胴部最大径(17.8)	口縁部は外反しながら外傾する。端部は丸い。口縁部と底部の境は屈折的で明瞭である。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラミガキ。粘土帶の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縱方向のヘラケズリで口縁部側は斜方向。	胎：白色、透明粒子含有。 色：橙色・にぶい橙色、黒褐色。 残：不良、1/2、床面出土。



第17图 5号住居跡出土遺物

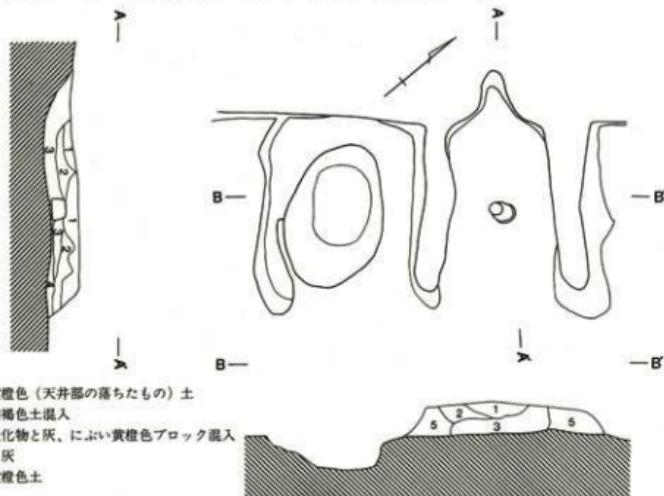
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	甕	口径(16.8)	口縁部は上方に直立した後外反する。端部は丸い。口縁部と胴部の境は滑らかで不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラミガキ、粘土帶の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ、一部ヘラケズリ入る、胴部斜・縱方向のヘラケズリ。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：明褐色～橙色～にぶい橙色、赤灰色。 残：不良、口縁部1/4。
6	甕	口径(16.4)	口縁部は外反しながら外傾し、端部まで器壁厚く、丸く修められている。口縁部と胴部の境は不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部不明。	胎：白色粒子含有。 色：内面は灰赤色、外面は橙色～にぶい橙色。 残：不良、口縁部1/4、カマド内出土。
7	甕	口径(16.4)	口縁部は外反しながら外傾する。口縁部中位で肥厚し丸い端部に至る。口縁部と胴部の境は、内面では滑らかで不鮮明であるが、外面では不明瞭な段となる。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。粘土帶の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部不明であるが、口縁部ヨコナデが一部続く。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、口縁部1/2、貯藏穴出土。 口縁部外面赤色塗彩？
8	甕	口径 14.8 ～16.0 底径 4.9 ～5.7 器高 14.0 ～15.1 胴径 15.2 ～17.0	口縁部は肥厚して上方に延び、端部近くで外反し、丸い端部へ至る。胴部からやや尖り気味に平底の底部に至る。全体的にいびつで、口縁部もやや波をうつ。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横あるいは斜方向のヘラナデ。口縁部と胴部の境部分に粘土帶の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ後胴部に斜方向のヘラケズリ。胴部下位、底部不明。	胎：白色、透明粒子含有。 色：内面はにぶい橙色～にぶい赤褐色、外面はにぶい橙色～赤褐色。 残：不良、完形、貯藏穴出土。
9	瓶	口径 18.6 ～19.4 孔径 4.0 器高 14.3 ～15.0	口縁部は外反しながら外傾し丸い端部に至る。胴部粘土帶の接合部分に棱を持つ、内外面とも口縁部と胴部の境は滑らかで不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横、斜方向のヘラナデ。粘土帶の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデの後胴部縱方向のヘラケズリ。	胎：白色、透明粒子含有。 色：内面はにぶい褐色～灰赤色、外面はにぶい褐色～にぶい赤褐色。 残：不良、完形、貯藏穴出土。
10	甕	底径 5.8	底部はやや上底の平底で、器壁は厚い。胴部はあまり丸くならない。	内面：不明。 外面：縱方向のヘラケズリ底部は不明。	胎：白色、透明粒子含有。 色：内面はにぶい赤褐色～橙色、外面はにぶい橙色。 残：不良、底部1/2、カマド内出土。
11	鉢	口径 14.8	口縁部は底部との境部分から、内傾するが、外反するため、次第に外傾する。口縁部と底部の境は、外面では明瞭な棱として残るが内面は不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、底部は底方向のヘラミガキが施されるが不鮮明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリ、内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明粒子含有。 色：内面は赤色(塗彩)、黒褐色、外面はにぶい橙色、赤褐色、黒褐色。 残：やや不良、口縁部完、カマド内出土。

6号住居跡（第18図・第19図）

D-12区、E-12・13区に位置する。住居のプランは南壁隅が一部突出するが正方形に近く、規模は長軸7.04m、短軸6.70mを測る。カマドを通る主軸はN-40°-Wである。壁は残存状態の最も良好な部分で24cmを測る。

ピットは6か所検出された。P₁～P₄が主柱穴、P₅の貯蔵穴は130×82cmを呈し、北東壁に遺物が付着していた。P₆はピット上および付近に土器が置かれていた。大形住居であるが壁溝は存在しない。カマドは北西壁中央部に付設し、にぶい黄橙色シルトで構築され、船先形に煙道部が掘り込まれている。カマド中央には支脚用に作られた鉢形土器が置かれ、燃焼部が焚口部より高くなっている。南側壁隅が突出しており、土坑の重複とも考えられるが、床面の高低差や覆土の違いがほとんどみられなかった。

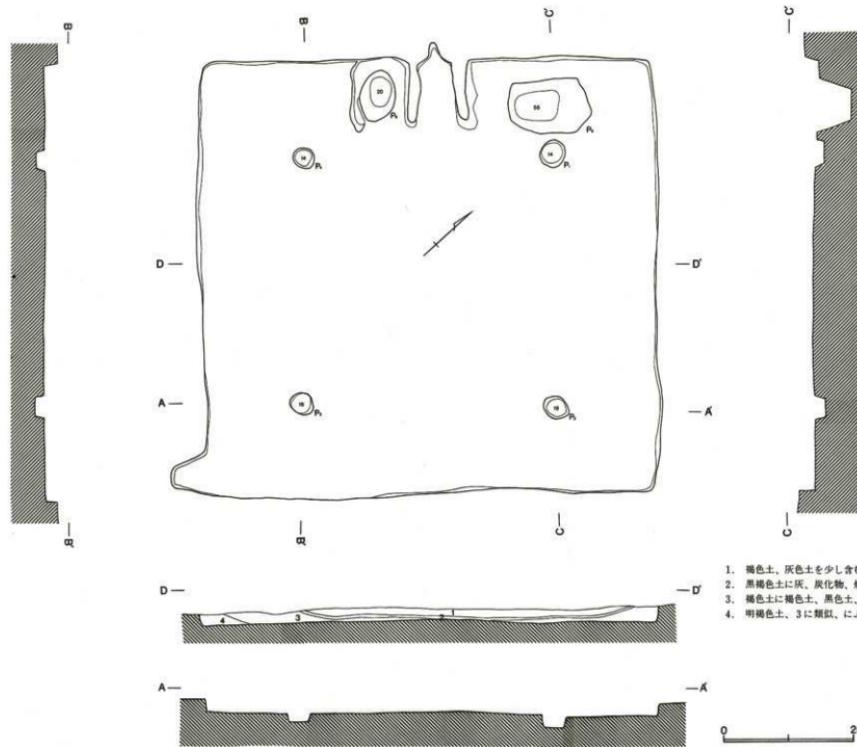
出土した遺物は杯、碗、甕、皿、高杯、壺、甕、手捏、支脚、紡錘車、土製円板、土製玉があり、住居に伴うものは多い。貯蔵穴出土のものは北東壁に付着していた。



第18図 6号住居跡カマド

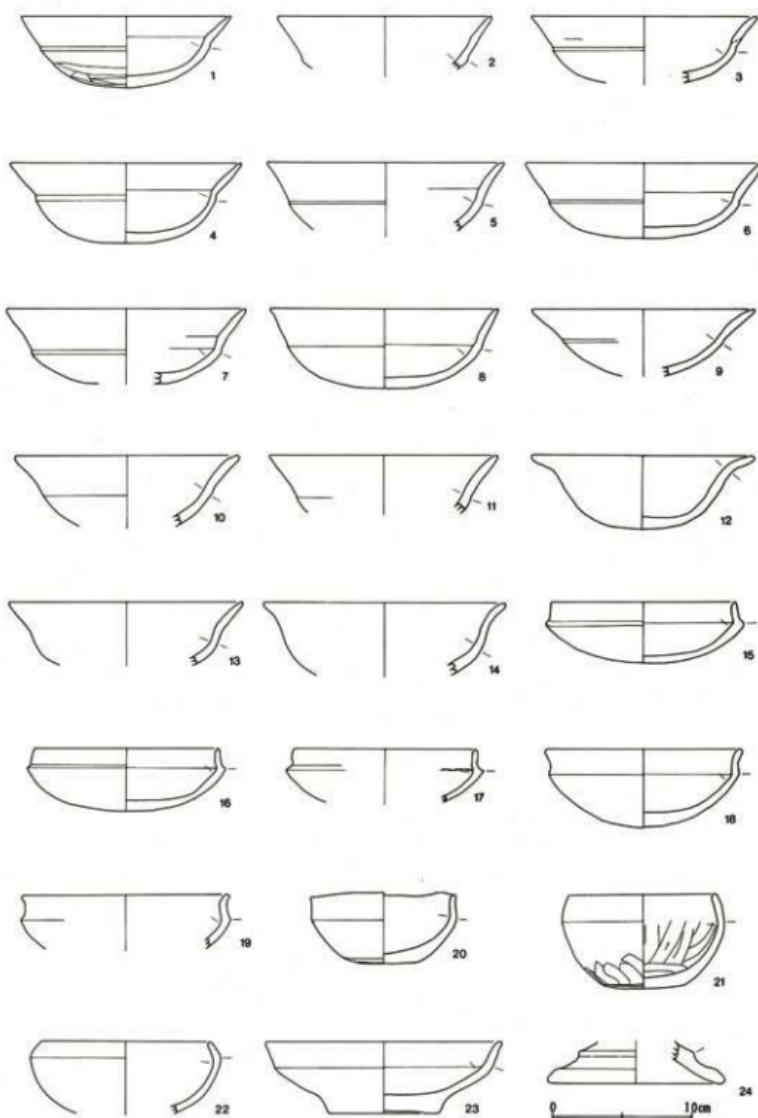
6号住居跡出土遺物観察表（第20図～第22図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径 15.0 器高 5.1	口縁部は直線的に外傾し、端部は尖る。底部から口縁部への移行は屈折的で、内外面とも明瞭な段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部塗色の為不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ、内外面赤色塗彩	胎：白色。透明粒子含有。 色：内面はにぶい橙色、外面はにぶい橙色～黒色。 残：良好であるが、口縁部は剥離がはげしい。完形。
2	杯	口径(15.4)	口縁部は直線的に外傾し、端部は丸い。底部から口縁部への移行は屈折的で、内外面とも明瞭な段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部塗色の為不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ、内外面赤色塗彩	胎：白色、灰色半透明、赤色粒子僅かに含有。

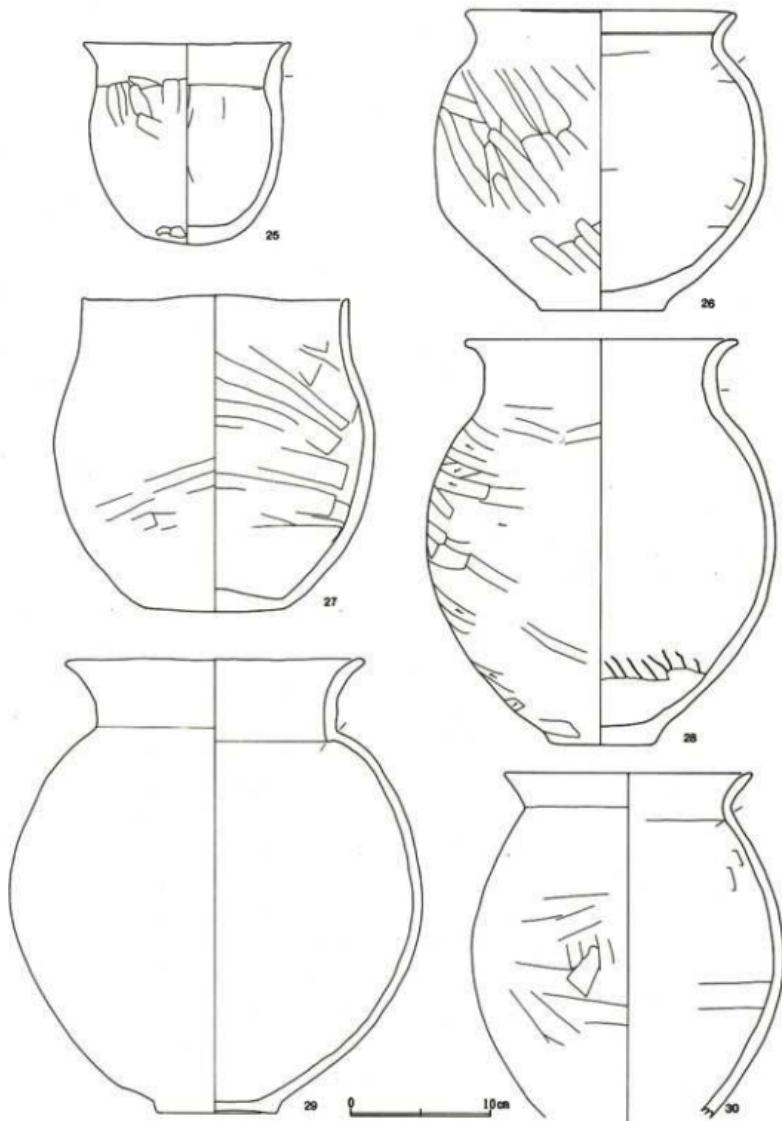


1. 黄色土、灰色土を少し含む
2. 黑褐色土に灰、炭化物、块土を多く含む
3. 黄色土に褐色土、黑色土、にじい黄褐色土粒子多く含む
4. 明褐色土、3に類似、にじい黄褐色土粒子更に多い

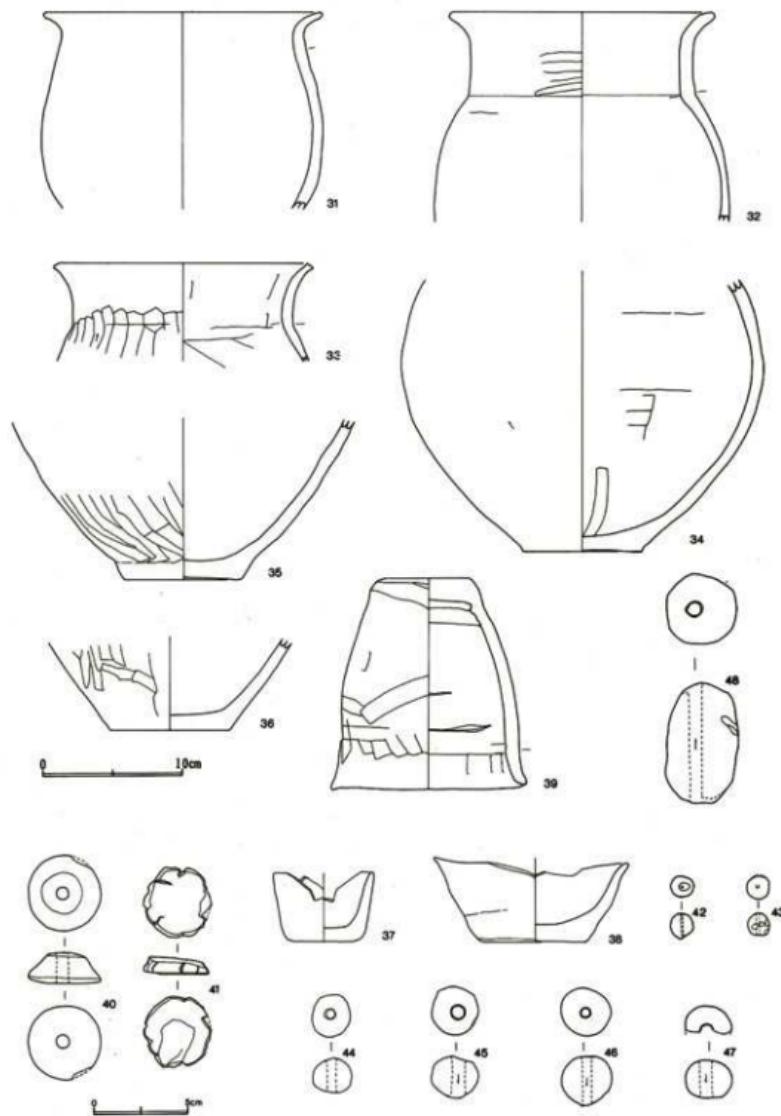
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			部への移行は内面は滑らかで、外面は段となる。		色：淡橙色。 残：良好、1/8。
3	杯	口径(6.2)	口縁部は外反し、外傾する。端部は丸い。底部から口縁部への移行は内面は滑らかで、外面は段となる。	内外面とも口縁部ヨコナデ、底部不明。口縁部中位に粘土帯の接合痕ある。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有。 色：明褐灰色。 残：不良、1/2。
4	杯	口径 16.6	口縁部は直線的に大きく外傾し、端部は尖る。底部から口縁部への移行は屈折的で、外面は段となる。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。	胎：白色、灰色半透明、赤色粒子含有。 色：橙色。 残：不良、1/2。
5	杯	口径(17.0)	口縁部は僅かに外反し、外傾する。端部は丸い。底部から口縁部への移行は外面で低い段を有する。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、半透明粒子含有。 色：にぶい橙色、外面一部黒色。 残：不良、1/6。
6	杯	口径(17.0) 器高 5.4	口縁部は直線的に外傾し、端部は丸い。底部から口縁部への移行は屈折的で外面は段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：にぶい褐色、外面に一部黒色。 残：やや不良、2/5。
7	杯	口径(17.2)	口縁部は僅かに外反し、外傾する。端部は丸い。底部から口縁部への移行は屈折的で、外面は段を有する。	内外面とも不明。	胎：白色、赤色、黒色粒子含有。 色：灰白色～淡橙色で一部外面に黒色。 残：不良、1/3。 カマド左出土。
8	杯	口径 16.4	口縁部は直線的に外反し、外傾する。端部は丸い。底部から口縁部への移行は屈折的で、内外面に棱を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色、赤色粒子含有。 色：にぶい橙色～明褐灰色で外面底部中央は黒色。 残：不良、底部内面はほとんど剥落、1/2、貯藏穴出土。
9	杯	口径 16.0	口縁部は直線的に大きく外傾し、端部は丸い。底部から口縁部への移行は滑らかで、外面に棱を有する。	内外面とも口縁部ヨコナデ底部不明。	胎：微細な透明、黒色粒子僅かに含有。 色：にぶい橙色～褐灰色。 残：不良、1/2。
10	杯	口径(16.2)	口縁部は僅かに外反し、大きく外傾する。端部は丸い。底部から口縁部への移行は滑らか、外面に僅かな棱を有する。	内外面とも口縁部ヨコナデ底部不明、外面底部は光沢有する。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、黒色粒子含有。 色：内面はにぶい黄橙色、外面は褐灰色、黒色。 残：不良、1/4。



第20図 6号住居跡出土遺物(1)



第21図 6号住居跡出土遺物(2)



第22図 6号住居跡出土遺物（3）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	杯	口径(16.4)	口縁部は直線的に外反し、外傾する。端部は丸い。底部から口縁部への移行は滑らかで、外面に棱を有する。	内外部とも口縁部ヨコナデ 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：橙色。 残：不良、1/5。
12	杯	口径(16.0)	底部から口縁部への移行は屈折的であるが壁面は滑らかで境は不明瞭。端部は丸い。	内外面の口縁部に部分的にヨコナデが残るが、他は不鮮明。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：淡橙色～浅黄橙色、底部褐灰色。 残：不良、1/2。
13	杯	口径(16.8)	底部から口縁部へは滑らかに移行し、境は不明瞭、断面はS字状を呈する。端部はやや尖る。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ。	胎：白色粒子含有。 色：淡橙色～にぶい橙色。 残：不良、1/5。
14	杯	口径(16.8)	底部から口縁部へは滑らかに移行し、断面S字状を呈する。端部は丸い。	内外部とも口縁部ヨコナデ、底部不明。	胎：白色、赤色粒子含有。 色：内面は明褐灰色、外面はにぶい橙色。 残：不良、1/3。 内外面赤色塗彩？
15	杯	口径(13.2) 器高 4.4	口縁部は直立し、端部は尖る。口縁部と底部の境の段は鋭く、内面も屈折的で棱を有する。	口縁部ヨコナデ、底部不明。	胎：微細な透明、黒色粒子僅かに含有。 色：にぶい黄橙色～黒色。 残：不良、3/4、カマド左出土。
16	杯	口径(13.1)	口縁部は僅かに内傾して直立し、端部は尖る。口縁部と底部の境の段は鋭く、内面も屈折的で棱を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：微細な透明、黒色粒子僅かに含有。 色：褐灰色～黒色。 残：不良、口縁部1/4。 貯藏穴出土。
17	杯	口径(13.0)	口縁部は直線的に上方に延び、端部は尖る。口縁部と底部の境の段は高く鋭い。	内面：口縁部ヨコナデで底部との境を明瞭にするため小單位で押付けている。底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。	胎：微細な金雲母含有。 色：内面はにぶい黄橙色～橙色、外面は橙色～黒色。 残：不良、口縁部1/4。
18	杯	口径(14.2)	口縁部は外反し、端部は丸い。底部中央の器肉が厚い。口縁部から底部への移行は、内面では滑らかであるが、外面には棱を有する。	内外部とも口縁部ヨコナデ、底部不明。	胎：白色、透明赤色粒子含有。 色：内面は橙色～にぶい赤褐色、外面はにぶい黄橙色～橙色。 残：不良、口縁部1/9、底部1/3、床面出土。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
19	杯	口径(14.9)	口縁部は外反し、端部は丸い。口縁部と底部の境は内面では滑らかであるが、外面では棱を有する。	外面とも不鮮明。	胎：白色、透明赤色粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、口縁部1/5。
20	椀	口径 10.5 底径 4.6 器高 5.1	平底の底部から体部は内湾し、口縁部は直立して外反する。口縁部と体部の境は滑らかで明瞭な棱を有しない。	外面とも口縁部ヨコナデ、体部、底部は不明。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：にぶい橙色～褐灰色。 残：不良、完形、床面出土。
21	椀	口径(10.5) 底径 5.8 器高 6.7	平底の底部から体部は内湾し、口縁部へ僅かに屈折して滑らかに移行する。端部は丸い。	内面：口縁部ヨコナデ、体部、底部は楕、斜方向のヘラナデ。 外面：底部不定方向のヘラケズリ、体部下位は斜方向のヘラケズリ、上位は横方向のヘラケズリ。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：内面は橙色～褐灰色、外表面は橙色～黒褐色。 残：やや不良、口縁部1/4欠床面出土。
22	椀	口径(12.0)	内湾する底部から口縁部は屈折的に内傾するが、棱を有しない。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面、口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリ。	胎：微細な透明粒子含有。 色：内面はにぶい黄橙色、外表面はにぶい黄橙色～褐灰色。 残：不良、1/3。
23	皿	口径(17.0) 底径 8.0 器高 5.2	底部は突出し、外傾する体部へ滑らかに移行する。体部から口縁部へは屈折的で弱い棱を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、体部不明、底部木葉痕残る。	胎：白色、赤色粒子含有。 色：内面はにぶい橙色、外表面は灰白色で一部黒色。 残：不良、1/2。
24	高杯	底径 12.7	脚部は2ヵ所の段を持ち袖部へ移行する。器壁やや厚い。	内面：不明。 外面：ヨコナデ。	胎：白色、赤色粒子含有。 色：内面はにぶい黄橙色、外表面は橙色～にぶい橙色。 残：不良、3/4。
25	小形甌	口径 14.8	口縁部は胴部との境で肥厚し、やや尖る端部へ至る。胴部は僅かに膨らむ、口縁部と胴部の境は内面で棱を有するが、外面は滑らかである。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部、底部方向のヘラケズリ。	胎：白色粒子含有。 色：内面は下半が橙色～褐灰色、他が褐灰色～黒褐色で明瞭に異なる。外表面は上半が赤色～褐灰色で下半が褐灰色～黒色。 残：不良、完、カマド左、覆土出土。
26	甌	口径 19.4 底径 8.8 器高 21.4 胴部最大径	口縁部はほぼ直線的に外反し、端部は丸い。胴部中位に最大径を持ち、大きく膨らむ。底部は平底で、胴部	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横、斜方向のヘラナデ。 部分的に粘土帯の接合痕残る。	胎：白色、赤色、透明粒子含有。 色：内面は橙色で一部褐灰色、外表面はにぶい橙色で部

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
27	甕	口径(19.1) 底径 10.0 器高 22.6 胴部最大径 22.9	23.2 から突出する。口縁部と胴部の境は滑らかで、口縁部中位に沈線を有する。	外面：口縁部ヨコナデ。胴部斜方向のヘラケズリ。底部不定方向のヘラケズリ。 内面：口縁部不明、胴部横・斜方向のヘラナデ。	分的に橙色、黒色。 残：良好、完形、カマド左出土。
28	甕	口径 19.6 底径 7.0 胴部最大径 25.0 器高 28.9	口縁部はややコの字状を呈し、部位の移行は滑らかである。端部は丸い。胴部中位に最大径を有し、大きく膨らむ。底部は平底で胴部から突出する。	外面：不明。下半に粘土帯接合部を消すためのヘラナデ痕残る。 内面：不明。下半に粘土帯接合部を消すためのヘラナデ痕残る。	胎：白色、灰色半透明、黒色、赤色粒子僅かに含有。 色：灰白色、橙色、褐灰色。 残：不良、口縁部3/4欠、カマド左出土。
29	甕	口径 21.4 底径 8.5 胴部最大径 29.6 器高 32.4	口縁部は直線的に立ち上がった後、外反する。端部は丸い。胴部中位に最大径を有し、大きく膨らむ。口縁部と胴部の境は、外面では滑らかであるが、内面は段を有する。底部は上げ底。	外面：口縁部ヨコナデ、胴部不明。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部上半へラミガキが施されるが不鮮明。下半底部不明。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子(やや大きめ1~3mm)を含有。 色：にほい黄橙色~褐灰色。 残：不良、胴部部分的に欠、貯藏穴出土。
30	甕	口径 17.8 胴径 22.8	口縁部はくの字状に外反する。端部は丸い。胴部中位に最大径を有し、口縁部と胴部の境は屈折的だが滑らかである。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部横・斜方向のヘラケズリ。	胎：白色粒子含有。 色：にほい黄橙色一部褐灰色。 残：不良、胴部下半、口縁部1/2。
31	甕	口径(20.0) 胴部最大径 20.2	口縁部は短く、外反する。胴部から口縁部への移行は滑らかである。端部は丸い。	内面：口縁部ヨコナデが施されるが不鮮明。胴部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色粒子含有。 色：内面はにほい黄橙色~褐灰色、外面は橙色~褐灰色。 残：不良、1/4。
32	甕	口径(19.0) 胴部最大径 21.2	口縁部は直線的に上方にのび、端部近くで外反外傾する。端部は丸い。口縁部と胴部の境は内面に明瞭な棱を有するが、外面は滑らかである。	内面：口縁部ヨコナデ、直立部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、直立部部分的に横方向のヘラミガキ、胴部斜方向のヘラミガキが施されるが不鮮明。胴部に粘土帯の接合痕残る。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：橙色~褐灰色。 残：不良、1/4、カマド左出土。
33	甕	口径(18.6)	口縁部は外反し、端部は平坦でやや窪む。口縁部と底部の境は外面でやや屈折的	内面：口縁部ヨコナデの後胴部とともに横方向のヘラナデ。粘土帯の接合痕残る。	胎：白色粒子、砂粒や多く含む。 色：内面は橙色~赤灰色、

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			である。	外面：口縁部ヨコナデの後 口縁部下端に一部かかり、 縱方向のヘラケズリ。	外面は灰白色～橙色。 残：やや不良、1/4。
34	甕	底径 8.4 胴部最大径 (26.4)	胴部は中央で大きく膨らむ。 底部は僅かに上げ底であり、 胴部から僅かに突出する。	内面：胴部横方向のヘラナ デ、底部寄り縱方向のヘラ ナデ、粘土帶の接合痕残る。 外面：斜方向のヘラケズリ が施されるが不鮮明。底部 不定方向のヘラケズリ。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：内面はにぶい橙色、外 面はにぶい橙色～褐灰色。 残：不良、胴部下半1/4、カ マド左と床面出土。
35	甕	底径 8.2	底部は上げ底で、胴部から 突出する。	内面：横方向のヘラナデが 施されるが不鮮明。 外面：斜方向のヘラケズリ 底部不定方向のヘラケズリ。	胎：白色、透明、黒色、赤 色粒子を僅かに含む。 色：内面はにぶい橙色、外 面は褐灰色～黒色。 残：やや不良底部下半のみ カマド左と床面出土。
36	甕	底径(8.5)	底部は胴部から直線的に移 行し、平底である。	内面：不明。 外面：縱・斜方向のヘラケ ズリ、底部不明。	胎：白色、赤色粒子含有。 色：内面は灰白色～にぶい 黄橙色、外面は橙色～褐灰 色。 残：不良、1/4、貯藏穴出土。
37	手 捶		底部は平坦で、口縁部は直 線的に外傾する。端部はや や尖る。	内外面とも不明。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、1/3。
38	手 捶		僅かに上げ底の底部から直 線的に口縁部に外傾し、端 部近くで外反する。端部は 尖る。	内外面とも不明。	胎：白色、灰色半透明、透 明粒子含有。 色：にぶい橙色：橙色。 残：不良、口縁部3/4欠。
39	支 脚	下端径 13.0 上端径 6.2 器高 15.0	鉢形を呈するが、支脚用と して作成されていると考え られる。天井部は平坦で内 湾しながら外下方に開く。	内面：下端（口縁部）ヨコ ナデ後やや上に横方向のヘ ラナデ、胴部は斜方向のヘ ラナデ。 外面：下端ヨコナデ、胴部 下位上端部斜方向のヘラケ ズリ。胴部中位横方向のヘ ラケズリ。 内外面に粘土帶の接合痕残 る。	胎：白色、灰色半透明、透 明粒子含有。 色：にぶい橙色、部分的に 橙色、灰白色、黒色。 残：良好、完形。 カマド内出土。
40	紡錘車	上径 2.0 下径 3.8 器高 1.65 孔径 0.7	円錐柱形を呈す。	全面磨かれているが、特に 側面は横方向によく磨かれ ている。	色：オリーブ灰色～暗オリ ーブ灰色。 石質：滑石。

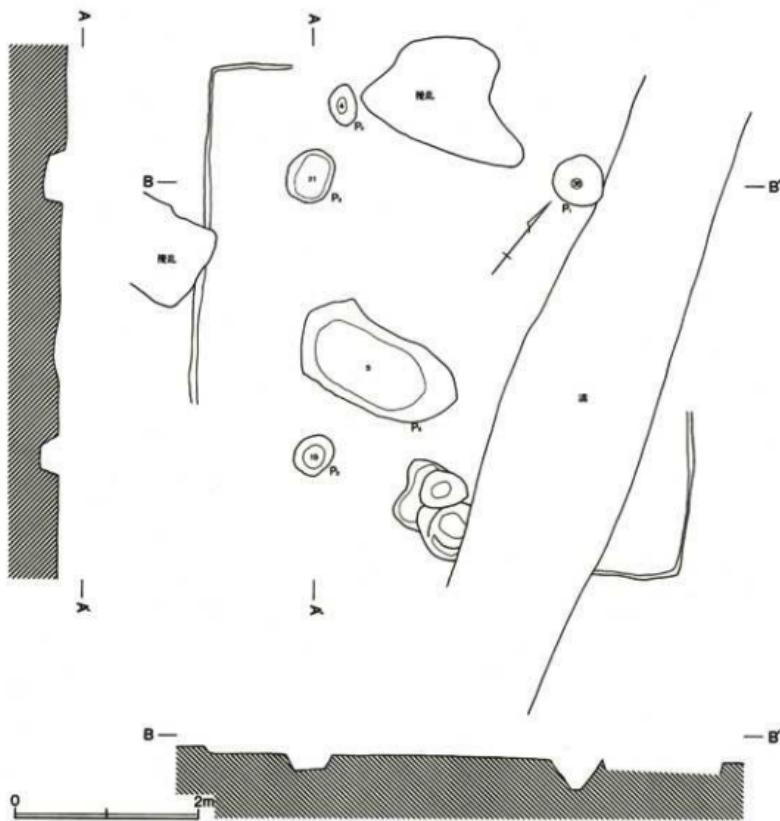
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
41	土製円板	直径 3.6 ~3.9 最大厚 0.9	周囲の形状、厚さに均一性はない。	粘土を押しつぶして作るが整形は不明。	胎：白色粒子含有。 色：にほい橙色～黒色。 残：不良、完形。
42	土製玉	1.4-1.1 孔型 0.1 1.6g	歪んだ球形。小形。	指頭成形の後穿孔されている。	胎：僅かに白色粒子含有。 色：灰黄褐色土。 残：不良、完形。
43	土製玉	1.2-1.2 孔型 0.15	球形。小形。	指頭成形の後穿孔されているが、押し窪めた部分もある。	胎：僅かに白色粒子含有。 色：黒色、断面明赤褐色。 残：やや不良、3/4。
44	土製玉	3.3-1.8 孔型 0.4 7.6g	歪んだ球形。	指頭成形の後穿孔されている。	胎：白色粒子含有。 色：褐灰色、黒褐色。 残：不良、完形。
45	土製玉	2.3-2.6 孔型 0.7 11.4g	歪んだ球形。孔端部は織られしている。	指頭成形の後穿孔されている。	胎：白色、灰色半透明粒子含有。 色：橙色～黒色。 残：不良、完形。
46	土製玉	2.6-2.7 孔径 0.5 16.1g	球形。	指頭成形の後穿孔されている。	胎：白色粒子含有。 色：黒色、断面灰褐色。 残：やや良好、完形。
47	土製玉	2.0-2.4 孔型 0.6	歪んだ球形。	指頭成形の後穿孔されている。	胎：白色粒子含有。 色：黒色、断面灰褐色。 残：不良、1/2。
48	土製玉	8.4-5.1 孔型 0.9 238g	大形で縦長である。	指頭成形の後穿孔されている。	胎：白色粒子含有。 色：にほい橙色で一部黒色。 残：不良、完形。

7号住居跡（第23図）

E-12区、F-12区に位置する。57号、58号、59号が重複する。住居のプランと規模は、攪乱や削平が多いが、おそらく一辺5.4m前後の正方形を呈すると推定される。主軸は北西壁を通るラインN-37°-Wである。壁は残存状態の最も良好な部分で8cmを測る。

ピットは5か所検出され、P₁～P₅が主柱穴である。他の1本は現代の溝によって消失している。P₄は焼土と炭化物を覆土としており、カマドの残存部分と考えられる。P₅は砂、シルト質土を覆土しており、上面は貼り床状となっているため、7号住に伴う土坑と考えたが、住居構築以前の可能性も否定できない。

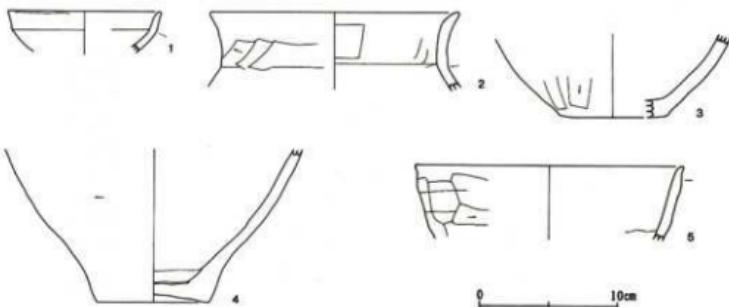
出土した遺物は杯、甕、鉢である。



第23図 7号住居跡

7号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径(11.0)	口縁部は直線的に外傾し、端部は丸く修められている。口縁部と底部の境は不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底へラケズリ。	胎：白色粒子含有。 色：内面はにぶい褐色～黒色。 外：外はにぶい橙色。 残：やや不良、口縁部1/4。 床面出土。
2	甕	口径(18.0)	口縁部は外反し外傾する。端部は丸い。口縁部と胴部	内面：口縁部ヨコナデの後横方向のヘラナデ。胴部不	胎：白色粒子含有。 色：内面はにぶい橙色、外



第24図 7号住居跡出土遺物

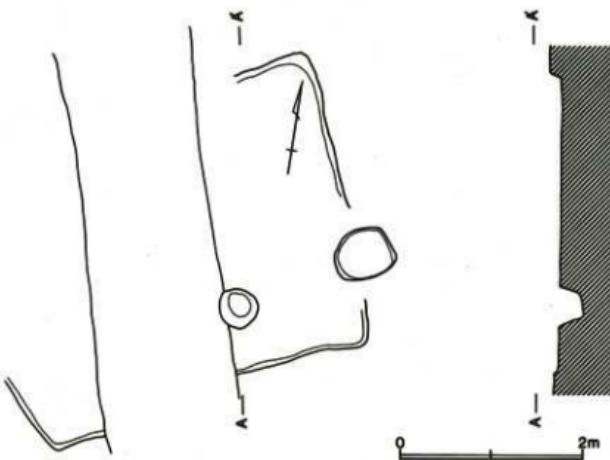
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	甕	底径 8.0	の壇は明瞭な棱で区別される。 底部は上げ底で、胴部から突出して移る。	明。 外面：口縁部ヨコナデ？の後横方向へのラケズリ。	面はにぶい橙色～褐灰色。 残：不良、口縁1/6、土坑出土。
4	甕	底径(7.4)	底部は平坦で、胴部から僅かに突出している。	内面：底部には粘土帯（左回り）の接合痕残る。整形不明。 外面：横方向へのラケズリが施されるが不鮮明。底部一方向へのラケズリ。	胎：黒色、白色、透明粒子僅かに含有。 色：内面はにぶい橙色、外 面は橙色～黒色。 残：不良、底部完、胴部下 半1/2。
5	甕	口径(19.4)	内湾気味に口縁端部に至るが、端部でつまれ細くなる。瓶の可能性がある。	内面：不定方向へのラナデ、 外面：縫方向へのラケズリ 底部は不明。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：内面は褐灰色、外 面は橙色。 残：底部1/2。
					胎：砂粒含有。 色：浅黄橙色～にぶい橙色 残：不良、口縁部1/7。

8号住居跡（第22図）

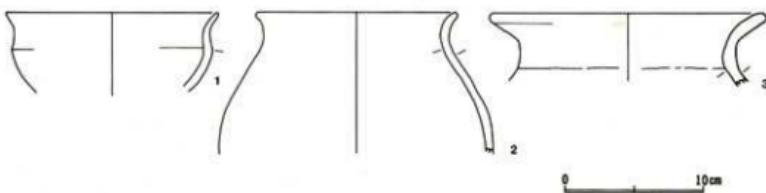
E-12・13区、F-12・13区に位置し、70号、71号土坑が重複する。住居の規模とプランは削平部分多く不明瞭であるが、おそらく3.7m×3m前後の長方形を呈すると考えられる。

柱穴、貯蔵穴、カマド、壁溝等検出されず、方向は他の住居跡主軸と異なり、東壁を通るラインはほぼ南北を通る。壁高は残存状態の良好な部分で12cmを測る。

出土遺物は杯、椀、甕があるが覆土中である。



第25図 8号住居跡



第26図 8号住居跡出土遺物

8号住居跡出土遺物観察表（第26図）

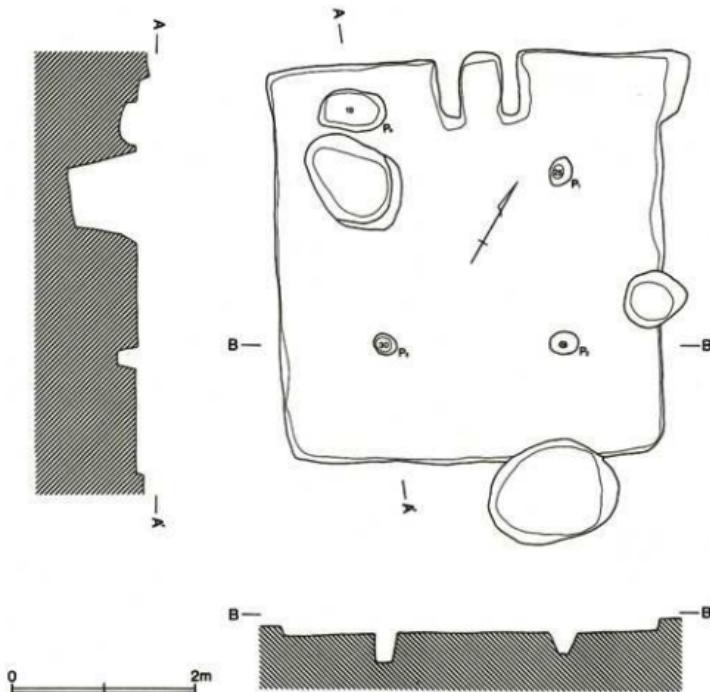
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径(14.8)	口縁部は外反し、外傾する。端部は尖り気味。口縁部と底部の境は内面は不明瞭であるが、外面は棱で区別される。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有。 色：内面はにぶい黄橙色、外面はにぶい赤褐色。 残：やや不良、1/12。
2	椀	口径(15.2)	底部から外面に僅かな棱を持つて外反する口縁部に至る。	内外面とも不明。	胎：白色粒子含有。 色：橙色～褐灰色。 残：不良、1/8。
3	椀	口径(16.4)	口縁部が極めて厚く、端部は丸い。口縁部と胴部の境は内面では棱で区別されるが、外面は不明瞭。	内外面とも不明。	胎：白色粒子含有。 色：内面は灰黄褐色、外面は橙色～灰黄褐色。 残：不良、1/7。

9号住居跡（第27図・第28図）

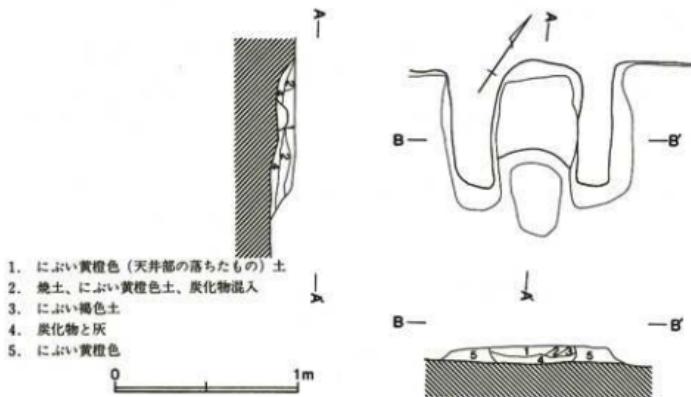
D-13・14区に位置し、51号、53号、94号土坑が重複する。住居のプランは北側壁隅が一部突出するが、ほぼ正方形を呈し、規模は長軸4.34m、短軸4.16mを測る。カマドを通る主軸はN-33°Wである。壁は残存状態の最も良好な部分で12cmを測る。覆土は灰色のシルトで、壁寄りは明褐色のシルトである。

ピットは4か所検出された。 $P_1 \sim P_3$ が主柱穴で、51号土坑によって主柱穴が1か所消失している。 P_4 は貯蔵穴で、 $74 \times 44\text{cm}$ を測る。壁溝は存在しない。カマドは北西壁中央部に付設され、カマド内中央やや奥寄りに土製支脚が存在する。また、焚き口部に対して燃焼部は6cm高くなっている。カマド上位が削平されているが、僅かに煙道部が壁外に突出している。袖は地山を掘り残して造られている。

出土した遺物は杯、甕、土製玉があるが多くは覆土中である。



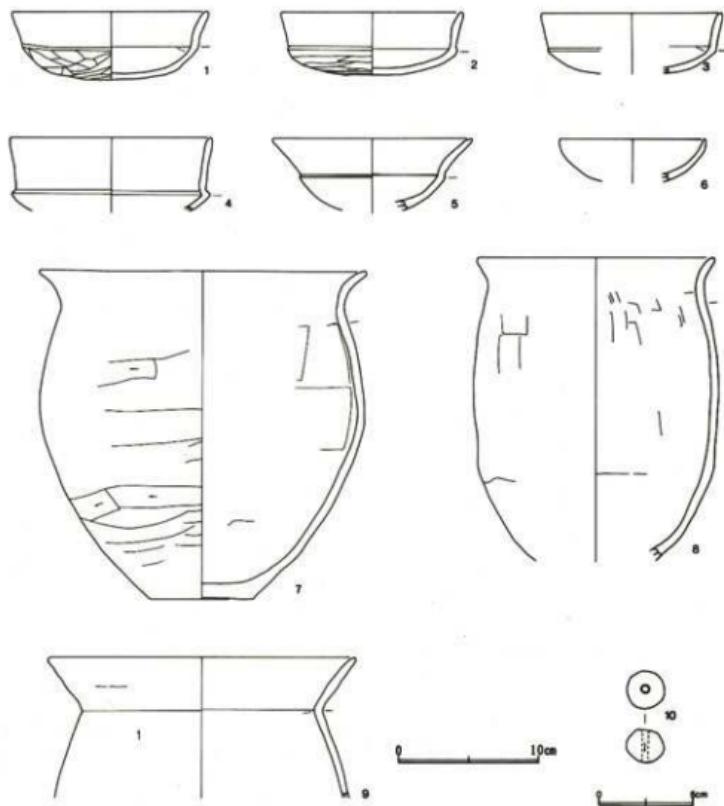
第27図 9号住居跡



第28図 9号住居跡カマド

9号住居跡出土遺物観察表（第29図）

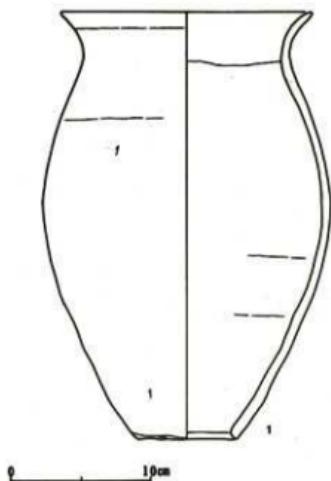
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径 14.0 器高 4.8	口縁部は直線的に外傾し、尖り気味の端部に至る。口縁部と底部の境は外面では棱を有するが、内面は滑らかである。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有、僅かに赤色粒子含む。 色：にほい橙色。塗色は明赤褐色。 残：良好。1/2。
2	杯	口径(12.6) 器高 4.4	口縁部は僅かに外反外傾する。端部は丸い。口縁部と底部の境は屈折的で、外面上では口縁部側に浅い沈線が巡る段を有する。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色、赤色粒子僅かに含有。 色：灰白色～橙色（内外面赤色塗彩？）。 残：不良、1/4、床面出土。
3	杯	口径(12.8)	口縁部は直線的に僅かに外傾し、凹む端部へ至る。口縁部と底部の境は屈折的で、外面上では口縁部側に浅い沈線が巡る段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：赤色粒子僅かに含有。 色：灰白色。 残：不良、1/4。
4	杯	口径(14.4)	口縁部は直線的に僅かに外傾し、長い。端部は平坦でやや凹む感じ、口縁部と底部の境は屈折的で、内外面とも外へ押し出して段を作っている。	内面：ヨコナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。	胎：白色、赤色粒子僅かに含有。 色：内面はにほい橙色、外面上は灰白色～にほい橙色。 残：不良、1/7。
5	杯	口径(14.2)	口縁部は口縁部と底部の境近くで外反した後、直線的	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底	胎：白色粒子含有、透明粒子も僅かに含有。



第29図 9号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	杯	口径(10.4)	に外傾し、丸い端部へ至る。 口縁部と底部の境は屈折的 で外面は段々と、内面は浅い 沈線を有する。	部不明。 内外面赤色塗彩。	色：灰白色～にぶい橙色。 残：不良、1/7。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	甕	口径 23.4 胴部最大径 23.2 底径 7.4 器高 23.4	胴部上位に最大径を持ち、口縁部へは滑らかに移行する。口縁部は外反し、端部は丸い。底部はやや上げ底である。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ、一部粘土帯の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラケズリ。	胎：白色；灰色半透明粒子微細な透明粒子僅かに含有。 色：黒褐色、部分的にぶい橙色～橙色。 残：やや不良、1/2。
8	甕	口径 17.0 胴部最大径 17.4	胴部上位に最大径を持ち、口縁部へは滑らかに移行する。端部は丸い。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縱方向のヘラケズリ。 内外とも胴部下位に粘土帯の接合痕残る。	胎：白色粒子含有、僅かに灰色半透明、透明粒子含む。 色：ぶい橙色～暗赤褐色。 残：やや不良、3/4。
9	土甕玉	口径 20.0	口縁部と胴部の境は屈折的で、くの字状となる。口縁部は直線的に外傾し、端部は丸く、僅かに外側につままれている。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縱方向のヘラケズリが施されるが不明。	胎：白色、黑色粒子、砂粒含有。 色：ぶい橙色～明赤褐色。 残：不良、口縁部一部欠。
10	土製玉	1.6-2.0 孔径 0.4 6.0g	扁平な球形。	指頭形成の後、穿孔されている。	胎：白色粒子含有。 色：明赤褐色～暗赤褐色。 残：不良、完形。



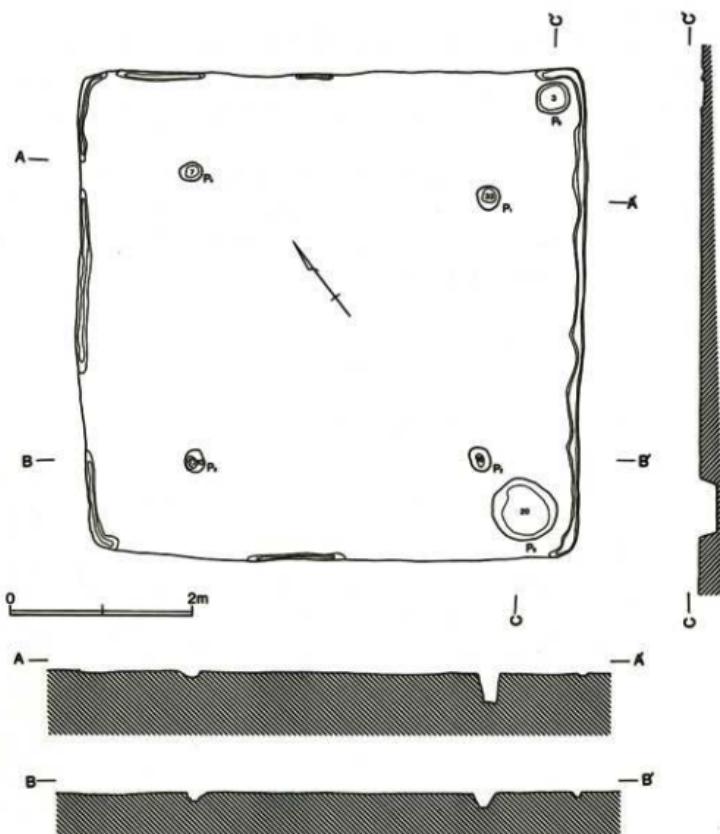
第30図 10号住居跡出土遺物

10号住居跡（第31図）

E-18・19区に位置する。住居のプランは正方形を呈し、規模は長軸5.58m、短軸5.34mを測る。北西壁を通る主軸はN-53°Wである。壁は削平のため消失している。

ピットは6カ所検出され、P₁～P₄が主柱穴である。P₅は貯蔵穴で73cm×64cmを呈する。P₆は性格不明である。壁溝は東南壁全面と、他壁の一部に存在する。炉、カマド等は検出されなかった。また、床は貼床されていた様であるが削平されておりはっきりしない。

出土遺物は貯蔵穴内の瓶と、少量の甕破片である。



第31図 10号住居跡

10号住居跡出土遺物観察表（第30図）

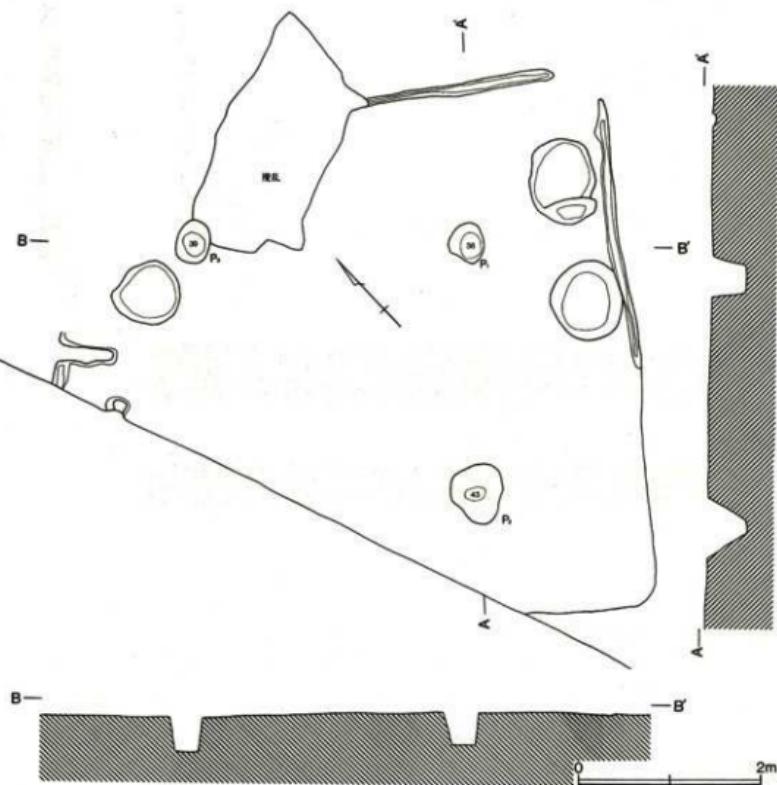
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	瓶	口径 18.0 胴部最大径 20.6 孔径 7.0 器高 30.4	長頸の胴部から曲線的に外反する口縁部に移る。内面 口縁部と胴部の境に稜を持つ。孔部は尖る部分と平坦な部分がある。	内面：不明。 外表面：口縁部不明、胴部縱方向のヘラケズリ、孔部周辺斜方向のヘラケズリ。粘土帶の接合痕残る。	胎：黒色粒子、砂粒含有。 色：灰白色～黒色。 残：不良、口縁部、胴部1/4欠、貯藏穴出土。

11号住居跡（第32図・第33図）

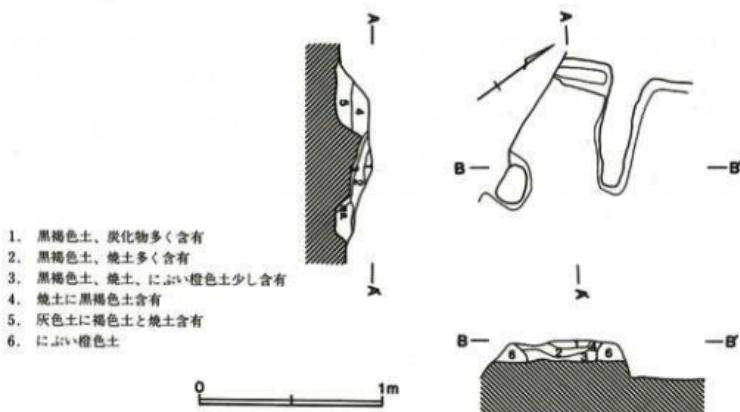
F-18区に位置し、1号土坑・9号土坑・102号土坑が重複する。西側は側溝により消失しており、正確な規模、プラン等は不明だが、カマドを通る軸方向に長い長方形プランで、長軸6.45m、短軸5.90m前後の規模を呈すると考えられる。カマドを通る主軸はN-56°-Wである。壁は削平や搅乱のため消失している。

ピットは3か所検出され、P₁～P₃が主柱穴である。壁溝は北東壁と南東壁の一部で検出されたが、削平により床面とも削られており、他にも存在した可能性がある。カマドは北西壁に付設され、削平と側溝によりかなり破壊されていたが、カマド下に壁溝を確認することができた。

出土遺物は少なく、杯と甕破片が出土している。



第32図 11号住居跡



第33図 11号住居跡カマド



第34図 11号住居跡出土遺物

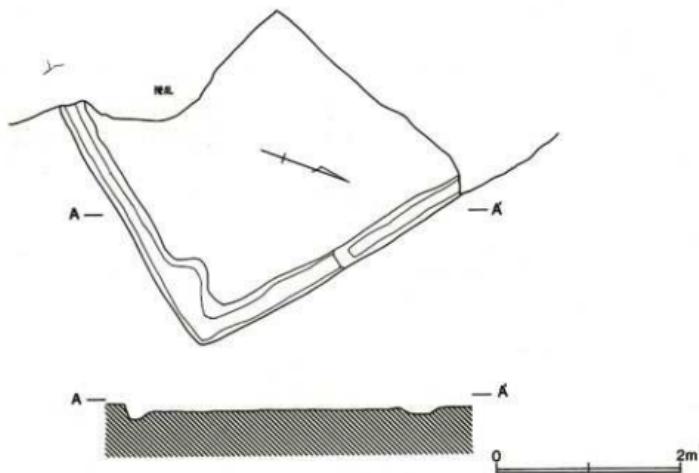
11号住居跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	器種	大きさ(cm)	形 想 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	杯	口径(12.0)	丸い底部から変換点を有さず、尖り気味の口縁部に至る。	内外面赤色塗彩されるが、整形等不明。	胎：白色粒子僅かに含有。 色：にぶい黄橙色。 残：不良、1/9。 カマド内出土。
2	杯	口径 15.8	口縁部は丸い底部から内外面に明瞭な棱を持って、屈折的に外反する。端部は丸い。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部不明、底部に不鮮明であるが横方向へのラケズリ。	胎：白色粒子含有。 色：内面にはにぶい橙色～口縁部周辺が黒褐色、外側は褐灰色。 残：不良、底部中央欠。 内外面赤色塗彩

12号住居跡（第35図）

D-10・11区、E-10・11区に位置し、住居の北西および南西側の約3/4を擾乱によって消失している。住居のプラン規模等は不明である。北東壁に沿う主軸方向はN-50°-Wである。壁はほとんど消失しているが、南東側で約10cm残る。覆土は灰色～によい褐色のシルトである。

壁溝は住居の残存部分すべてに検出された。カマド、炉、柱穴、貯蔵穴等の存在は不明である。出土した遺物は土師器の杯、甕の破片で図示出来なかった。



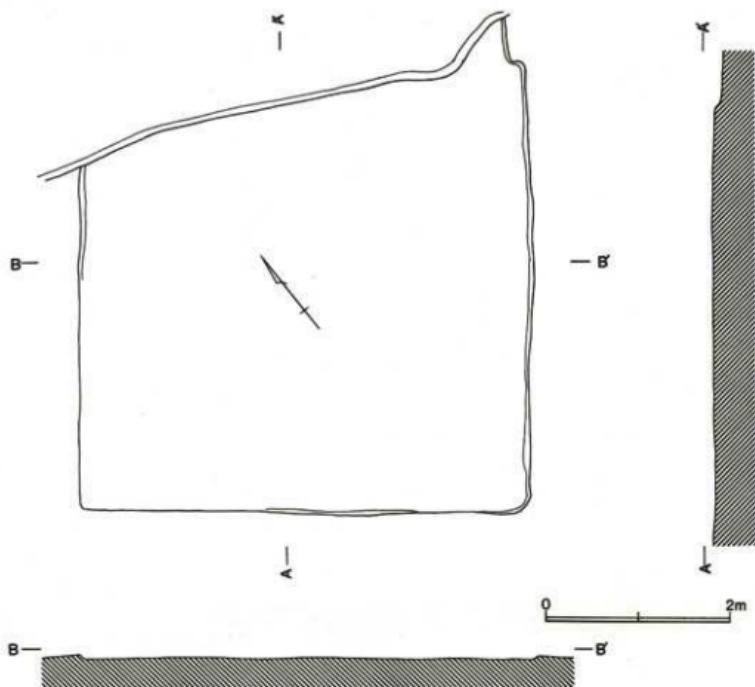
第35図 12号住居跡

13号住居跡（第36図）

D-10区に位置する。北西側は削平で消失しており、北、東側も消失している。住居跡のプランは正方形を呈し、規模は残存部分から一辺4.85m前後と推定される。削平深く、壁は残存状況の最も良好な部分で5cmを測る。覆土はによい褐色のシルトである。

柱穴、カマド、壁溝等発見されなかつたが、軸方向（南西壁に沿うラインでN-41°-W）が他の住居跡に近く、若干ながら同時期の遺物が出土していることから住居跡に区分した。

出土した遺物は土師器甕の破片で図示出来なかつた。



第36図 13号住居跡

14号住居跡（第37図）

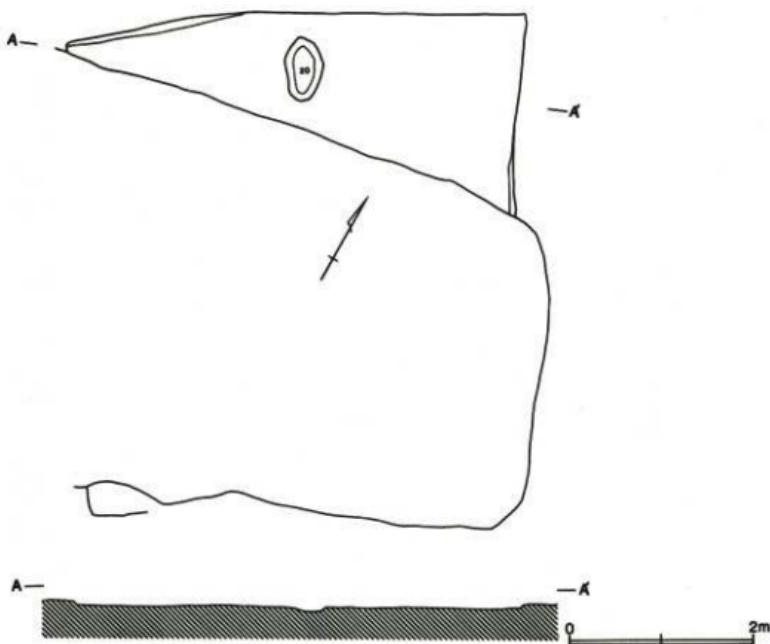
C-11・12区、D-12区に位置し、住居のほとんどに擾乱を受けている。残存部分からの推定では、プランは正方形を呈し、規模は一辺 5 m 前後と推定される。削平深く、壁は残存状態の最も良好な部分で 5 cm を測る。覆土は灰色、褐色のシルトがまざり合っている。

カマドは深く掘り込まれた燃焼部だけが検出された。壁溝、ピット等は残存部分では検出されていない。

出土した遺物は杯、甕、土製玉がある。

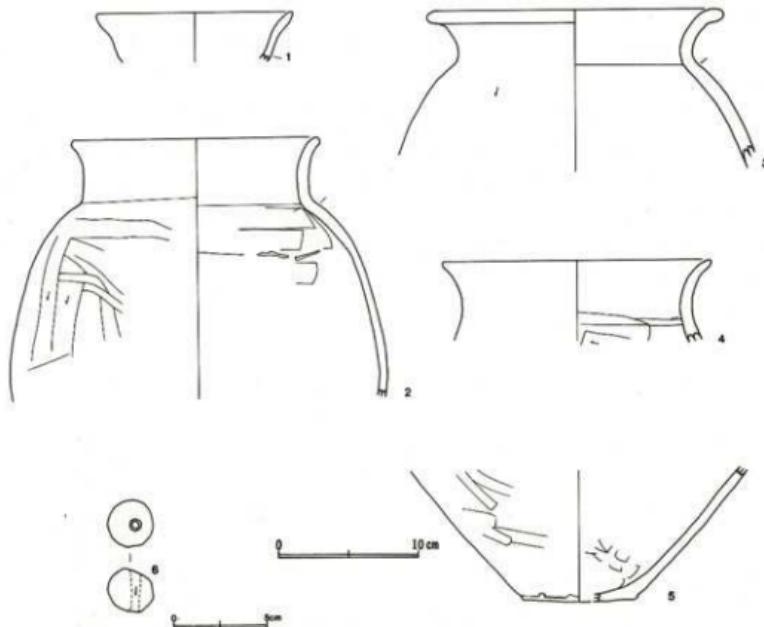
14号住居跡出土遺物観察表（第38図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径(14.0)	底部から口縁部へは滑らかに移行し、境は不明瞭、口縁部は外反し、端部は厚く	内外面とも口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明、黒色粒子含有。 色：にぶい黄橙色。



第37図 14号住居跡

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	甕	口径 17.8	丸い。胴部から口縁部は直立し、中位で外反し、端部は丸く修められている。口縁部と胴部の境は屈折的で棱を有する。胴部より口縁部の器壁が厚い。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ、粘土帶の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部上端横方向のヘラケズリ 中位は縦、斜方向のヘラケズリ。	胎：不良、口縁部 1/8。 胎：白色・透明赤色粒子含有。 色：橙色～にぶい橙色。 残：やや不良、口縁部 3/4、胴部 1/8。
3	甕	口径(21.2)	胴部から大きく外反、外傾する口縁部へ移行する。端部は丸く、やや肥厚する。口縁部と胴部の境は内面では棱を持つが、外面は滑らかに移行する。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラケズリ。	胎：白色・透明粒子含有。 色：内面は明褐色、外面はにぶい橙色。 残：不良、口縁部 1/4、床面出土。



第38図 14号住跡出土遺物

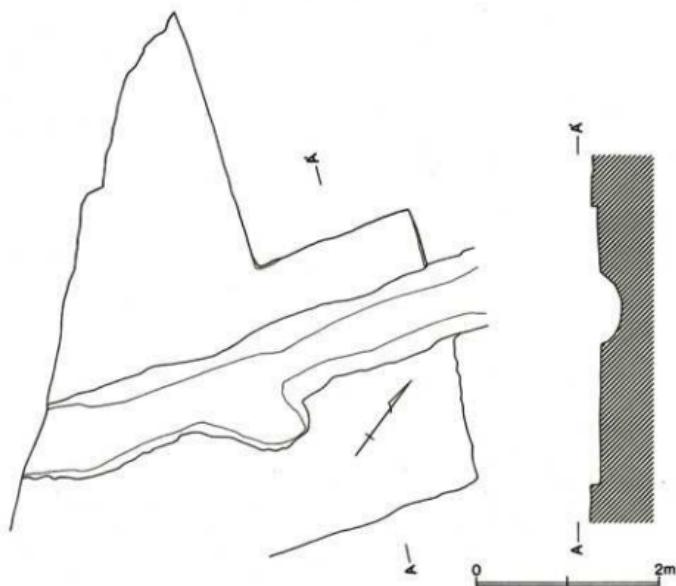
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	甕	口径(19.2)	胸部から口縁部への移行は滑らかで境は不明瞭、端部は丸い。	内面：口縁部ヨコナデ、肩部、横方向のヘラナデ。 外面：不明。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：暗褐色～黒色。 残：不良、口縁部 1/4。
5	甕	底径(16.0)	底部は肩部から突出するが、器壁は薄い。	内面：横、縦方向のヘラナデ。 外面：横、斜方向のヘラケズリ。	胎：白色、透明粒子含有。 色：明褐色。 残：やや不良、底部 1/5。
6	土製玉	2.3-2.4 孔径 0.4 11.3g	重んだ球形。	指頭成形の後穿孔されている。	胎：白色、灰色半透明粒子含有。 色：褐灰色。 残：不良、完形、カマド内出土。

15号住居跡（第39図）

E-10区に位置する。1号溝によって中央を寸断されている。西南側は削平深く、プラン、規模は不明である。

柱穴、カマド、壁溝等検出されず、一辺3mと小規模である。北東壁に沿う軸方向はN-52°-Wで壁は残存状況の最も良好な部分で10cmを測る。北西側に床面のレベルを同じくして落ち込みが続き、他に1軒住居が存在すると考えられるが、覆土がどちらも灰色のシルトで区別出来ず、明確にプランを把握できなかった。

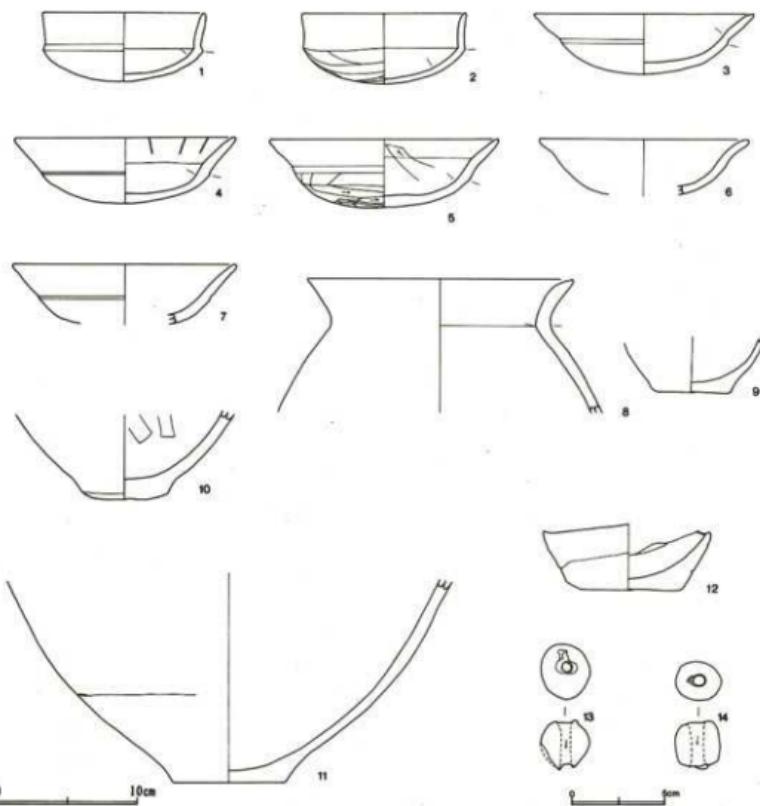
出土した遺物は多く、杯、甕、手捏、土製玉、鉄製刀子破片がある。



第39図 15号住居跡

15号住居跡出土遺物観察表（第40図）

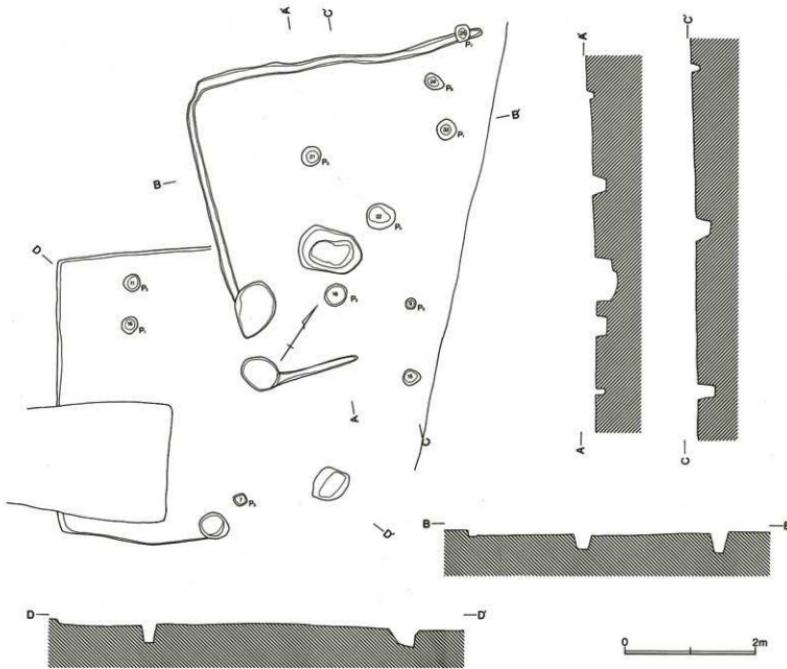
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径 11.6 器高 4.9	口縁部は僅かに外傾して立ち上り、端部はやや尖る。 口縁部と底部の境は屈折的で、外面では段を、内面では棱を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。 内外面赤色塗彩。	胎：赤色、黒色粒子含有。 色：にぶい橙色～橙色、外面は底部中央は黒色。 残：不良、口縁部 1/4欠。



第40図 15号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	杯	口径11.8 器高 5.1	口縁部は外反しながら上方へ立ち上る。端部は平坦。 口縁部から底部への移行は屈折的である。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ。	胎：白色、黒色粒子含有するが少ない。 色：灰白色～橙色。 残：やや不良、口縁部1/4欠。
3	杯	口径(15.6) 器高 4.3	口縁部は直線的に大きく外傾し、端部はやや尖る。口縁部と底部の境は、内面では滑らかであるが、外面は低い段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリが施されるが不明。 内外赤色塗彩。	胎：白色、灰色半透明粒子含有、僅かに透明、赤色粒子含む。 色：明褐灰色。 残：不良、口縁部3/5欠。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	杯	口径 15.8 器高 4.7	口縁部は直線的に大きく外傾し、端部は丸い。口縁部と底部の境は、内面では滑らかであるが、外面は段を有する。	内外面とも口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、灰色半透明、赤色粒子含有。 色：明褐色～にぶい橙色。 残：不良、口縁部 1/3欠。
5	杯	口径 16.4 器高 4.9	口縁部は直線的に大きく外傾し、端部は丸い。口縁部から底部への移行は、内面では滑らかであるが、外面は段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部上位はヨコナデ、中央は不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有、僅かに灰色半透明粒子含む。 色：にぶい橙色、中央は黒色。 残：やや不良、ほぼ完形。
6	杯	口径(15.0)	口縁部は大きく外傾し、外反する。端部はやや尖る。 口縁部から底部への移行は内外面とも滑らかである。	内外面とも不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい黄橙色。 残：不良 1/6、床面出土。
7	杯	口径 16.0	口縁部は直線的に大きく外傾し、端部は丸い。口縁部と底部の境は、内面では滑らかであるが、外面は低い段を有する。	内外面とも不明。口縁部外面に粘土帯の接合痕残る。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有、僅かに透明、赤色粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良 3/4、床面出土。
8	杯	口径(19.0)	口縁部は外傾し、中央で肥厚する。端部は尖る。口縁部から底部への移行は滑らかである。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部不明。	胎：含有物は殆んどなし。 色：浅黄橙色～橙色。 残：不良 1/3。
9	小形甕	底径 5.0	底部は胴部から突出し、僅かに上げ底となる。	内面：横方向のヘラナデが施されるが不鮮明。 外面：胴部不明、底部不定方向のヘラケズリ。	胎：白色粒子含有。 色：内面は褐灰色、外面はにぶい黄橙色～黒色。 残：やや不良、底部完。
10	甕	底径 6.0	胴部から突出する底部は器壁厚く、やや丸底を呈する。	内面：縱方向のヘラナデ。 外面：不明。	胎：白色、赤色、黒色粒子を僅かに含有。 色：浅黄橙色～にぶい橙色で外面一部黒色。 残：不良、底部完、床面出土。
11	甕	底径 (8.0)	胴部から突出する底部は平底を呈する。	内面：不明。 外面：不明。粘土帯の接合痕残る。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：内面は浅黄橙色～にぶい橙色、外面は灰白色～褐灰色。 残：不良、1/4、床面出土。
12	手捏	口径 (9.0)	平底の底部から直線的に口	内面：横方向のナデが施さ	胎：白色、透明粒子含有。



第41図 16号、23号住居跡

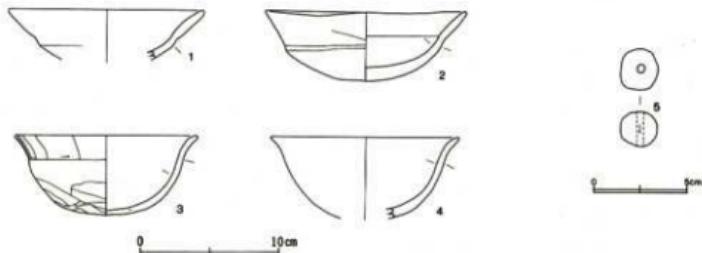
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		底径 7.3 器高 3.5	縁部となり、口縁端部は尖る。内面は半円球を呈し、底部と口縁部の境は不明。	れているが不鮮明。 外面：不明。粘土帯の接合痕残る。	色：灰白色～にぶい橙色。 外面一部黒色。 残：不良、口縁部 3/4 欠。
13	土製玉	2.6-2.4 孔径 0.6 15.4g	やや縦長で、横方向断面は橢円形。	指頭成形の後穿孔されている。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい黄橙色。 残：やや不良、完形。
14	土製玉	2.5-2.9 孔径 0.45 ~0.6 15.7g	僅かに縦長の球形。	指頭成形の後穿孔され、挿入側で粘土が押し出されている。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい橙色～褐色。 残：不良、完形。

16号住居跡（第41図）

E-8区、F-8区に位置し、41号、42号、82号土坑が重複する。住居の東側が現代の溝と削平によって消失しており、正確な規模、プランは不明である。南西壁に沿う軸方向はN-48°Wである。壁は部分的に僅かに残るだけである。

ピットは5か所検出され、P₁～P₅が主柱穴である。P₄は土器が含まれており、重複する土坑とも考えられる。

出土した遺物は杯、梳、甕、土製玉があるがP₄出土以外覆土中である。



第42図 16号住居跡出土遺物

16号住居跡出土遺物観察表（第42図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径 14.4 器高 5.0	口縁部は直線的に大きく外傾し、端部は丸い。口縁部から底部への移行部分は、	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有、僅かに赤色、黒色粒子含む。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	杯	口径(14.0)	内面では稜を外面では段を有する。	部横方向。ヘラケズリが施されるか不鮮明。 内外面赤色塗彩。	色：にじい橙色～褐灰色、一部黒色。 残：やや不良、完形、P ₄ 出土。
3	椀	口径(13.0)	口縁部は直線的に大きく外傾し、端部は丸い。口縁部から底部への移行部分は、内外面とも滑らかで、弱い稜を有する。	内外面とも口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。僅かに赤色粒子含む。 色：にじい橙色。 残：不良 1/8。
4	椀	口径(13.4)	丸く深い底部から、外反する口縁部に至り、端部はやや尖る。口縁部と底部の境は滑らかで不明瞭である。	内面：口縁部と底部途中までヨコナデ。底部中央不明 外面：口縁部ヨコナデで、工具の止めた痕残る。底部は斜・横方向のヘラケズリ。	胎：白色、砂粒子含有。僅かに黒色粒子含む。 色：にじい黄橙色～橙色～明褐色。 残：良好 1/6。
5	土製玉	1.8—2.2 孔径 0.5 7.6g	僅かに扁平な球形。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。	胎：白色粒子含有。 色：にじい褐色～褐灰色。 残：不良、1/5。

17号住居跡（第43図）

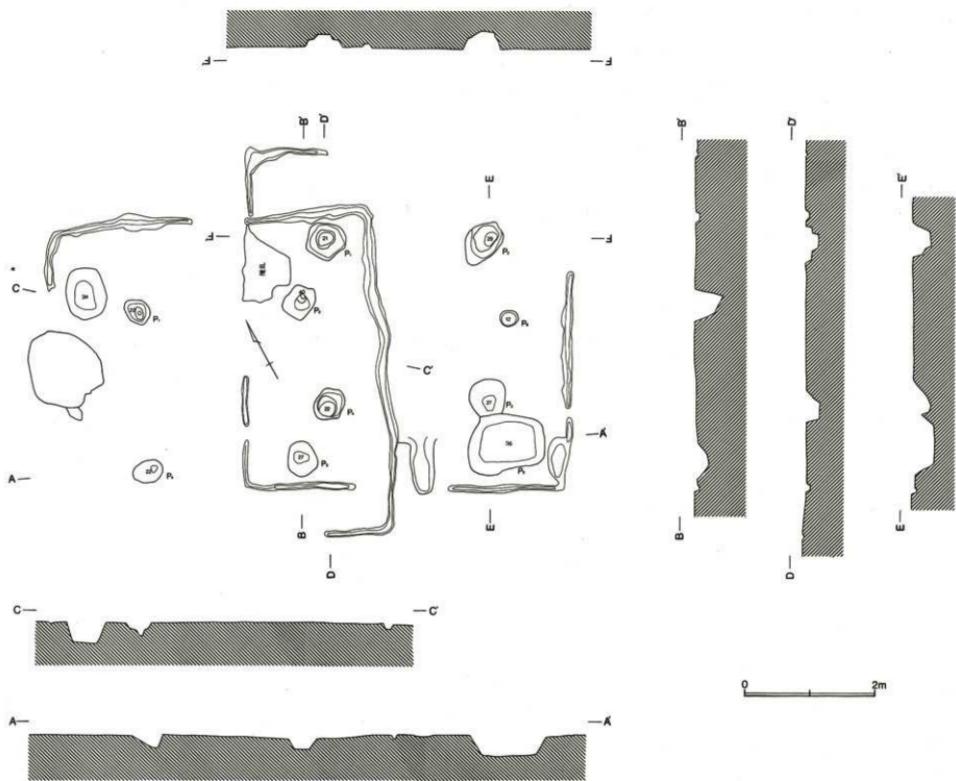
B-11・12区に位置し、60号土坑、18号住居が重複する。削平深く、住居の正確なプラン、規模は不明であるが、一辺5m前後の正方形プランを呈すると推定される。北東壁に沿う軸方向はN-66°-Wである。

カマドの存在が予想される北西中央には土坑が重複しており、南西側は床面の下まで削平され、壁、壁溝も残存しなかった。ピットは5か所検出され、P₁～P₄が主柱穴でP₅が他に比べて深い、P₅は貯藏穴で80×60cmを呈する。壁溝は存在するが、削平のためほとんど消失している。

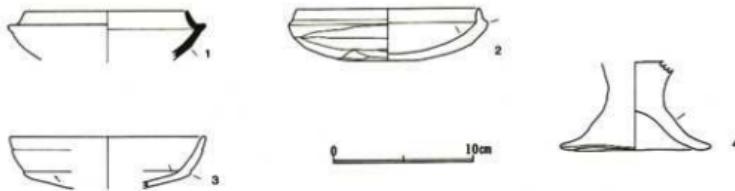
出土した遺物は少なく杯、高杯、甕がある。

17号住居跡出土遺物観察表（第44図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径(11.4) 受け部径(14.1)	口縁部は外反気味に内傾し、端部は丸く修める。受け部に横や上方に延びる。口	内面：ロクロ回転(右回転)によるナデ 外面：口縁部・底部上位口	須恵器 胎：白色粒子僅かに含有。 色：灰色。



第43図 17号、18号住居跡



第44図 17号住居跡出土遺物

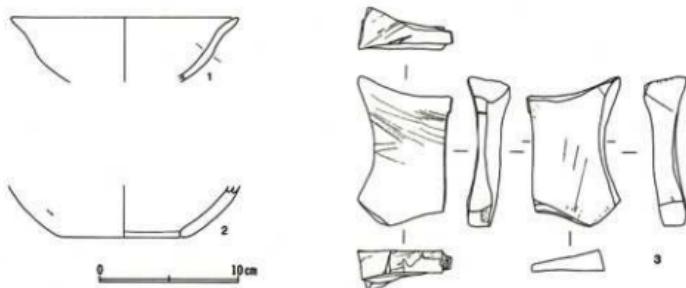
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			縁部から底部への移行は屈折的で、内面は明瞭な棱を有する。	クロ回転によるナデ、底部回転ヘラケズリ。	残：良好、1/6。
2	杯	口径 13.0 器高 3.7	口縁部は短かく直線的に立ち上がる。端部は尖る。口縁部から底部への移行は屈折的で、内面では棱を、外側では段を有する。	内面：口縁部・底部上位ヨコナデ、底部中央不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ、粘土帶の接合痕残る。	胎：白色、透明、黒色粒子含有。 色：内面にはよい橙色～褐色、外側は橙色～黒褐色。 残：やや不良、完形、P ₁ 出土。
3	杯	口径(14.0)	口縁部は長く、内湾して外傾し、端部は丸い。口縁部外面上位に段を有する。口縁部から底部への移行は屈折的で、内面では棱を、外側では段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部斜方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色、黒色粒子含有。 色：によい黄橙色～橙色。 残：不良、1/9、貯藏穴出土。
4	高杯	底径 10.8	脚部は短かく、中央でやや膨らみ大きく聞く。袖端部は尖る。	内外面赤色塗彩、整形不明。	胎：白色、透明、赤色粒子含有。 色：灰白色～橙色。 残：不良、3/4。

18号住居跡（第43図）

A-11・12区、B-11・12区に位置し、17号住居と重複している。17号住居同様削平が深く、北東側は側溝によって破壊されている。住居のプランはほぼ正方形を呈し、長軸5.2m、短軸5mを測る。カマドを通る主軸はS-30°-Wである。

カマドは南西壁に検出されたが、燃焼部が僅かに残るだけである。北西壁は削平されており、カマドの存在は不明である。壁は残存していない。ピットは6か所検出され、P₁～P₄が主柱穴である。P₅は貯藏穴で117×85cmを測る。P₆の性格は不明である。壁溝は検出されているが、削平のため正確な存在位置は不明。

出土した遺物は少なく、杯、甕、瓶、砥石がある。



第45図 18号住居跡出土遺物

18号住居跡出土遺物観察表（第45図）

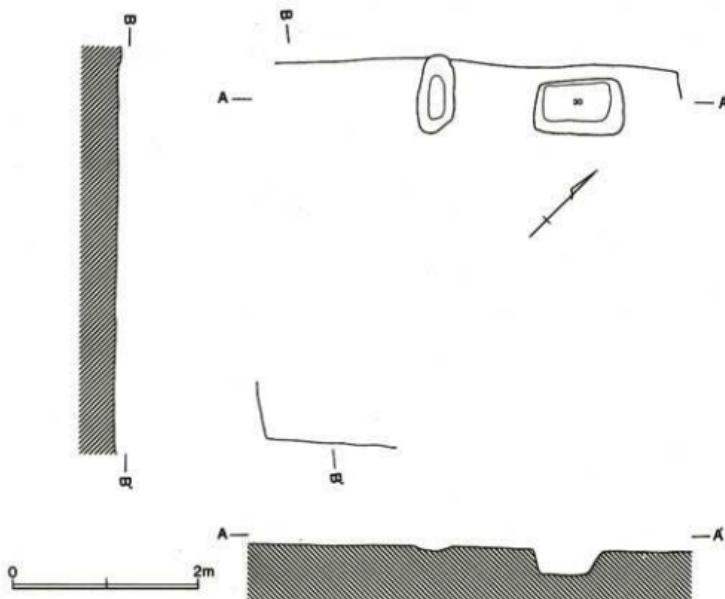
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径(16.4)	口縁部は外反しながら大きく外傾し、端部は尖る。口縁部から底部への移行は滑らかである。	内外面赤色塗彩。整形は不明。	胎：白色粒子、透明粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、1/9、貯蔵穴出土。
2	瓶	孔径(8.0)	丸い胴部から丸い孔端部へ移行する。	内面：縦方向のヘラナダが施されるが不鮮明。 外面：縦方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、1/3。
3	砥石		よく使い込まれ、各面は曲面となっている。	面は7面確認される。	色：灰白色。 石質：砂岩。 床面出土。

19号住居跡（第46図）

C-13区に位置し、1号住居と重複する。住居のほとんどが削平と擾乱のため消失しており、カマドの燃焼部と貯蔵穴および南東・南西壁の一部が検出されただけで、柱穴は検出できなかった。規模、プラン等不明であるが、一辺4.3~4.5m前後の方形を呈すると推定される。

貯蔵穴は長方形で、95×60cmを測る。1号住居との新旧関係は、本住居が1号住居の壁上部にかろうじて重複していたため不明である。

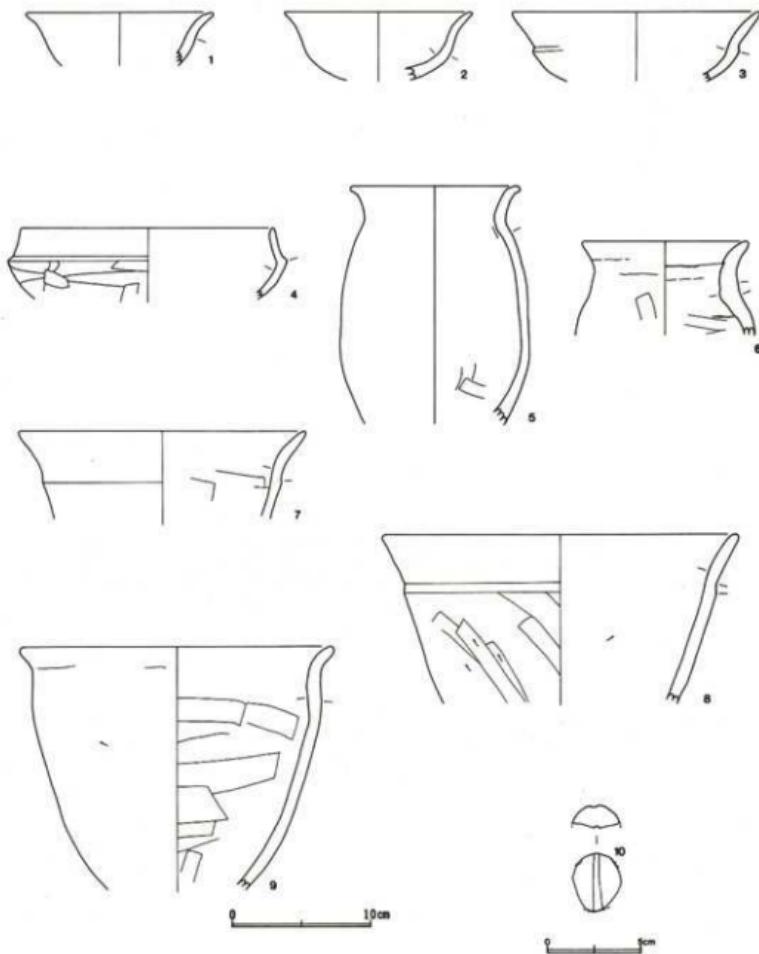
出土遺物は杯、甕、鉢があり、7・9は貯蔵穴の東側に隣接していた。プラン確認時に出土した他の遺物も床面に存在していたと考えられる。



第46図 19号住居跡

19号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	杯	口径(13.4)	口縁部は外反し外傾する。端部はやや尖る。口縁部から底部への移行は滑らかである。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。	胎：白色、透明粒子含有。 色：内面はにぶい橙色、外面はにぶい橙色～灰白色。 残：不良、1/7。
2	杯	口径(13.6)	口縁部は外反し外傾する。端部はやや尖る。口縁部から底部への移行は滑らかである。	内外面とも口縁部ヨコナデ 底部不明。	胎：白色、透明、黒色、赤色粒子僅かに含有。 色：内面は橙色～にぶい橙色、外面はにぶい橙色、明褐灰色～黒色。 残：不良、1/4。
3	杯	口径(17.8)	口縁部は直線的に外傾し、端部はやや平坦。口縁部から底部への移行部分は、外面で段を有するが内面は滑らかである。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリが施されるが小片のため不明。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：にぶい橙色～褐灰色。 残：やや不良、1/10。



第47図 19号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	杯	口径(18.0)	口縁部は直線的に内傾し、端部は丸い。口縁部から底部への移行は屈折的で、内面では棱を、外面では段を有する。	内面：口縁部、底部上端ヨコナデ。他不明。 外面：口縁部ヨコナデ。底部横方向のヘラケズリ。	胎：白色、黒色粒子を僅かに含有。 色：明赤褐色。 残：良好、1/4。

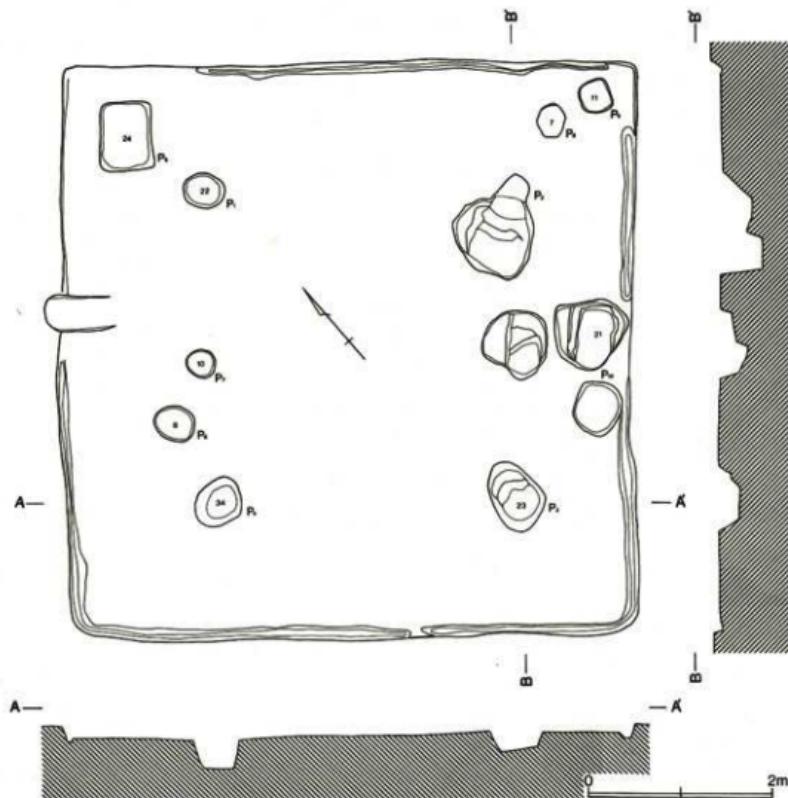
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	甕	口径 12.2 胴部最大径 (13.6)	口縁部は外反し、端部近くでさらに外方へ開く。端部は丸い。	内面：口縁部不明、胴部横方向へのラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縱方向へのラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：にぶい黄橙色～褐灰色。 残：やや不良、口縁部完。胴部 1/5。
6	甕	口径(12.0)	口縁部は外反し外傾する。端部は丸い。口縁部から底部への移行は滑らかである。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向へのラナデ。 外面：口縁部ヨコナデで下半は明瞭、胴部縱方向へのラケズリ。外面ともに粘土帯の接合痕残る。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい黄橙色～褐灰色。 残：やや不良、1/7。
7	鉢	口径 20.6	口縁部は外反し外傾する。端部はやや尖る。口縁部から底部への移行は滑らかで外面に低い棱を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向へのラナデ、粘土帯の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向へのラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色粒子含有。 色：橙色、褐灰色～黒色。 残：やや不良、口縁部 1/8 欠。床面出土。
8	鉢	口径(25.6)	口縁部は胴部から僅かに屈折して直線的に外傾し、端部は丸い。口縁部から底部への移行は内面は滑らかであるが、外面は段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向へのラナデが施されるが不鮮明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部斜方向へのラケズリ。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：内面は褐灰色、外面はにぶい橙色、褐灰色、黒色。 残：やや不良、1/6。
9	鉢	口径(22.6)	口縁部は直線的に上方に立ち上がり、端部近くで外反する。端部は丸い。口縁部から底部への移行は滑らかで、外面に低い棱を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向へのラナデ、底部寄り縱方向へのラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部斜方向へのラケズリが施されるが不鮮明。口縁部に粘土帯の接合痕残る。	胎：白色、赤色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：橙色、にぶい黄橙色、褐灰色、黒色。 残：やや不良、1/4、床面出土。
10	土製玉	3.1-	やや極長の球形と推定される。	指頭成形の後穿孔される。表面凹凸有り。	胎：白色粒子含有。 色：黒褐色。 残：不良、2/5。

20号住居跡（第48図）

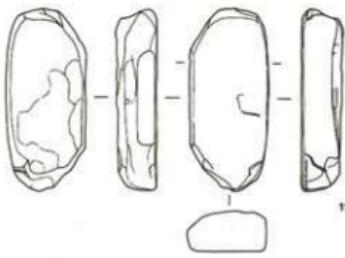
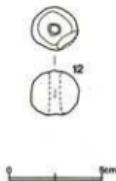
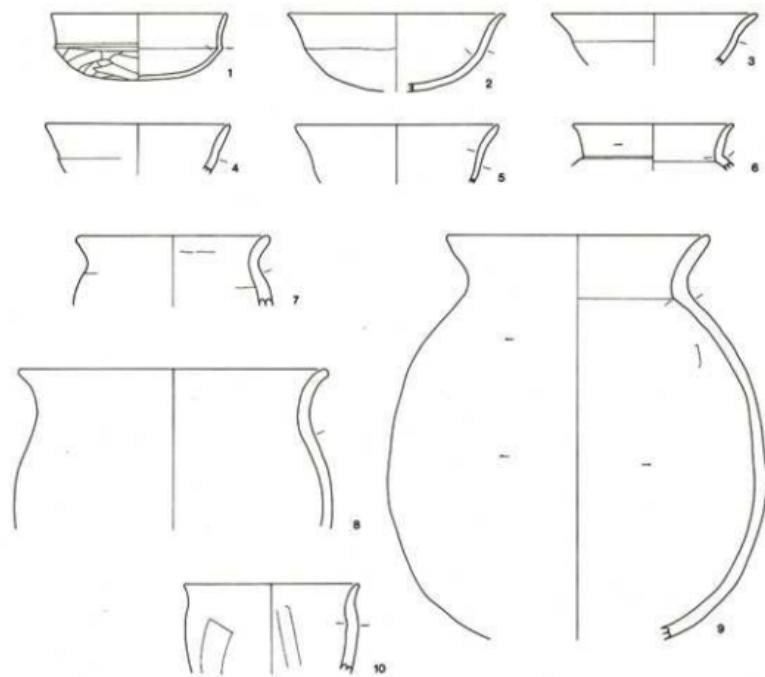
D-7・8区、E-7区に位置し、77号、78号、79号と重複する。住居は一辺6.15mの正方形プランを呈する。カマドを通る主軸はN-52°-Wである。覆土は灰色～褐色のシルトで住居中央部上位に炭化物、焼土を多量に含む灰色土が入る。壁は最も残存状態の良好な部分で12cmを測る。

ピットは10か所検出された。 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴で、 P_5 は78号土坑と重複している。 P_6 は貯蔵穴で65×55cmの長方形を呈する。 $P_6 \sim P_9$ はいずれも浅く性格は不明である。 P_{10} は当初重複する土坑としていたが覆土内遺物がカマド・床出土遺物と接合したことや、壁溝も重複しない事から住居に伴うピットと考えた。カマドは遺存状態悪いが、燃焼部が残存し壁外にも掘り込まれていた。壁溝は南東隅他部分的に確認されなかった。北東隅は存在していた痕跡がある。

出土遺物は杯、椀、甕、鉢、土製玉、砥石がある。



第48図 20号住居跡



第49図 20号住居跡出土遺物

20号住居跡出土遺物観察表（第49回）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径 12.6 器高 4.8	口縁部は外反しながら僅かに外傾する。端部は尖る部分と平坦な部分が存在する。口縁部から底部への移行は屈折的で明瞭な棱を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：黒色粒子僅かに含有。 色：灰白色～にぶい黄橙色。 残：やや不良、3/5、カマド内、P ₆ 、P ₁₀ 出土。
2	杯	口径 15.6 器高 (5.6)	口縁部は僅かに外反しながら底部のカーブより内側に外傾する。端部はやや尖る。口縁部から底部への移行は滑らかで、外面に低い棱を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：内面は橙色、外面はにぶい橙色～褐灰色。 残：不良、1/2、床面出土。
3	杯	口径(14.8)	口縁部は外反し外傾する。端部は尖る。口縁部から底部への移行は内面は滑らかで、外面は棱を有する。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子僅かに含有。 色：にぶい橙色～褐灰色。 残：不良、1/9。
4	椀	口径(13.4)	口縁部は直線的に外傾し、端部は尖る。口縁部から底部への移行は内面では滑らかで、外面は棱を有する。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい橙色～褐灰色。 残：不良、1/7。
5	椀	口径(14.6)	口縁部は外反し外傾する。端部は丸い。口縁部から底部への移行は滑らかである。	内外面とも外縁部ヨコナデ、底部不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい黄橙色。 残：やや不良、1/6。
6	小形甕	口径(11.6)	口縁部は直線的に外傾し、端部近くで外反する。端部は尖る。口縁部から胴部への移行は屈折的である。	内面：ヨコナデが施されるが、下半はヘラナデ状である。 外面：ヨコナデ	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：明赤褐色～褐灰色。 残：やや不良、1/5、カマド内出土。
7	小形甕	口径(14.0) 口径(22.4)	口縁部は外傾し、端部は丸く修められている。口縁部から胴部への移行は滑らかである。	内外面とも口縁部はヨコナデ、胴部不明。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：内面は褐灰色、外面は橙色。 残：不良、1/4、77号土坑出土の可能性あり。
8	甕	口径(22.4)	胴部上半に最大径を持ち、口縁部は外反し、端部は丸い。口縁部から胴部への移行は滑らかである。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部不明。	胎：白色粒子含有、僅かに赤色粒子含む。 色：内面はにぶい橙～にぶい黄橙色、外面は橙色～褐灰色。 残：不良、1/4。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
9	甕	口径 19.0 胸部最大径 (27.4)	口縁部は直線的に外傾し、 丸い端部に至る。胸部中央 に最大径を持つ。口縁部か ら胸部への移行は屈折的だ が、境は不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、胸 部横方向のヘラナデが施さ れるが不鮮明。 外面：口縁部ヨコナデ、胸 部横、斜方向のヘラケズリ が施されるが不鮮明。	胎：白色、灰色半透明～透 明、黒色粒子、砂粒含有、 色：内面はにほい橙色～褐 灰色、内面は褐色～黑色、 残：不良、口縁部3/4、胸部 1/2、床面、P ₄ 、覆土出土。
10	鉢	口径(12.6)	口縁部は上方に立ち上がった 後外反し、端部は尖る。 口縁部から底部への移行は 滑らかで、外面ヨコナデの 下端で僅かな棱を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、胸 部横、縱方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胸 部斜方向のヘラケズリ。	胎：白色粒子、砂粒を僅かに 含有。 色：にほい橙色、褐色。 残：やや不良、1/3。
11	土製玉	2.4-2.5 孔径 0.4 ~0.75 12.7g	円筒形に近い球形。	指頭成形の後穿孔されてい る。	胎：白色粒子僅かに含有。 色：褐色。 残：やや不良、一部欠。
12	砥石		扁平な棒状を呈する。4面 の使用面のうちの3面がよ く使い込まれている。	長軸の4面が利用されてい る。	色：暗緑灰色～灰色。 石質：砂岩。

21号住居跡（第50図）

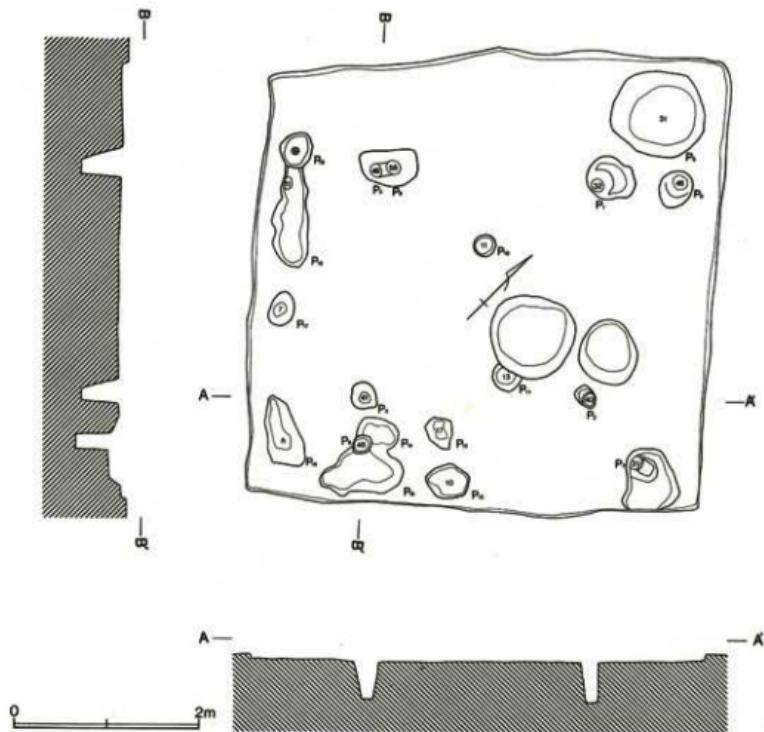
B-14区、C-14区に位置し、74号、75号土坑が重複する。住居のプランは正方形を呈し、規模は長軸4.95m、短軸4.85mを測る。北東壁に沿う軸方向はN-43°-Wである。壁は残存状態の最も良好な部分で7cmを測る。覆土は褐色シルトである。

カマド・炉跡等検出されなかった。ピットは19か所検出された。P₁-P₄が主柱穴、P₅が貯蔵穴で102×92cmを測る。P₆～P₉は深く、あるいは別に1軒住居跡が重複していた可能性もある。P₁₄、P₁₅、P₁₆、P₁₈は不定形で、住居の掘り方と考えられる。壁溝は検出されなかった。

出土した遺物は、杯、甕、土製玉があり、土製玉が4個と多い。

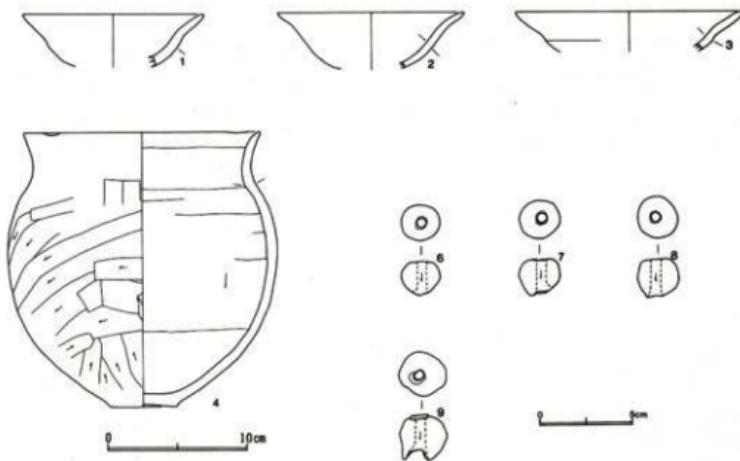
21号住居跡出土遺物観察表（第51図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径(13.0)	口縁部は外反し外傾する。 端部は尖る。口縁部から底 部への移行は滑らかである。	内外面とも不明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明、赤色粒子 僅かに含有。 色：浅黄橙色～褐色。 残：不良、1/8。
2	杯	口径(13.4)	口縁部は外反し外傾する。 端部は尖る。口縁部から底	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデが施	胎：白色、灰色半透明、透 明粒子含有。



第50図 21号住居跡

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	杯	口径(16.4)	口縁部は直線的に外傾し、端部はやや尖る。口縁部から底部への移行部分は滑らかであるが、外面に低い段を有する。	部への移行は滑らかである。 されるが不鮮明。底部不明 内外面赤色塗彩。 内外面とも口縁部ヨコナデ 底部不明。 内外面赤色塗彩。	色：浅黄褐色～にふい橙色。 残：不良、1/8。 胎：白色粒子含有。 色：明褐灰色。 残：不良、1/7。



第51図 21号住居跡出土遺物

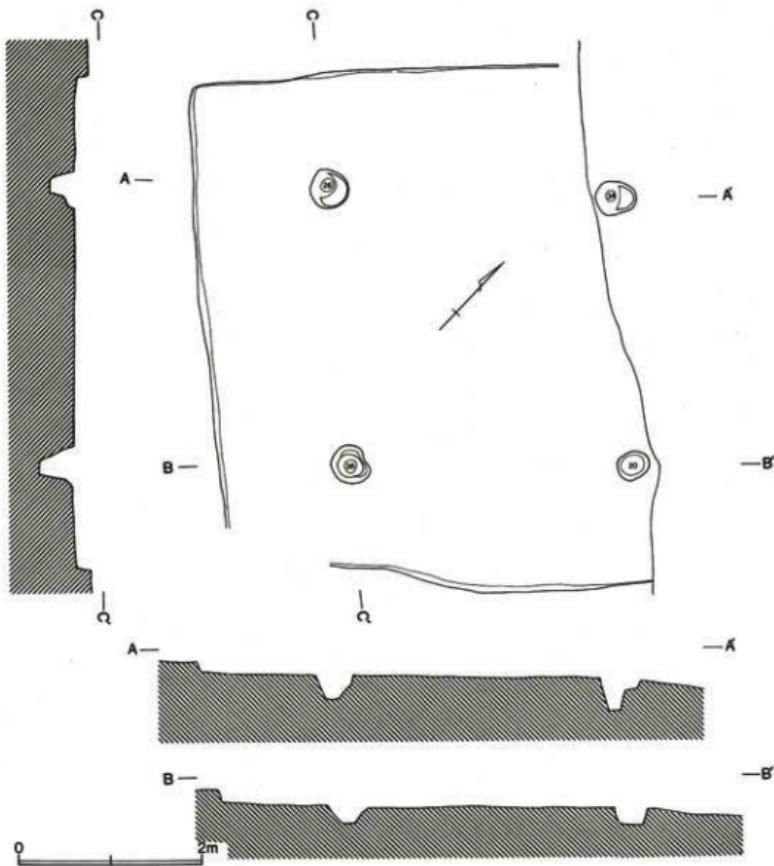
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	小形甕	口径 17.0 胴部最大径 19.4 底径 4.8 器高 19.7	口縁部は一度内傾した後、外反外傾する。端部はやや波をうち尖る。胴部上半に最大径を持ち底部は上げ底で胴部より突出する。口縁部から胴部への移行は滑らかである。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。粘土帶の接合痕が残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半は継、斜方向のヘラケズリ、下半は縱方向のヘラケズリ。	胎：白色、灰色半透明粒子含有。 色：にぶい黄橙色、橙色、褐灰色。一部黒色。 残：やや不良、部分的に欠損するがほぼ完形。貯藏穴出土。
5	土製玉	1.8-2.1 孔径 0.55 6.2g	やや扁平な球形。 穿孔時に突出した粘土がそのまま残る。	指頭整形の後穿孔されている。	胎：白色、赤色粒子含有。 色：橙色～明赤褐色。 残：不良、完形。
6	土製玉	1.9-2.2 孔径 0.5 7.7g	やや扁平な球形。	指頭整形の後穿孔されている。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：にぶい黄橙色～褐灰色。 残：不良、完形。
7	土製玉	2.0-2.2 孔径 0.6 9.6g	円筒形に近い球形で、穿孔時に突出した粘土がそのまま残る。	指頭整形の後穿孔されている。 赤色塗彩？	胎：白色粒子僅かに含有。 色：にぶい黄橙色～褐灰色。 残：不良、完形。
8	土製玉	2.3-2.6 孔径 0.55 10.4g	横断面は円形だが、外観は不恰好。	指頭整形の後穿孔されているが、穿孔時の粘土の突出がそのまま残る。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい橙色～褐灰色。 残：不良、完形。

22号住居跡（第52図）

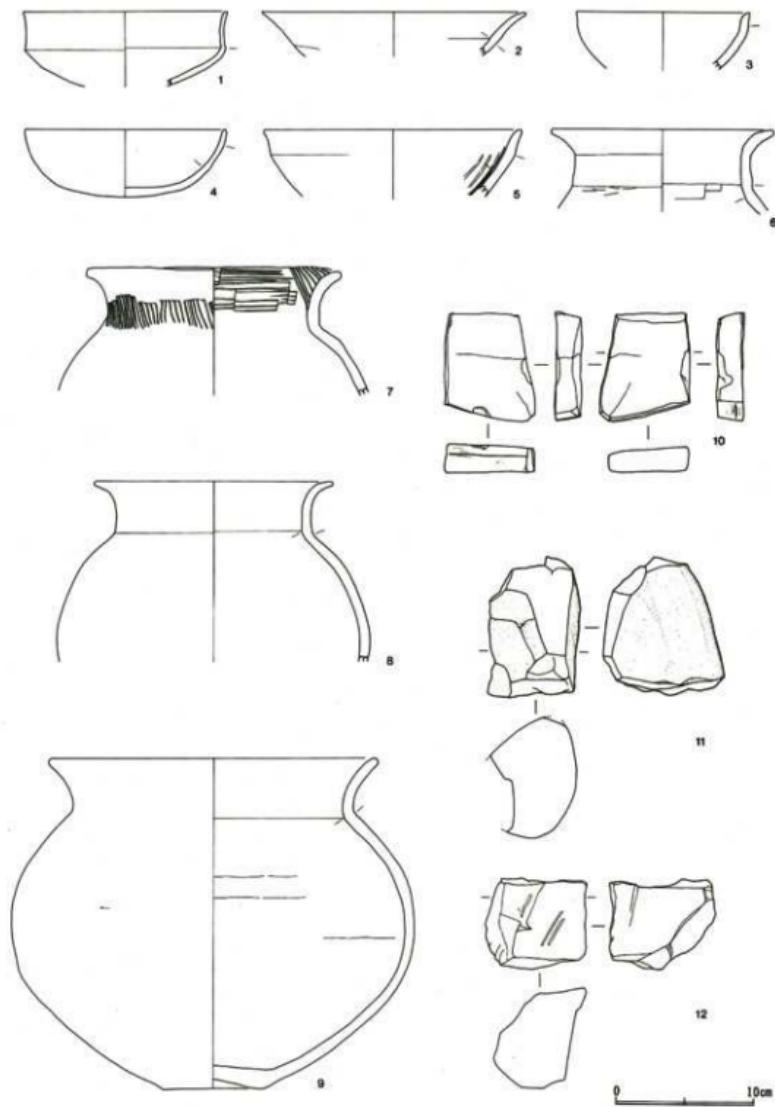
E-5区に位置し、僅かにF-5区、E-6区にまたがる。北東側が河川によって流失しているためプラン、規模等不明であるが、一辺5.5~5.6m前後の方形を呈すると推定される。南西壁に沿う軸方向はN-48°-Wである。壁は残存状態の最も良好な部分で15cmを測る。

カマド、炉、貯蔵穴、壁溝等検出されなかった。ピットは4か所検出され、いずれも主柱穴である。

出土した遺物は杯、椀、甕、砥石、須恵器甕破片があり、砥石は3個と多い。



第52図 22号住居跡



第53図 22号住居跡出土遺物

22号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	瓢	口径(14.8)	口縁部は外反しながら垂直に立ち上る。端部は平坦。口縁部から底部への移行は屈折的で、外面では段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色、黒色粒子、砂粒含有。 色：橙色～にぶい橙色。 残：不良。1/6。
2	杯	口径(19.2)	口縁部は外反し大きく外傾する。端部はやや尖る。口縁部から底部への移行は滑らかで、内面へ僅かな段を有する。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横方向のヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子含有。 色：にぶい橙色、外面一部褐灰色。 残：不良。1/8。
3	杯	口径(12.6)	口縁部は短く、僅かに外反する。端部は丸い。口縁部から底部への移行は滑らかで、境は不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、底部不明。 外面：口縁部、底部残存部分はヨコナデ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明粒子、砂粒を含有。 色：橙色。 残：不良。1/7。
4	杯	口径 14.6 器高 4.9	円弧状の底部より明瞭な変換点のないまま尖る端部に至る。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリが施されているが不鮮明。 内外面赤色塗彩。	胎：白色、透明粒子、砂粒を僅かに含有。 色：灰白色、外面一部黒色。 残：不良。5/8、床面出土。
5	椀	口径(18.8)	口縁部は底部から内折して外反外傾する。端部は丸い。口縁部と底部の境は外面で段を有するが、内面は滑らかで不明瞭。	内面：口縁部、底部上位ヨコナデ、底部ヘラミガキ。 外面：口縁部ヨコナデ、底部横・斜方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	胎：白色、透明粒子含有。 色：内面にはにぶい黄橙色～褐灰色。外面は褐灰色～黒褐色。 残：不良。1/6。
6	甕	口径(16.2)	口縁部は脇部から直線的に立ち上がった後、大きく外反外傾し、丸い端部へ至る。	内面：口縁部ヨコナデ、脇部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、脇部不明であるが、口縁部寄りにヘラを当てた痕残る。	胎：白色、灰色半透明粒子含有。僅かに透明粒子含む。 色：にぶい橙色～褐灰色。 残：やや不良。1/3。
7	甕	口径 18.6	口縁部は脇部から上方に僅かに外傾して立ち上がった後、大きく外へ開く。端部は丸い。口縁部から脇部への移行は屈折的であるが、境は不明瞭。	内面：木口状工具によって横・斜方向のナデ、脇部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ後、木口状工具によって脇部上位に続くナデ、脇部上半は不明。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：灰白色、にぶい黄橙色、黒褐色。 残：やや不良、口縁部完。
8	甕	口径 9.4 脇部最大径 20.8	口縁部は脇部から直線的に立ち上がった後、大きく外へ開く。端部はやや尖る	内外面とも不明。	胎：白色、赤色粒子、砂粒含有。 色：灰白色、橙色、褐灰色

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
9	甕	口径(24.0) 胴部最大径 29.3 底径 7.0 器高 23.8	口縁部から胴部への移行は屈折的である。 口縁部は外反外傾し、端部は丸い。胴部上半に最大径を有する。口縁部から胴部への移行は屈折的である。		内面：口縁部不明、胴部不明であるが、粘土帯の接合痕残る。 外面：横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。
10	砥石		扁平な6面体で、長軸の一辺は破損しているが、使用面はすりへって曲面を呈する。	使用面は5面確認される。	色：にじむ黄橙色～灰白色 石質：砂岩。 火を受けている。 P ₄ 出土。
11	砥石		自然石の側面を利用してお り、破損部分が多い。		色：明紫灰色～暗青灰色。 石質：礫岩。 火を受けている。
12	砥石		破片である。使用面のうち 2面は曲面を呈する。	使用面は3面確認される。 石の目は粗く、やや軟質。	色：青灰色 石質：岩滓。 住居跡東側落ち込み内出土。

23号住居跡（第41図）

F-8・9区に位置し、76号、81号土坑、16号住居と重複する。東側は削平され、南西部分には擾乱が入り、プラン、規模等は不明である。残存するプランから一辺4.4m前後と推定される。南西壁に沿う軸方向はN-38°-Wである。壁は残存状態の最も良好な部分で13cmを測るが、ほとんどの壁が消失してしまっている。

壁溝、カマド、炉、貯蔵穴等検出されなかった。ピットは3か所検出されたが、主柱穴と考えられるのはP₁だけである。

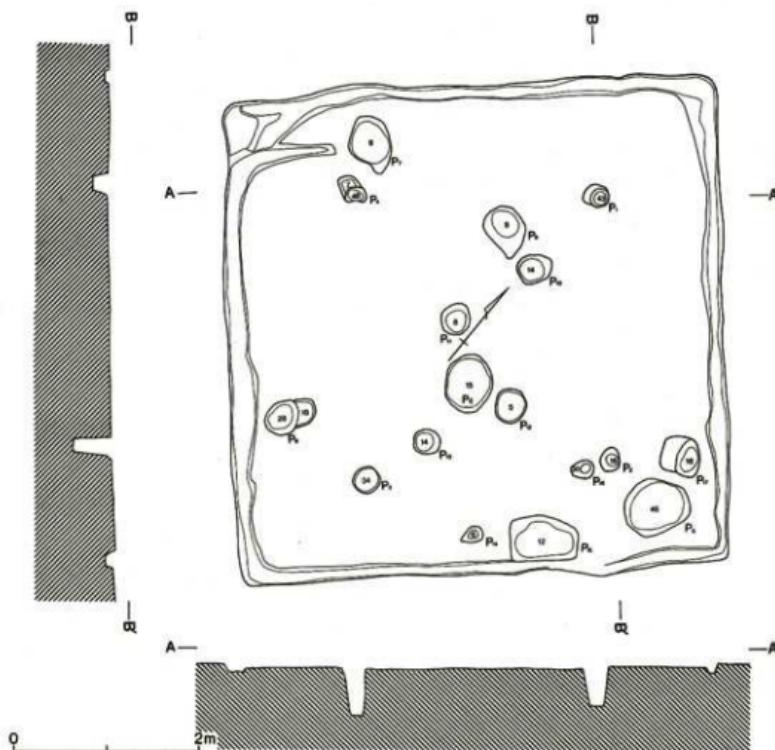
出土遺物は甕があるが破片のため図示出来なかった。

24号住居跡（第54図）

E-6・7区に位置する。住居のプランは方形を呈し、長軸5.35cm、短軸5.3mを測る。北東壁に沿う軸方向はN-43°-Wである。削平深く、壁は残存状態の良好な部分でも5cmである。

ピットは17か所検出された。P₁～P₄が主柱穴、P₅が70×60cmを測る貯蔵穴で、P₆は炉で63×50cmを測り、多量の焼土が含まれていた。P₇～P₁₇は住居跡の覆土が浅いため、住居跡との新旧関係および性格は不明である。壁溝は全周するが、西隅では壁内側に入る。

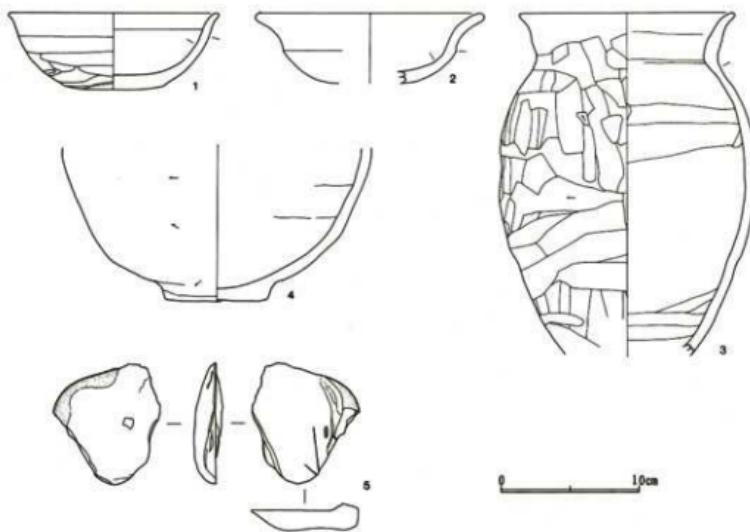
出土遺物は杯、甕、砥石がある。



第54図 24号住居跡

24号住居跡出土遺物観察表（第55図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	盆	口径 15.2 器高 5.5	円弧状の底部から外反する 口縁部に移行する。端部は 丸い。底部中央寄りはヘラ ケズリの量が少ないために 突出する。口縁部と底部の 境は、内外面とも明瞭。	内面：口縁部・底部上端ヨ コナデ、底部は不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底 部横方向のヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	胎：白色粒子、砂粒含有。 色：内面は橙色～黒褐色、 外面はにぶい黄褐色。明褐 灰色、黒褐色。 残：やや不良、1/2、貯藏 穴出土。
2	杯	口径(16.6) 器高(5.0)	口縁部は底部から内折して 外反外傾する。端部は丸い。 口縁部から底部への移行は 内面では滑らかで、外面は 棱を有する。	内面：口縁部・底部上位は ヨコナデ、中央付近は不明。 放射状のヘラミガキが施さ れるが不鮮明。 外面：口縁部ヨコナデ、底	胎：白色、灰色半透明、透 明粒子をわずかに含有。 色：内面はにぶい橙色、外 面は灰白色・にぶい橙色・ 黒色。



第55図 24号住居跡出土遺物

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	甕	口径 15.6 胴部最大径 18.5	口縁部は外傾し、端部近くでさらに外へ開く。端部は丸い。胴部上半に最大径を有し、やや長胴。口縁部から胴部への移行は屈折的である。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横・斜方向のヘラナデ。粘土帯の接合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半・下端は木口状工具によるナデが施されるがあまり明瞭でない。	胎：白色粒子含有、僅かに灰色半透明粒子含む。 色：橙色、褐灰色、黒色。 残：良好、3/4。 外面に布状压痕残る。貯藏穴出土。
4	甕	底径 7.4	丸い胴部から底部は突出する。底は平底。	内面：横方向のヘラナデが全面に施されるが不明。 外面：胴部横・斜方向のヘラケズリ、底部不定方向のヘラケズリ。	胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：にぶい褐色～褐灰色、黒色。 残：やや不完、底部は完。
5	砥石		自然石の破片を利用したのであろうか。平坦面と曲面を利用している。	使用面は2面確認される。	色：淡緑灰色。 石質：砂岩。

2. 土 坑

検出された土坑は、プラン・規模にそれぞれ違いがみられ、古墳時代～近世までが、ほぼ同様なシルト質土を覆土とするため、形状や覆土から時期を区別することが出来ない。約半数の土坑から遺物が出土したが、多くは破片であり周辺に同時期の遺構も多く、伴出関係を断定できるものは少ない。そのため出土遺物は伴出関係の不明なものであっても出土土坑の項に示し、土坑を平面形、断面形により、以下の基準で分類し一覧表で示した。

平面形

- I 円形および円形に準じる形
- II 橢円形および橢円形に準じる形
- III 隅丸方形および隅丸方形に準じる形
- IV 不定形

断面図

- A 台形に近い形 (Cの形を除く)
- B 壁および底面が曲線を示す形
- C 立ち上がりが一方に片寄る台形
- D 二段の底を有する形

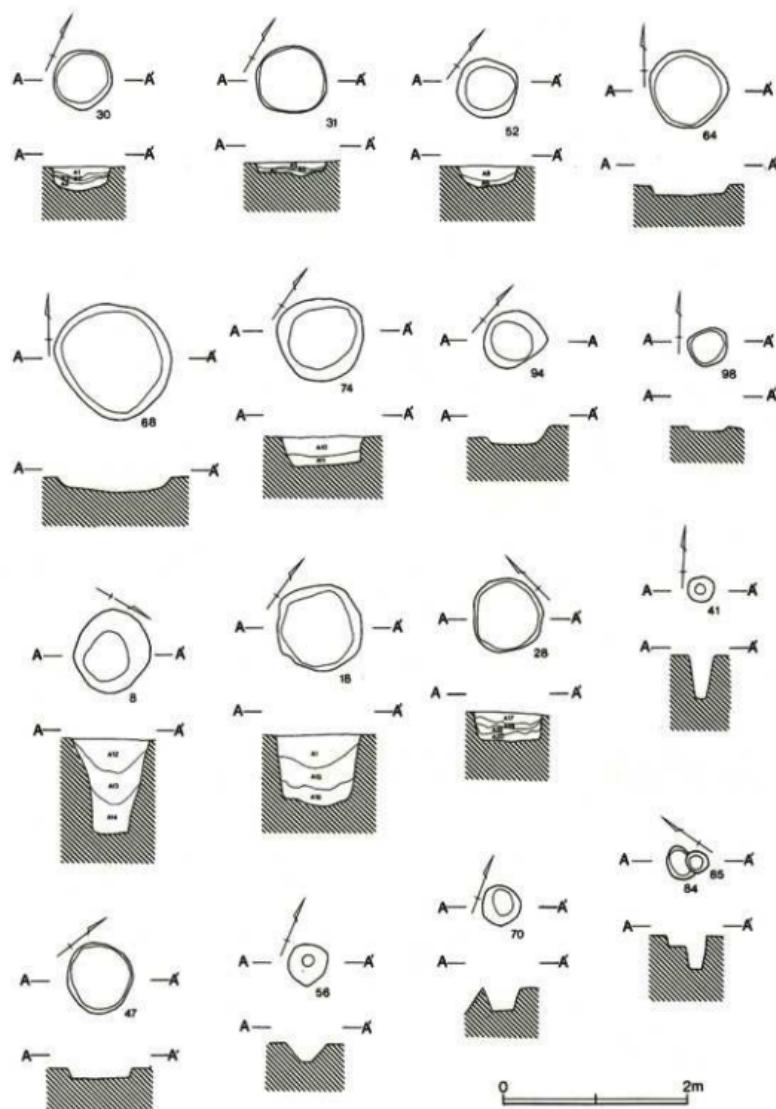
また開口部の長軸 \leq 深さ×3の場合、アルファベットの右肩に「'」の記号を付けた。

土坑集成表(第56図～第63図)

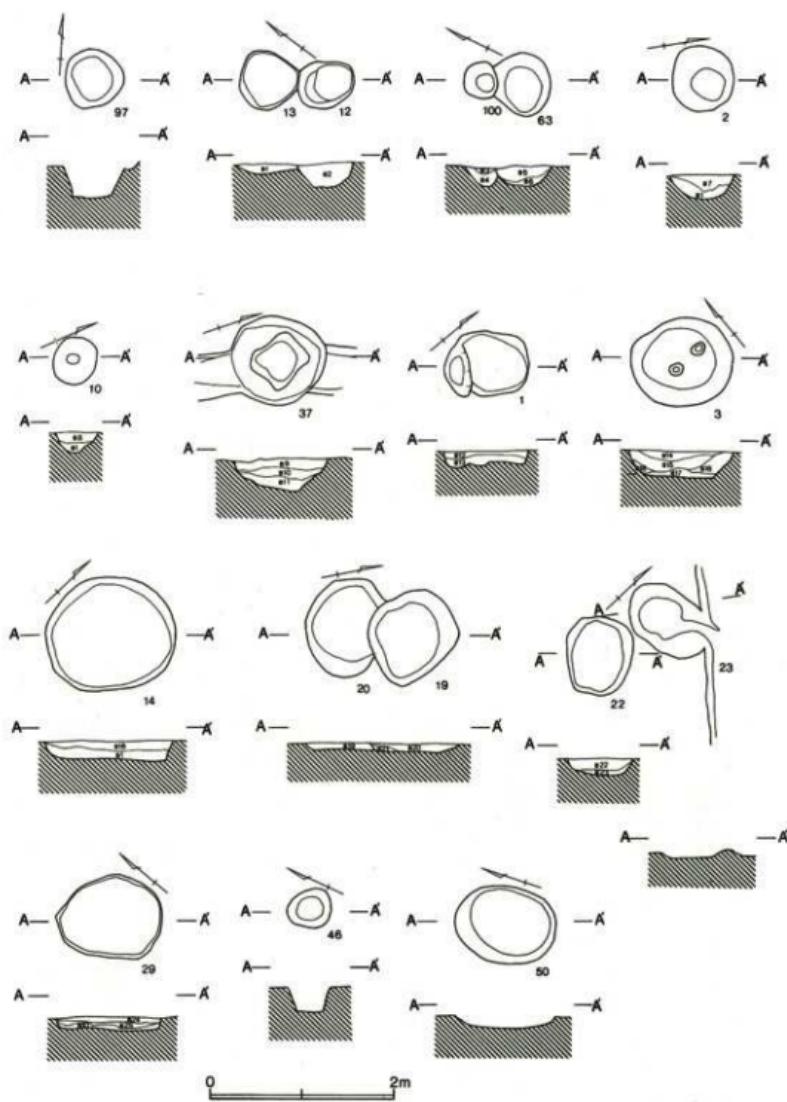
番号	Grid	平面形	断面形	cm			重複遺構	出土遺物・その他
				開口部径	底部径	深さ		
1	F-18	II	A	93×72	82×61	18	1号柱	甕
2	D-18	I	B'	73×69	37×33	25		甕
3	D-19	II	A	111×96	80×65	28		"
4	D-19	II	B'	56×49	15×12	33		"
5	D-19	III	A	72×53	68×44	16		"
6	D-19	II	A'	74×54	43×30	58		
7	D-20	II	A'	53×47	22×21	49		
8	E-17	I	A'	85×79	51×46	104		椀・甕
9	F-18	II	A'	88×79	61×52	34	11号柱	
10	E-14	I	B'	52×47	13×12	21		甕
11	E-14	II	C'	56×48	38×35	30		"
12	E-14	II	B'	62×50	42×38	26	13号土坑	高杯・杯・甕
13	E-14	I	B	68×65	58×57	10	12号土坑	
14	E-14	II	A	140×121	130×11	22		甕
15	D-14	II	B	114×100	86×74	14		
16	E-15	II	C'	57×49	25×20	19		
17	C-10	III	A'	160×100	135×67	46		瓶・甕
18	C-10	I	A'	95×92	80×75	77		瓶・甕・杯
19	C-9	II	A	106×95	82×68	10	20号土坑	甕・杯 19号が古
20	C-9	II	A	110×-	80×-	8	19号土坑	"

番号	Grid	平面形	断面形	開口部径	底 部 径	深 さ	重複遺構	出土遺物・その他	
				cm	cm	cm			
21	E-9		A	115×-	85×-	16			
22	E-9	II	A	85×70	76×56	18			
23	E-9	II	A	97×63	50×43	8			
24	C-9	III	A'	60×55	40×33	25			
25	E-9	III	A	82×58	59×48	21			
26	E-8	III	C	70×50	73×57	24	27号土坑	甕・瓶	
27	E-8	III	A	83×70	73×64	23	26号土坑	杯・甕	
28	E-8	I	A'	79	70	32			
29	E-7	II	A	114×90	107×83	14			
30	F-6	I	A'	66×61	58×49	26			
31	E-6	I	A	78×73	73×70	16		"	
32	C-10	N	A	166×82	160×70	22	34号土坑	"	
33	E-8	N	A	165×110	154×100	17		"	
34	C-10	-	A	86×-	74×65	25	32号土坑	" 34号が古	
35	C-9	-	B	-×116	-×105	24	36号土坑	杯 35号が古	
36	D-9	-	B	185×-	-	32	35号土坑・1号溝	1号が新	
37	D-17	I	D	105×96	45×42	34	5号溝	甕 5号溝が古	
38	E-6	III	A	69×57	56×50	21			
39	F-4	N	A'	173×118	104×72	60	2号住	甕・杯	
40	E-15	III	A	234×112	217×104	22			
41	F-8	I	A'	29×27	12×11	46	16号住・23号住		
42	F-8	II	A'	32×26	15×12	59	16号住・23号住		
43	E-15	II	A'	48×40	39×28	27			
44	E-15	N	C'	70×50	19×9	43			
45	D-15	II	D'	83×72	50×46	27			
46	D-14	II	A'	48×43	30×26	26			
47	E-15	I	A'	77×71	71×63	11			
48	E-15	II	C'	67×56	17×14	32			
49	D-14	II	A'	30×26	22×21	30		高杯	
50	E-19	II	A	110×83	87×667	13			
51	D-13	II	A'	125×82	95×553	74	9号住	9号住が古	
52	D-20	II	I	A'	67×64	55×445	25		
53	D-14	II	A	144×108	121×998	19	9号住		
54	D-14	II	A	89×71	81×666	13			
55	E-14	N	A'	57×43	21×116	20		杯・高杯	
56	B-12	I	A'	45×42	13	20			
57	F-12	-	A'	-×55	30×223	37	58号 59号土坑	7・8号住とも重複	
58	F-12	N	A	76×-	66×-	22	57号 59号土坑	"	
59	F-12	II	A'	53×40	23×115	23	57号 58号土坑	"	
60	B-11	N	A'	125×112	-		17号土坑	甕・杯	
61	B-12	II	A'	75×63	55×442	26		"	
62	B-12	II	A'	52×44	23×220	72			
63	B-12	I	B	69×62	50×440	21	100号土坑	甕・杯 63号が新	
64	B-12	I	A	86×83	76×770	12		椀・甕・杯	
65	B-12	II	A'	38×33	27×223	19	66号土坑		
66	B-12	II	A	52×47	42×334	12	65号土坑	甕	
67	B-12	N	B'	97×86	90×772	35		"	
68	D-10	I	A	128×118	111×996	15			
69	D-11								

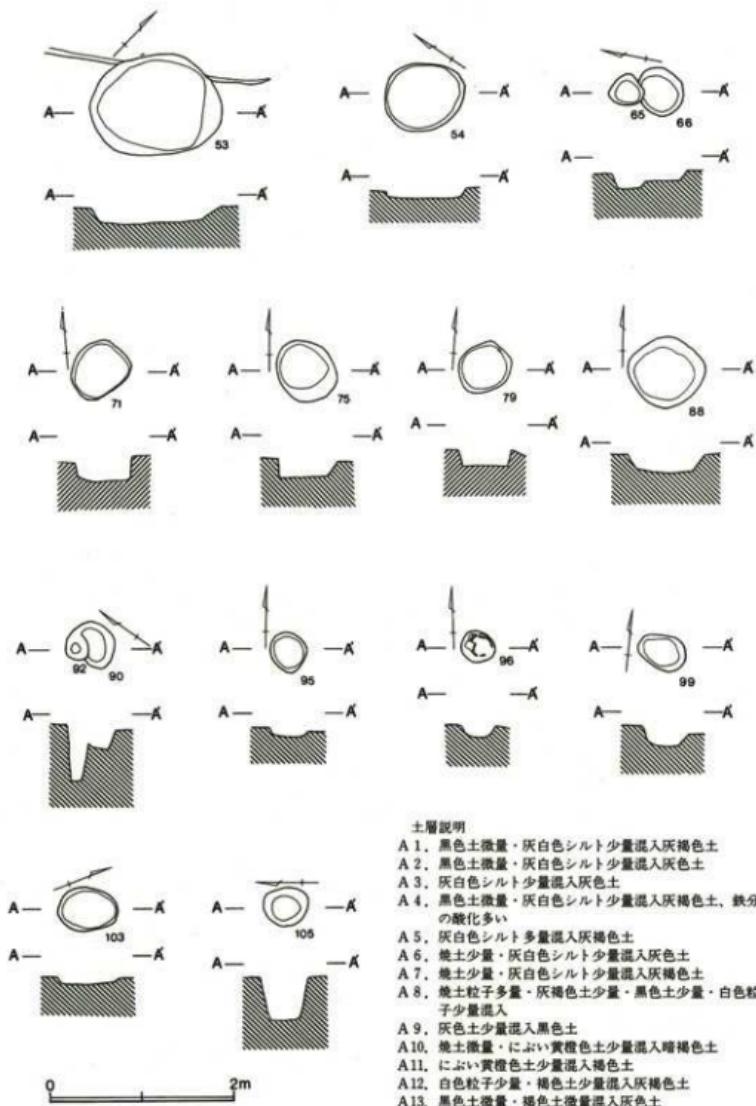
番号	Grid	平面形	断面形	開口部径	底 部 径	深 さ	重複遺構	出土遺物・その他
69	B-13	N	B'	94×83	52×31	30		甕
70	E-13	I	A'	43×42	29×21	27	8号住	
71	E-13	II	A	65×54	56×55	27	8号住	
72	D-9	III	A	373×157	365×154	11		
73	B-13	III	A	89×65	78×40	23		甕
74	B-14	I	A	95×93	80×65	31	21号住	甕、74号が古
75	B-14	II	A	70×64	53×46	21	21号住	
76	E-9	N	A'	53×45	46×45	30	23号住	
77	D-8	N	A'	75×67	38×28	30	20号住	
78	D-7	N	A'	93×87	63×34	41	"	
79	D-8	II	A	60×53	50×47	19	"	
80								20号住P10に変更
81	F-9	II	A'	46×42	35×32	25	23号住	
82	F-8	N	D'	97×62	90×60	34	16号住	
83	F-19	III	A'	228×190	183×140	83		椀・杯・甕・瓶
84	B-13	II	A	38×28	28×20	12	85号土坑	
85	B-13	I	A'	25×23	15	37	84号土坑	
86	B-13	N	A'	44×35	10	53		
87	B-13	III	A'	60×57	31×29	36		
88	D-13	II	A	84×73	65×51	21		
89	B-13	II	A'	32×25	13×12	56		
90	B-13	II	A'	54×38	38×25	28	92号土坑	
91	B-12	II	A'	51×37	34×17	54	93号土坑	
92	B-12	II	A'	32×24	10	62	90号土坑	
93	B-12	II	C'	45×39	16×10	30	91号土坑	甕
94	D-13	I	A	70×57	47×40	21	9号住	
95	B-12	II	A	45×39	35×31	11		
96	C-13	II	A	37×33	30×26	13	1号住	甕
97	C-13	I	A'	64	45×40	36	"	
98	C-13	I	A	44×40	35×31	6	"	
99	B-12	II	A'	54×36	42×26	23		
100	B-12	I	B'	40×37	22×20	22	63号土坑	
101	E-11	III	A'	98×65	78×52	40		甕・椀
102	F-18	N	A	75×67	60×56	10	11号住	杯
103	B-10	II	A	65×49	58×41	5		甕
104	B-11	II	B'	33×26	22×15	12		甕
105	B-12	II	A	49×43	32×26	47		甕
106	D-10	N	A'	187×138	170×122	90		甕・杯
107	D-10	N	A'	212×183	193×143	100	"	
108	D-10	N	A'	242×165	207×148	85		"・常滑系甕、木製品、砥石



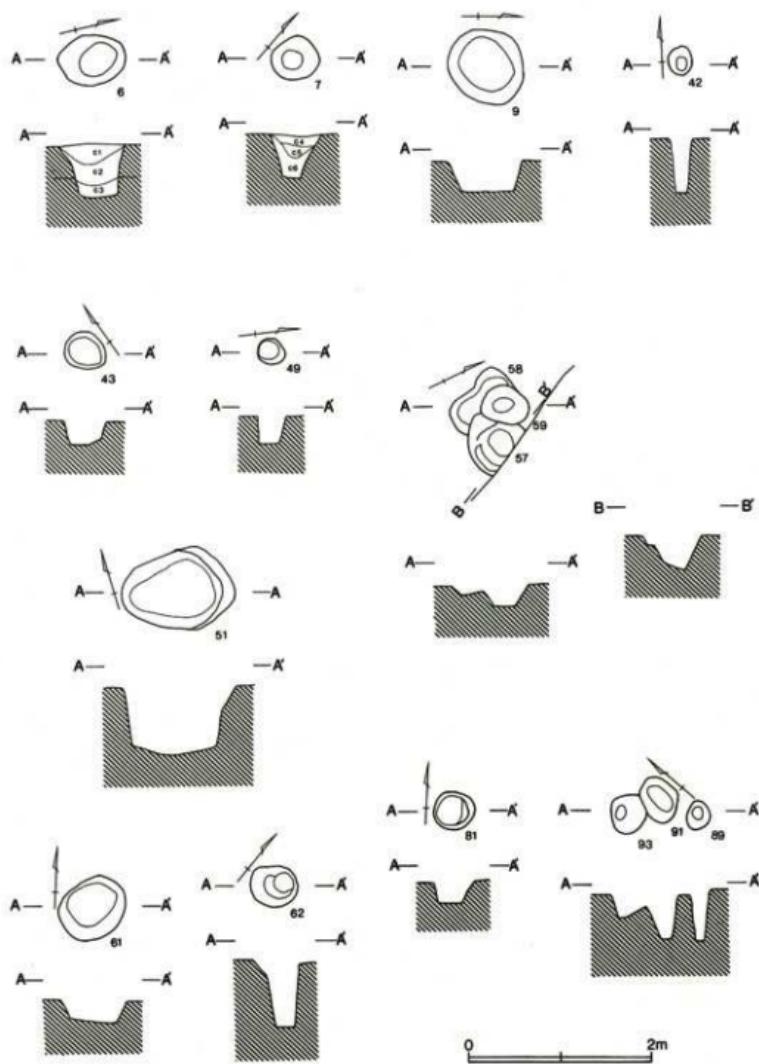
第56図 土坑(1)



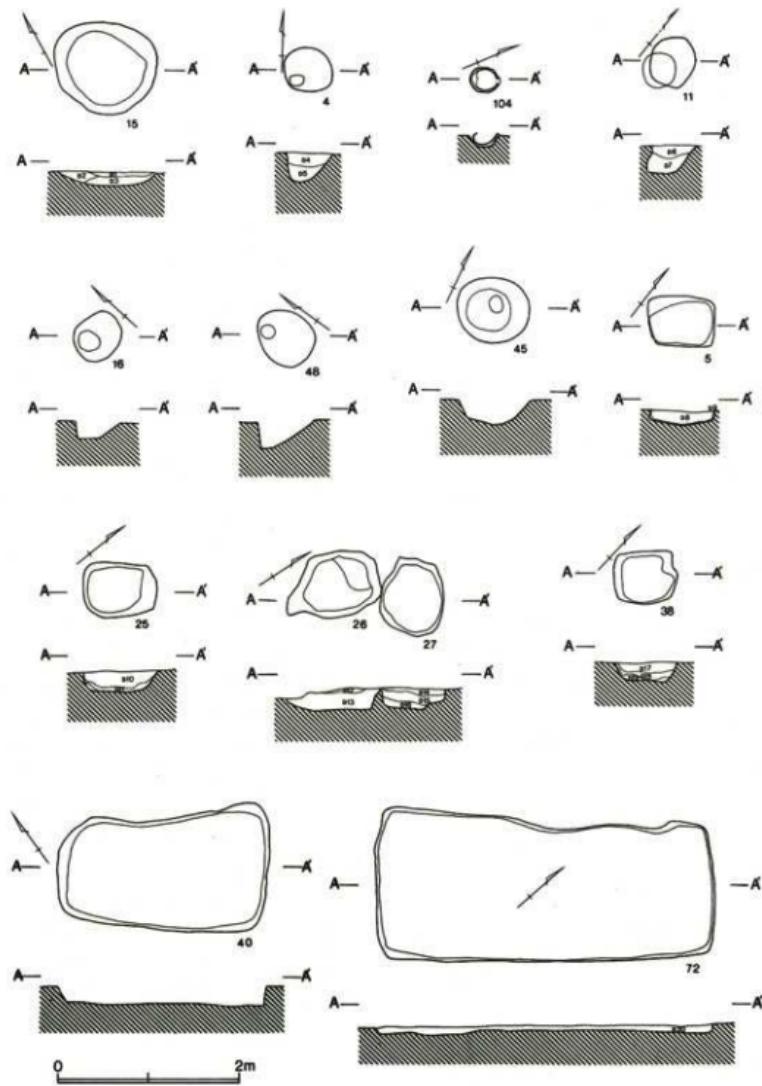
第57図 土坑(2)



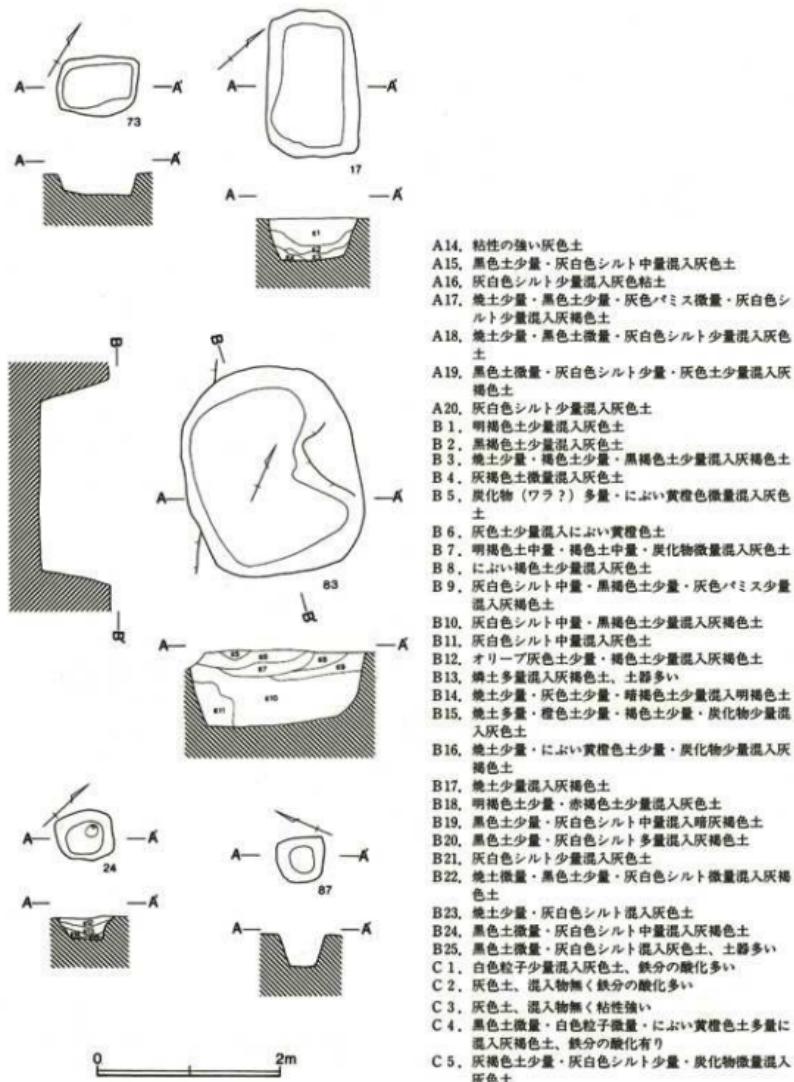
第58図 土坑 (3)



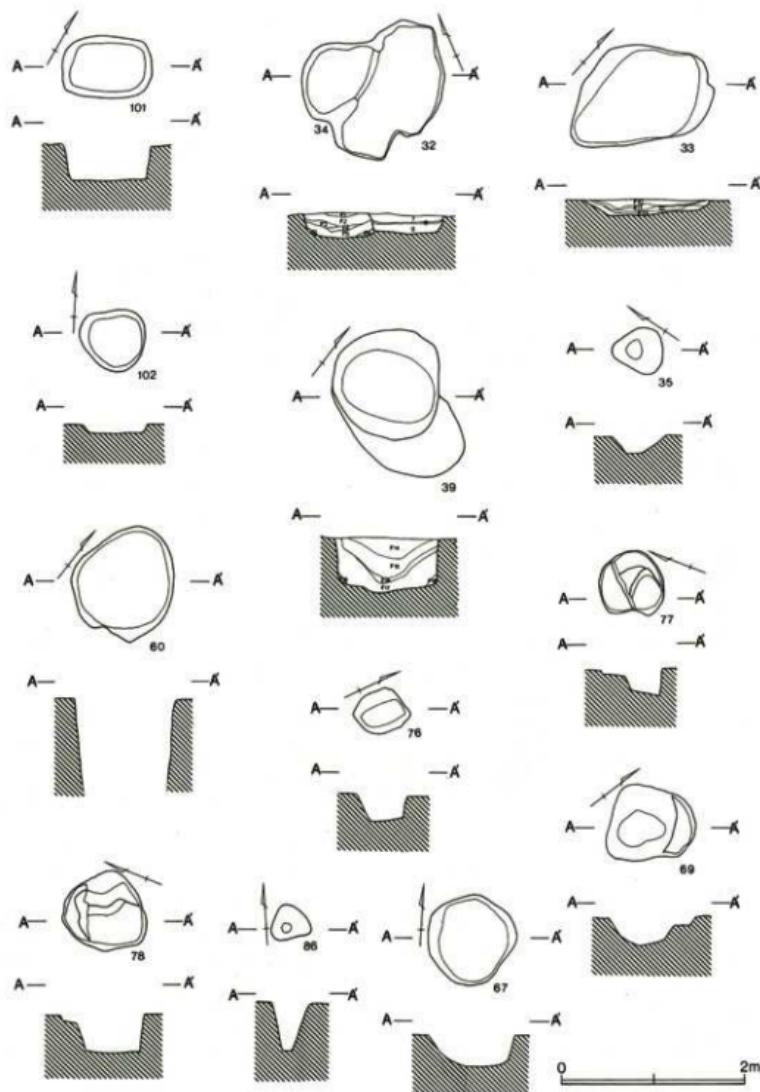
第59図 土坑(4)



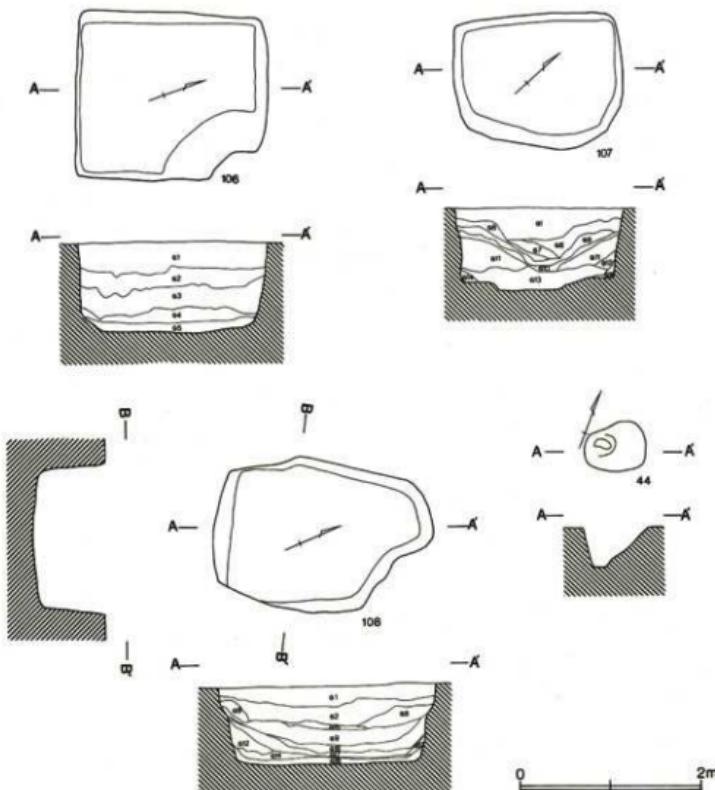
第60図 土坑(5)



第61図 土坑（6）



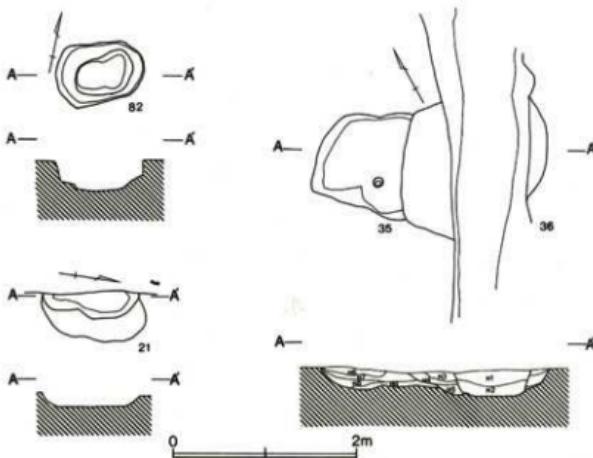
第62図 土坑 (7)



第63図 土坑(8)

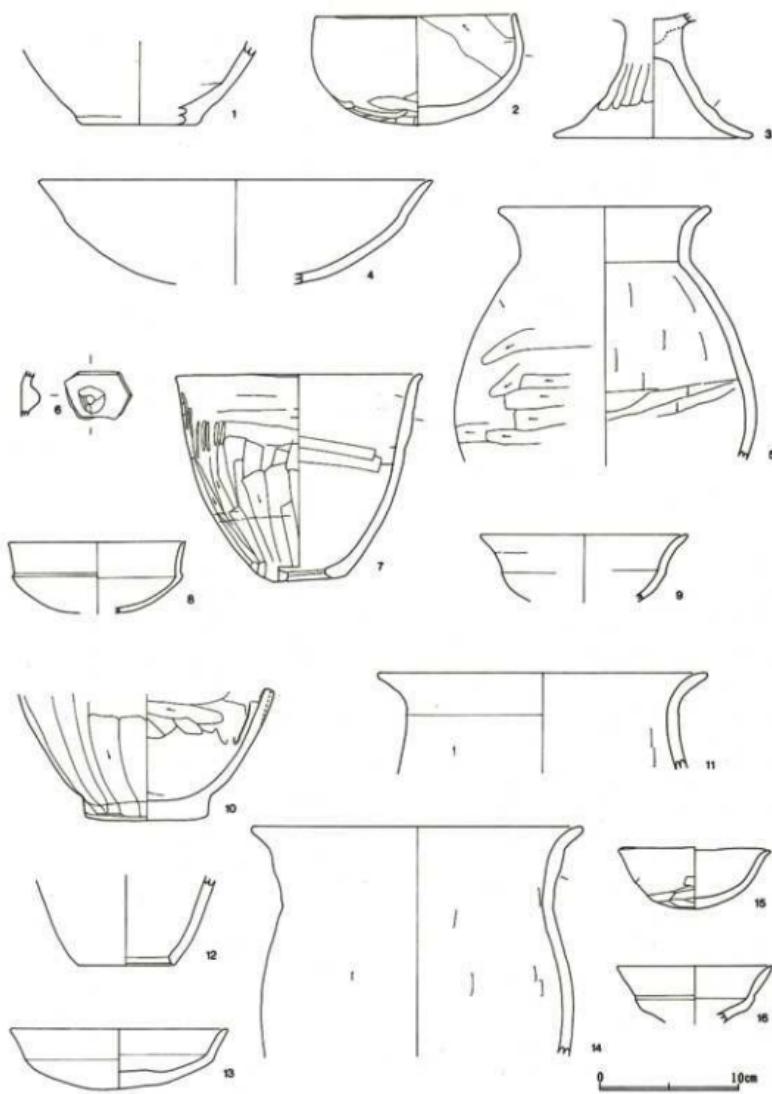
- C 6. 黒色土微量、にほい黄橙色土多量に混入灰色土
D 1. 灰色土が染状に混入する明褐色土
D 2. 灰褐色土少量混入灰色土
D 3. 灰色土少量、褐色土少量、灰白色シルト少量混入灰褐色土
D 4. 灰白色シルト少量、暗褐色土少量、白色粒子微量混入明褐色土
D 5. 灰白色シルト少量混入褐色土
D 6. 褐色土粒子多量、灰白色シルト少量混入灰色土
D 7. 混入物無い灰色土
D 8. 灰色土が染状に混入する褐色土、白色パミス微量に含有
D 9. 炭化物(ワラ?)
D 10. にほい黄橙色シルト中量、灰白色シルト中量、黒色土少量、焼土少量混入灰褐色土
D 11. 灰白色シルト中量、黒色土微量混入灰色土
D 12. 少量混入少量、灰色土少量、焼土少量混入にほい黄橙色土
D 13. 焼土微量、灰白色シルト中量混入灰色土

- D 14. 黒色土少量、焼土少量、灰白色シルト多量混入灰褐色土
D 15. 焼土中量、灰白色シルト多量混入灰色土
D 16. 燃土少量、炭化物少量、灰白色シルト中量混入灰色土
D 17. 褐色土少量、黒色土少量、焼土少量、にほい黄橙色シルト少量混入灰褐色土
D 18. D17に混入物同様灰色土
D 19. 黒色土微量、にほい黄橙色シルト少量混入灰色土
D 20. 黑色粒子少量、灰白色シルト多量混入灰褐色土
E 1. 黑色土少量、白色パミス少量、灰色土シルト少量混入灰褐色土
E 2. 黑色土少量、にほい黄橙色シルト少量混入灰色土
E 3. にほい黄橙色シルト少量混入灰褐色土、鉄分の酸化有り
E 4. 灰白色シルト中量混入灰色粘土
E 5. 焼土微量、褐色土多く混入灰色土
E 6. 褐色土多量、焼土微量混入灰褐色土

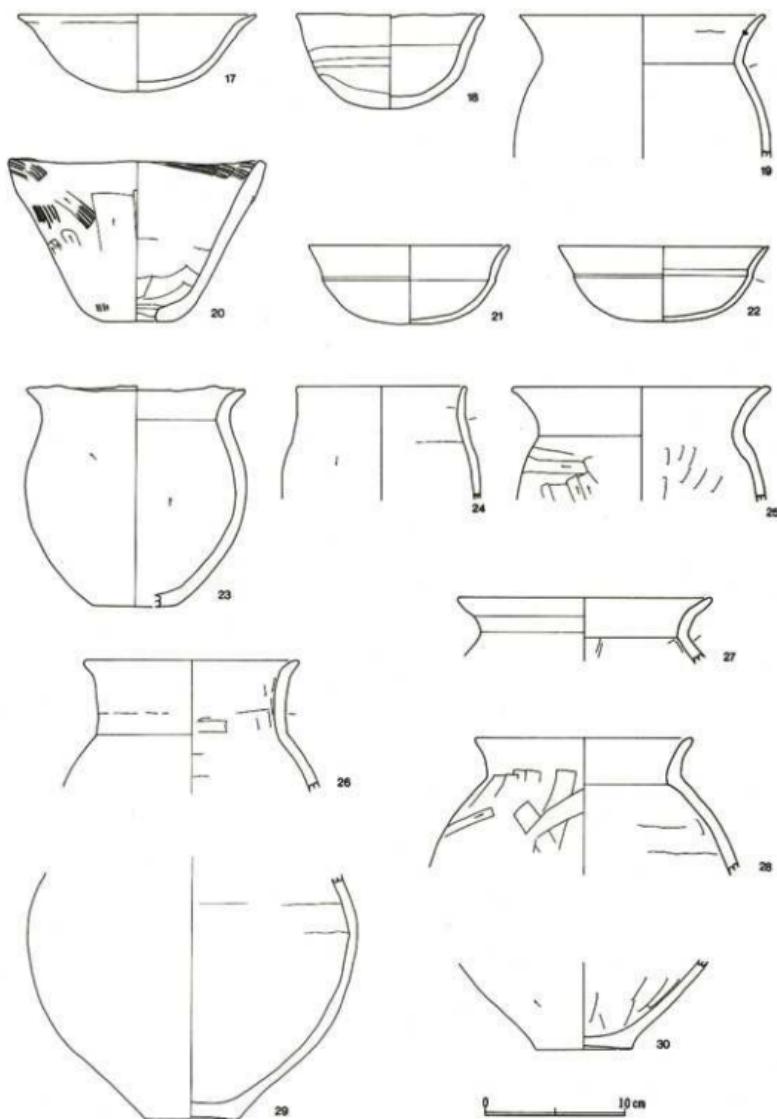


第64図 土坑 (9)

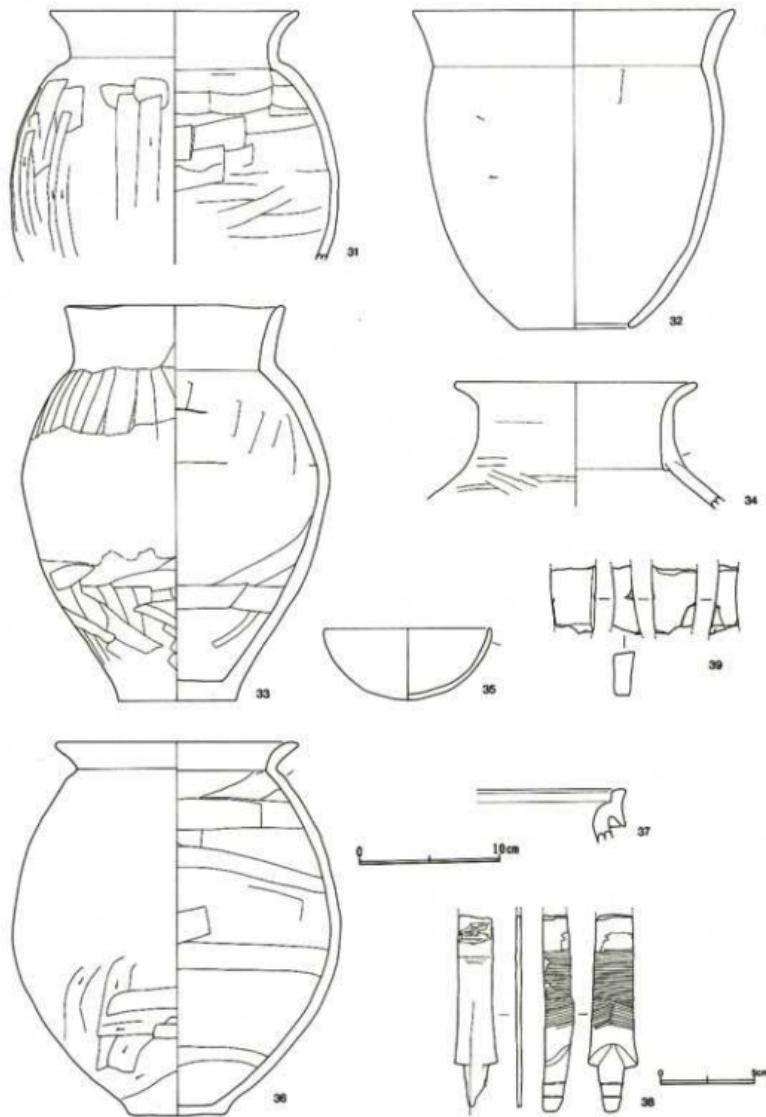
- E 7. 焼土中量混入灰白色土
 E 8. 灰色土多量・灰色土微量・焼土微量混入暗褐色土
 E 9. 炭化物少量・焼土微量混入灰白色土
 E 10. 灰色土少量・焼土中量混入明褐色土
 E 11. 焼土中量・灰褐色土多量混入灰白色土
 E 12. 黒色土微量・焼土微量・灰白色シルト少量混入褐褐色土
 E 13. 灰白色シルト少量・焼土微量混入灰白色土
 E 14. 灰色シルト混入灰白色土
 E 15. 焼土少量・灰白色シルト少量混入灰白色土
 F 1. 白色バニス少量・黒色土少量・によい黄橙色シルト少量混入灰白色土
 F 2. 黒色土微量・によい黄橙色シルト少量混入灰白色土
 F 3. 黑色土少量・によい黄橙色シルト少量混入灰褐色土
 F 4. 黑色土微量・によい黄橙色シルト少量混入灰白色土
 F 5. 黑色土微量・によい黄橙色シルト少量混入灰褐色土
 F 6. によい黄橙色シルト少量混入灰白色土
 G 1. 黑色土少量・灰白色シルト微量混入灰褐色土・粘性やや有り
 G 2. G 1に類似するが鉄分の酸化有り
 G 3. 灰白色シルト中量混入灰白色土・粘性強く古墳時代の混入遺物多い
 G 4. 灰白色粘性土少量混入灰白色土・粘性強い
 G 5. 暗褐色シルト・鉄分の酸化多い
 G 6. 灰白色シルト少量・黑色粒子微量混入灰白色土・粘性強い
 G 7. 灰白色シルト少量混入暗灰色土・粘性強い
 G 8. 灰白色シルト少量・灰色粘性土少量・黑色土微量混入灰白色土
 G 9. 灰白色シルト微量混入灰白色土・粘性強い
 G 10. 灰白色シルト少量・灰色粘性土少量混入綠灰色土
 G 11. 灰白色シルト少量混入灰白色土・粘性強い
 G 12. 灰白色シルト少量混入灰白色土・粘性強い
 G 13. 灰白色シルト少量混入暗綠灰色土・粘性強い
 G 14. 灰白色シルト少量・暗青灰色粘性土のブロック微量混入綠灰色土
 G 15. 灰白色シルト少量・暗灰色土微量混入灰白色土
 G 16. 灰色土微量混入によい黄橙色シルト
 G 17. 灰白色シルト少量・灰色土少量混入暗灰色土
 G 18. 灰白色シルト少量混入暗灰色土
 H 1. 黑色土微量・焼土微量・によい黄橙色シルト少量混入灰褐色土
 H 2. 混入物H 1と同様な暗灰色土・鉄分の酸化有り
 H 3. 焼土少量・によい黄橙色少量混入暗灰色土
 H 4. 烧土多量・によい黄橙色シルト多量混入暗褐色土
 H 5. によい黄橙色シルト多量混入・焼土少量混入灰白色土
 H 6. 烧土微量・暗灰色土少量混入によい黄橙色シルト
 H 7. によい黄橙色シルト少量混入暗灰色土
 H 8. によい黄橙色シルト少量混入灰白色土
 H 9. 灰色シルト少量混入灰白色土



第65図 土坑出土遺物（1）



第66図 土坑出土遺物（2）



第67図 土坑出土遺物（3）

土坑出土遺物観察表（第64図～第66図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	底径 (8.2)	丸味を持つ胴部から突出する様に底部へ至る。内面の底部と胴部の境は滑らかで不明瞭。	外面：ヘラナデ状の痕跡あるが不鮮明。 内面：横方向のヘラナデが施されるが不鮮明。	1号土坑出土。 胎：白色粒子多く、透明粒子僅かに含有。 色：黒褐色。 残：やや不良、1/4。
2	瓶	口径 14.5 器高 7.9	丸い底部から内湾して口縁部に至るか、口縁部は端部寄りで僅かに外反する。端部はやや尖り気味、口縁部と底部の境は内面に棱がつくが、外面は滑らかで不明瞭。	外面：底部最大径付近から口縁部までヨコナデ、底部は横方向のヘラケズリ、ヨコナデへラケズリの間は不明。 内面：底部上位から口縁部はヨコナデ、中央部不明。 内外面赤色塗彩。	8号土坑出土。 胎：透明粒子、白色粒子含有。 色：灰白色～浅黄褐色。 残：やや不良、完形。
3	高杯	底径 14.4	杯部とは杯部に付随したボゾにより接合。脚部は開きながら裾部へ移行。脚部外面は粘土帯の凹凸が認められる。	外面：脚部は縦方向のヘラナデ、裾部はヨコナデ。 内面：脚部は横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。 裾部はヨコナデ。 杯部・脚部赤色塗彩。	12号土坑出土。 胎：白色粒子、灰色半透明粒子含有。 色：にぶい橙色～灰赤褐色。 残：やや不良、脚部完。
4	杯	口径(28.4)	内湾する底部から明瞭な段を経て僅かに外反する口縁部に至る。端部は尖り気味に修められている。口縁部と底部の境は内外面とも明瞭な後で区別されている。	外面：口縁部ヨコナデ、底部は不明。 内面：底部と口縁部の境の後から口縁部はヨコナデ、底部は不明。 内外面赤色塗彩。	12号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、1/4。
5	甕	口径 15.4 胴部径21.8	下半で膨らむ胴部から、外面とも明瞭な棱を持って口縁部に移行し、口縁部は外反しながら丸い端部に至る。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部上半横方向のヘラナデ、下半は粘土帯接合部分に貼り付けた粘土に弱いヘラナデを施している。	12号土坑出土。 胎：白色粒子含有、僅かに透明粒子含む。 色：内面はにぶい橙色～黒色。 残：やや不良、口縁部完。
6	瓶		瓶の把手部分と思われる。口縁部直下の部分に円錐形の突出部を有する。	内外面とも整形は不明。	17号土坑出土。 胎：白色粒子含有。 色：内面灰白色、外面はにぶい橙色。 残：不良、破片。
7	瓶	口径 17.4 ～18.4 器高 14.9 孔径 2.8	底部からゆるやかに内湾して口縁部に至る。口縁端部は外側へ曲げられ、部分的に巻き込んでいる。孔部は2段に面取りされている。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縱方向のヘラケズリ、一部縱方向のヘラナデ、孔周	18号土坑出土。 胎：白色、透明粒子含有。 色：内面は灰白色～にぶい黄褐色、外面は灰白色～褐灰色：黒色。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
				辺斜方向へのラケズリで、 胴部上半と下半の一部に粘 土帯の接合痕（左回りで巻 き上げ）残る（幅0.6~1.2 cm）。	残：良好、完。
8	杯	口径(12.8)	口縁部は底部と明瞭な段で 区別され、僅かに外反して 立ち上る。端部は外側で尖 る。内面も口縁部と底部の 境は明瞭な段で区別される。	内面：口縁部ヨコナデ、底 部は不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底 部は不明。	23号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明粒子 含有。 色：内面は橙色～赤橙色 外面は灰白色～橙色。 残：不良、1/4。
9	杯	口径(15.0)	口縁部は外反し、外傾する。 端部は尖り気味、口縁部と 底部の境は外面では明瞭な 段を持ち、内面は滑らかで 僅かな棱がつく。	内面：不明 外面：口縁部ヨコナデ、底 部横方向へのラケズリ、口 縁部中央に粘土帯の接合痕 残す。 内外面赤色塗彩。	24号土坑出土。 胎：白色、透明粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：不良、1/7。
10	甕	底径(8.8)	丸味を持つ胴部からかなり 突出して底部に至る。底部 は中央で最も突き出で厚く なる。	内面：不定方向のヘラナデ。 外面：底部は一定方向のヘ ラケズリ、胴部は縱方向の ヘラケズリ。 胴部上半との接合部に刻み 目を入れている。	25号土坑。 胎：白色粒子、破粒含有。 色：内面は橙色、外面は明 褐灰色～にぶい橙色。 残：やや不良、底部完、胴 部下半1/3。
11	甕	口径(23.8)	口縁は外反し、端部は丸 い。外面の口縁部と胴部の 境は段によって区段される が内面は滑らかで不明瞭。	内面：口縁部ヨコナデ、胴 部不定方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴 部は縱方向のヘラケズリが 施されるが不鮮明。	26号土坑出土。 胎：白色粒子多く、透明粒 子含有。 色：橙色、外面一部黒色。 残：不良、1/4。
12	甕	底径(孔径) (6.8)	直線的に底部へ移行するが 底部近くで僅かに内傾する。 孔端部は尖る。	内面：不明。 外面：縱方向のヘラケズリ が施されるが不鮮明。	26号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明、透 明粒子含有。 色：内面は橙色～にぶい橙 色、外面は明褐灰色～黒色。 残：不良、1/3。
13	杯	口径 15.6 器高 4.4	口縁部は僅かに外反しなが ら外傾する。口縁部は丸く 修められている。口縁部と 底部の境の外面は明瞭な段 で、内面は不明瞭であるが 棱で区別される。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底 部横方向へのラケズリ。 内外面赤色塗彩。	27号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明粒子 含有。 色：内面はにぶい橙色～黒 色、外面は褐灰色～黒色。 残：不良、口縁部1/2欠。
14	甕	口径(24.0)	頸部の屈折部から外反しな	内面：口縁部ヨコナデ、胴	29号土坑出土。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
			がら途中で肥厚し、丸い口縁部へ至る。内面の胴部から口縁部への移行は滑らかで、境を持たない。	部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部の肥厚部分から端部までヨコナデ 以下 胴部縱方向のヘラケズリが施されるが、器面状態悪く 単位等不明。	胎：白色、透明粒子、砂粒 含有。 色：内面は橙色～にぶい橙色、外表面は灰白色～にぶい 橙色。 残：不良、口縁部1/4。
15	杯	口径 11.0 器高 4.4	底部から内湾しながら口縁部に至り、端部近くで外反する。端部は部分的に尖り気味。底部と口縁部の境は不明瞭。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底 部不定方向のヘラケズリ、 内面赤色塗彩、外表面は不明。	35号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明、透 明粒子含有。 色：内面は褐色、外表面は 褐色～にぶい赤褐色、一 部黒色。 残：不良、完。
16	高杯	口径(11.2)	口縁部は底部と明瞭な段で区別され 中央で肥厚して尖る端部に至る。口縁部と底部の境は内面は屈折的で稜を持ち 外面は段を有する。	内外面とも、土器が軟質のため整形等ほとんど不明。	49号土坑出土。 胎：白色粒子、微細な透明 粒子含有。 色：橙色～にぶい橙色。 残：不良、口縁部1/4。
17	杯	口径 17.0 器高 5.5	口縁部は外反し、外傾する。端部は尖る。口縁部と底部の境は滑らかで、内面とも不明瞭。口縁部寄りに粘土帶の接合痕が部分的に残る。	内面：口縁部ヨコナデ、底 部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底 部不定方向のヘラケズリが 施されるが不鮮明。 内外面赤色塗彩。	55号土坑出土。 胎：灰色半透明、透明粒子 僅かに含有。 色：灰白色。 残：不良、3/5。
18	椀	口径 13.4 器高 6.8	外面の口縁部と底部の境は全く不明で丸底となるが、内面は途中で棱を持つ。全体的に器壁厚く、口縁部も丸い。粘土帶の巻き上げ(左回り)痕の凹凸残る。	内面：底部は器壁面の剥離 多く不明、口縁部ヨコナデ。 外面：底部は剥離多く不明、 口縁部ヨコナデ。 内外面赤色塗彩。	64号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明粒子 含有、僅かに透明粒子含む。 色：灰白色～にぶい橙色。 残：不良(被熱の痕跡が現 れる)、口縁部一部欠。
19	小形甌	口径(17.6)	口縁部は外反し外傾する。端部は尖る。口縁部から胴部への移行は屈折的であるが、外表面は滑らかである。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴 部縱方向のヘラケズリが施 されるが不鮮明。	74号土坑。 胎：白色、透明、赤色粒子 僅かに含有。 色：灰白色～褐色。 残：不良、1/4。
20	甌	口径 18.4 器高 11.5 孔径 2.8 ～ 3.1	鉢形を呈し、器壁が全体的に厚く、口縁部は折り返され特に厚い。胴部から口縁部までほぼ直線的で、端部は平坦となる。	内面：口縁部木口状工具に よる斜方向のナデ、胴部下 端横方向のヘラナデ、胴部 中位に粘土帶の接合痕残る。 外面：口縁部横ナデの後、 胴部上位とともに木口状工	78号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明、透 明粒子含有。 色：にぶい橙色。 残：やや不良、1/2。 口縁部に赤色塗彩の痕跡

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
				具による斜方向のナデ、胴部中位は縱方向のヘラケズリ。	有り。
21	杯	口径(14.4)	口縁部は外反し、外傾する。端部は尖り気味、口縁部と体部の境は、外面では明瞭な棱を内面は滑らかであるが弱い棱を持つ。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不鮮明であるが不定方向のヘラケズリ。 内外面赤色塗彩。	83号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：内面はぶい橙色、外面は褐灰色～黒色。 残：不良、1/5。
22	杯	口径(15.1)	口縁部は底部との境付近で外反し、外傾する。端部は尖り気味、口縁部と体部の境は、内外面とも明瞭な棱で区別される。	内面：不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底部不定方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。 内外面赤色塗彩。	83号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：ぶい橙色～黒色。 残：不良、1/3。
23	甕	口径 15.6	丸い胴部から口縁部へは外面は滑らかに移行し、内面は明瞭な棱で区別される。口縁部は外反しながら丸い端部に至る。端部面は不整形で凹凸がある。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部縱方向のヘラケズリを施すが不鮮明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半部は斜方向のヘラケズリを施すが不鮮明。	83号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：内面は明褐灰色～橙色 外面は赤橙色～暗赤灰色。 残：不良 脇部下半1/2欠。
24	甕	口径(12.2)	胴部から口縁部へは内外面とも滑らかに移行する。口縁端部は丸い。	内面：口縁部ヨコナデ胴部不明、粘土帯の接合痕が残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縱方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。	83号土坑出土。 胎：白色、透明粒子含有。 色：ぶい赤褐色～褐灰色。 残：やや不良、口縁部1/5。
25	甕	口径(18.5)	胴部から口縁部への移行は屈折的であるが、明瞭な棱を持たない。口縁端部は尖る部分と平坦な部分があり一定しない。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部上位横方向のヘラケズリ 斜方向のヘラケズリ。	83号土坑出土。 胎：白色、透明粒子、砂粒含有。 色：ぶい橙色～黒色。 残：良好、口縁部1/4。
26	甕	口径(15.4)	口縁部は胴部から外傾気味に立ち上り、端部近くで外反する。端部は丸い。口縁部から胴部への移行は明瞭な棱を持たない。	内面：口縁部ヨコナデ後、横方向のヘラナデ、胴部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部横、斜方向のヘラケズリ痕あるが不鮮明。 胴部内外面に粘土質の接合痕残る。	83号土坑出土。 胎：白色粒子含有。 色：ぶい橙色～黒色。 残：不良、口縁部1/4。
27	甕	口径(18.2)	胴部から屈折的に口縁部に移る。口縁部は外傾し、途	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向ヘラナデ。	83号土坑出土。 胎：白色粒子含有。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
28	甕	口径 15.6	中でさらに外側へ屈折する。端部は丸い。	外面：口縁部ヨコナデで一部胴部に及ぶ、胴部不明。 内：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ、粘土帯の接合痕残る。 外：口縁部ヨコナデ、一部胴部へ続く縱方向のヘラケズリ入る。胴部縱・斜方向のヘラケズリ。	色：内面はにぶい橙色～褐色、外面は明褐色～褐色。 残：やや不良、口縁部1/4。
29	甕	底径 6.6	底部は上げ底で、胴部からやや突出する。	内：胴部横方向のヘラナデ、粘土帯の接合痕残る。底部不定方向のヘラナデ。 外：胴部縱・斜方向のヘラケズリ、底部不定方向のヘラケズリ。内外面とも整形は不鮮明。	83号土坑出土。 胎：白色、透明粒子含有。 色：明褐色～褐色。 残：不良、底部完、胴部下半1/3。
30	甕	底径 6.8	底部は上げ底で、胴部からは突出している。底部周縁には粘土が付着している。	内面：横方向のヘラナデ、 外面：斜・横方向のヘラケズリが施されるが不鮮明。 底部は不定方向ヘラケズリ、付着の粘土は意図的に付けた様子ではない。	83号土坑出土。 胎：白色粒子、砂粒僅かに含有。 色：内面は褐色～黒褐色、 外面はにぶい橙色～黒褐色。 残：やや不良、底部1/2。
31	甕	口径 17.8	丸い胴部からやや屈折的に口縁部に至る。胴部から口縁部の移行は、外面では2か所の稜を持つ。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、一部胴部側に及ぶ。胴部縱方向のヘラケズリ、一部クシ目痕を残す工具の痕跡が認められる。	83号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明、透明粒子含有。 色：にぶい橙色～褐色。 残：やや不良、口縁部完。
32	瓶	口径 23.0 孔径 7.6 器高 22.7	胴部から口縁部への移行は屈折的で内外面とも棱で区別される。口縁部は外傾し器壁がやや厚い。口縁部と孔端部とともに丸く修められている。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラケズリ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部横・斜方向のヘラケズリ 整形はいずれも不鮮明。	83号土坑出土。 胎：灰色半透明粒子含有。 色：内面はにぶい橙色～褐色、 外面はにぶい褐色～黒色。 残：不良、胴部下半1/2欠。
33	甕	口径 15.8 底径 8.4 器高 28.1	胴部上半に最大径を持つ。胴部から口縁部への移行は屈折的で内面は明瞭な稜で区別されるが、外面は滑らかである。底部は平坦。	内面：口縁部ヨコナデ、胴部横・斜方向のヘラナデ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半縱方向のヘラケズリ 下半は斜・横方向のヘラケ	96号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明粒子含有。 色：橙色～褐色。 残：やや不良、胴部1/2欠。

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
34	甕	口径 17.4	胴部から外面は滑らかに口 縁部に移行するが、内面は 屈折的である。口縁部は直 線的に立ち上がり、外反す る。端部は丸く修められて いる。	ズリ。	胴部中位にタール・灰の付 着があり整形不明瞭となる。 内面：口縁部ヨコナデ、胴 部横方向のヘラナデ、口縁 部と胴部の境に粘土帯の接 合痕残る。 外面：口縁部ヨコナデ、胴 部横・斜方向のヘラミガキ が施されるが不鮮明。 口縁部外面中央に糸状压痕。	101号土坑出土。 胎：白色、灰色半透明、透 明粒子、透明な少疊（1～ 5mm大）含有。 色：内面は褐灰白～黒色、 外面はにぶい橙色～褐灰色。 残：不良、口縁部完。
35	杯	口径(12.0) 器高 5.1	底部から口縁部への移行は 内外面とも滑らかで棱を持 たない。口縁端部は丸く修 められている。器壁が全体 的に薄い。		内面：口縁部ヨコナデ、底 部不明。 外面：口縁部ヨコナデ、底 部横方向のヘラケズリが施 されるが不鮮明。	102号土坑出土。 胎：白色粒子含有。 色：橙色～灰赤色、一部黒 色。 残：不良、1/4。
36	甕	口径(17.4) 胴部最大径 23.4 底径 7.0 器高 26.6	胴部下位に最大径を持ち、 口縁部は小さく、端部は丸 い。底部はほぼ平底で、胴 部より突出する。口縁部か ら胴部への移行は屈折的で あり、明瞭な棱を有する。		内面：口縁部ヨコナデ、胴 部から底部横方向のヘラナ デ。 外面：口縁部ヨコナデ、胴 部上位縱方向のヘラミガキ 中位～底部まで横・斜方向 のヘラケズリ。	104号土坑出土。 胎：白色粒子、赤色粒子 (1～5mm大)含有。 色：にぶい橙色～褐灰色、 外面一部黒色。 残：やや不良、胴部上半1/2 口縁部一部残る。
37	甕		口縁部はN字状に折り返され、幅2.5cmの縁帶となり 上下方向に良く延びている。		内外面とも回転によるナデ。	108号土坑出土。 胎：灰色半透明粒子僅かに 含有。 色：灰色、一部灰白色。 残：良好、小片。 常滑系。
38	弓		重縄(しげとう)弓の弦(はず)側部分。弦には弦巻の 痕であろうか、凹み有り。	黒漆をかけた後、縄を巻い でいる。弦側の縄は千段巻 されている。		108号土坑出土。 構造は三枚打である。左の 薄い一枚は剥がれた部分。
39	砥石		上部に向かって細身となる 四角柱で、長軸端は破損し ている。使用面はすりへつ て曲面を呈する。	使用面は4面確認される。		108号土坑出土。 色：灰白色～明オリーブ灰 色。 石質：砂岩。

3. 溝

1号溝（第68図）

C-8・9、D-9、10、E-10区で確認された。15号住、35号、36号土坑と重複し、E-10以西は擾乱により不明であり、C-8以東は調査の不手際により旧河川との重複関係は不明である。確認された長さは32.5mで傾斜方向へN-33°-Eをもって直線的に延びる。幅は15号住内で1.28mと広いが、土坑の重複の可能性もあり、遺構の重複が無い部分で0.7~0.8mを測る。断面は壁に凹凸のある逆台形を呈し、最深部で0.4mを測る。

出土遺物は鉄製鎌破片、軽石があるが、時期は不明である。

2号溝（第69図）

B-18・19、C-17・18、D-16・17、E-15・16、F-15区で確認され、4号・5号溝と重複する。確認された長さは63mで、西北西方向から東南東方向に延びるが、全体的に北方向へカーブしている。3号溝と並行するが新旧関係は不明である。溝の断面形は壁途中に段を持ち、底面は確認面プランの南側に寄るが、D・Eラインの中間から東は底面が変わり、溝の中央に位置する。幅はE・F区部分で確認面が1.8~4.3m、底面が25~35cm、最大部の深さ52cmを測る。B-D区部分で確認面の幅2.5~2.7m、底面の幅75~110cm最大部の深さ52cmを測る。

出土遺物は覆土中に古墳時代の土師器が多数含まれていたが、その他に中世の灯明皿や瀬戸、美濃系陶器および常滑系の鉢が出土した。

3号溝（第69図）

B-19、C-18・19、D-17・18、E-16・17、F-15・16区で確認された。溝は2号溝と並行し、同様に北へカーブし、確認された長さは58mである。溝の断面形は2号溝同様壁途中に段を持つが明晰な段ではなく、全体的に曲線に近く、底面は2号溝とは逆にやや北側に寄る。またCラインより東側からは溝が2本になり細くなる。溝の新旧関係は不運にも分離する部分に擾乱があり不明である。幅は確認面が2~3m、底面0.9~1.7最大部の深さ43cmを測る。2本に別れた溝は確認面の幅がどちらも50~70cmで、底面の幅は北側が20~50cm、南側が40~50cmを測る。深さは北側の方がやや深い。

出土遺物は2号溝同様土師器片多いが、中に常滑系の甕が含まれていた。

4号溝（第68図）

D-16区に位置し、D-17区で2号溝と接し、北側で5号溝と接する。確認された長さは6.7mで、傾斜方向へS-23°-Wをもって直線的に延びる。断面形は底面がやや丸底を呈する台形である。幅は確認面で60~80cm、底面で45~65cm、最深部は26cmを測る。5号溝との新旧関係は不明であるが、覆土はほぼ同様であり、同時期の溝の可能性が高い。

出土遺物は古墳時代の土師器破片が多いが、土師質のホウロクの破片が含まれていた。

5号溝（第68図）

C-16・17、D-16区にコの字形に位置し、2号、4号、6号、7号溝、37号土坑と重複する。2・4号溝との重複関係は不明であるが、6・7号溝、37号土坑より古い。2号溝以南に続かない。断面図は壁と底面がやや曲線を示す台形で、幅は確認面で40~85cm、底面で25~75cm、最深部は31cmを測る。出土遺物はなし。

6号溝（第68図）

D-16区に位置し、5号、7号溝と重複し、いずれよりも新しい。浅く出土遺物もない。

7号溝（第68図）

B-15、C-15・16区に位置し、確認された長さは46.5cmを測る。5・6号溝と重複し、5号溝より新しく6号溝より新しい。傾斜方向へN-31°-Eをもって直線的に延びる。断面形は壁、底部とも曲線を示し皿状を呈する。幅は確認面で55~180cm、底面は25~170cm、最深部は29cmを測る。

出土遺物は古墳時代の土師器片の他にカワラケの底部が含まれていた。

8号溝（第69図）

D-6、E-7、F-7区に位置し、F-7区で9号溝と重複している。9号溝との覆土の区別が出来なかったが、出土遺物は本溝の方が明らかに新しい。溝底面はほぼ平坦で西南西一東北東方向に延び、D区でやや北側へカーブしている。幅は確認面で35~65cm、底面で25~35cmで最深部は23cmを測る。西側では細くなり消滅する。途中現代の溝で擾乱され、東側は旧河川跡と重複するが、調査の不手際で新旧関係は把握出来なかった。

出土遺物は土師器破片の他、陶磁器、鉄製鎌の破片がある。

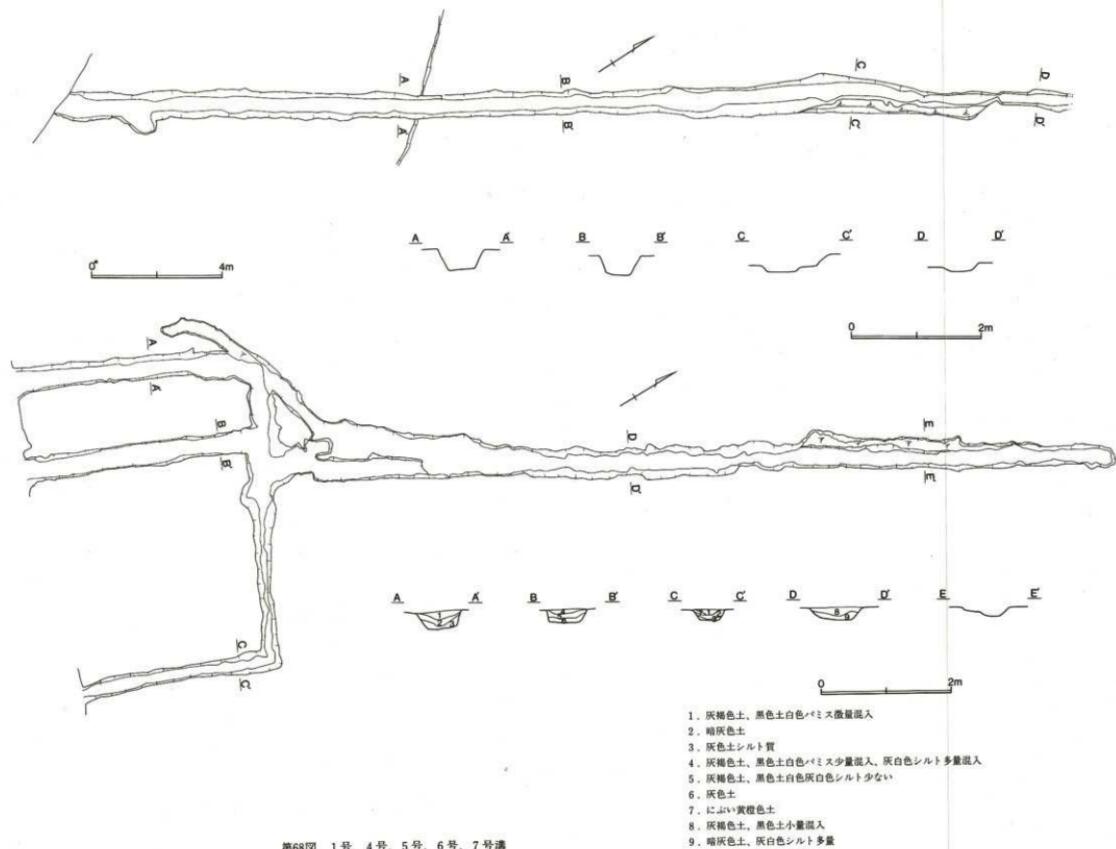
9号溝（第69図）

D-6、E-7、F-7区に位置し、8号溝と並行するがF-7区で重複する。底面はほぼ平坦で西南西一東北東方向に延び、やや北側へカーブする。幅は確認面で35~65cm、底面で25~55cm、最深部は15cmを測る。

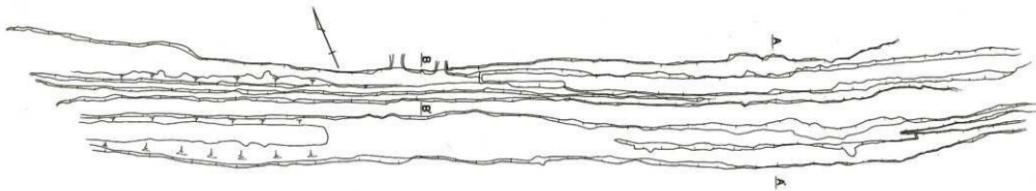
出土遺物は土師器破片の他、内耳土器、美濃・瀬戸系の合子がある。

溝跡出土遺物（第70図）

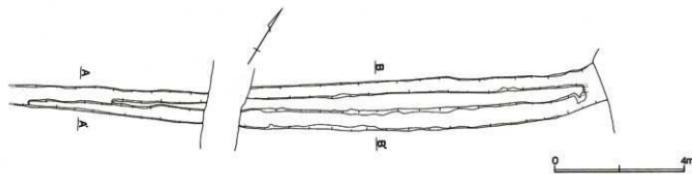
1. 2号溝出土、口径6.5cm、器高2.1cmの土師質土器皿。胎土は軟質で、小礫、透明粒子、白色粒子僅かに含有する。色調は黄橙色、にぶい黄橙色、褐灰色を呈し、灯明皿として利用されており、口縁部にタールの付着が僅かに認められる。残存状態悪く外面の整形はほとんど不明である。 $\frac{1}{4}$ 現存。
2. 2号溝出土、高台径12cmの瀬戸・美濃系陶器。高台内中央に僅かに糸切り痕を残し、回転ヘラケズリが施されている。高台は内傾し、外側で地に接する。高台から口縁部への移行部分に明瞭な



第68図 1号、4号、5号、6号、7号溝



1. 灰色土、白色粒子多く混入
2. 墓灰色土、白色粒子少ないと



第69図 2号、3号、8号、9号溝

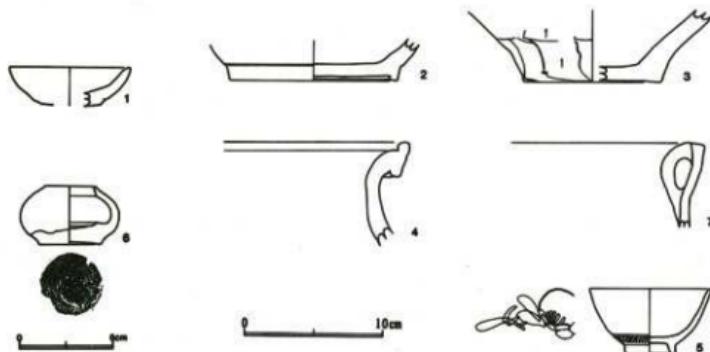
段を有する。胎土は混入物少なく、僅かに白色粒子を認め、灰白色を呈し硬質であるが微細な間隙が多い。釉は内面および高台脇に施されており、透明な明緑色を呈する。

3. 2号溝出土。底径10cmの捏鉢で、地方窯の製品であろうか。底部は僅かに上げ底で、砂粒が付着し、切り離しの痕跡は認められない。外面にはヘラによる製形痕が残る。胎土には白色粒子、砂粒、小礫が含まれ、色調は胎土とともに灰色だが、外面は黒色～暗赤色を呈する。断面には修補と思われる接着剤が残る。 $\frac{1}{4}$ 残存。

4. 3号溝出土。常滑系の甕で小片のため口径は不明。口縁部は口縁をN字状に折り返して作られ、幅2.3cm程の縁帯となる。焼成は堅く、胎土は灰色で、透明、白色粒子が僅かに含まれている。色調は口縁部および胴部の外面は灰色を呈するが、表面の斑点状に剥落した部分は灰白色。

5. 8号溝出土。口径8.8cm、器高4.75cm、高台径3.6cm、外面に花文様が施されている湯のみ茶碗。胎土は緻密で灰色を呈する。口縁部下端の高台脇には斜に曲線の刻目がつけられている。高台外部および高台脇の刻目部分、文様部分の枝、茎（しべ）部分には褐色、葉あるいは萼（がく）部分に相当すると思われる部分には青色、他の部分は白色で描かれている。絵付けの後外面の刻目部分以下および高台内を除いた全面に薄い明緑色の釉が掛けられている。また外面高台脇の褐色の釉と明緑色の釉の間に僅かに無釉の部分があり、明褐色を呈する。高台内は浅黄褐色。

6. 9号溝出土。口径2.7cm、底径3.3cm、器高3.2cmを測る、美濃・瀬戸系の合子。やや尖出する底部から大きく膨らむ胴部へ続き、短かい口縁部へ至る。底部は糸切り痕（糸目は1cmで15本）がそのまま残り、上げ底となる。内面には螺旋状の成形痕が残り、糸切り痕とともにロクロが右回転であることがわかる。胎土は緻密で灰白色を呈する。明緑色の釉が内外面に部分的に残る。



第70図 溝出土遺物

7. 9号溝出土。土師質内耳土器。断片のため器形は不明。口縁部は途中で屈折して外反し端部に至る。平坦な端部から連続して耳がつく。耳の幅は細い部分で0.9cmである。胎土は白色、透明、黒色粒子、砂粒を少し含むが、比較的堅い。色調は外面が灰褐色から褐色を呈し、口縁端部から内面は薄く焼んでいる。

4. その他の遺物

本遺跡からは、住居、土坑、溝の遺構以外の耕作土、表土部分から、縄文時代前・中・後期、古墳時代後期、中・近世の遺物が出土した。ここではその中でも残存率の多い遺物と特徴的な遺物について図示した。

グリッド出土遺物（第71図）

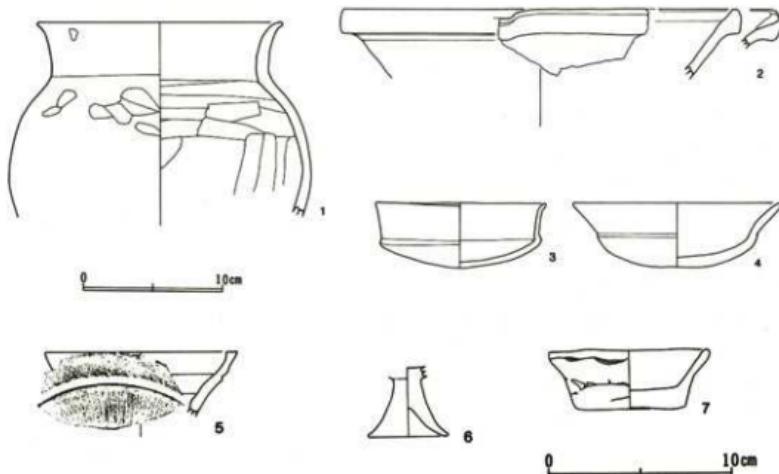
1. B-13区出土、口径17.6cmの土師器甕。口縁部は直線的に上方にのび、端部近くで外反し器壁が薄くなり尖り気味の端部に至る。胴部は丸く膨らむが、下半部は欠損している。口縁部にヨコナデを施した後、外面は横方向のヘラケズリを行い、内面はヘラナデを行う。胎土には白色粒子多く、透明粒子僅かに含有する。色調は内面はにぶい橙色で、外面はにぶい橙色～褐灰色を呈する。残存状況やや不良で、口縁部内側は全く整形不明である。口縁部と胴部上半 $\frac{1}{2}$ を除いて欠損する。

2. E-5区、21号住居跡覆土出土、推定口径28.8cmの片口(捏)鉢。片口部分を含む口縁部の小片である。内外面とも回転によるナデが旋されている。胎土には粗砂、白色粒子、透明粒子が含有されるが細かい間隙が多い。色調は灰色を呈し、口縁端部外面は光滑を持つ。本窯は兵庫県明石市魚住古窯址群の製品である（橋崎彰一、荻野繁春氏鑑定による）。

3. B-13区出土。口径12.3cm、器高4.7cmの土師器杯。1の遺物と接して出土している。口縁部は直線的に上方にのび、端部で外反する。器壁が全体的に薄く、口縁端部も尖り気味。底部は中央へ向けて直線的になる。口縁部は内外面ともヨコナデされ、内面は底部の一部に及ぶ。底部外面は不定方向のヘラケズリが旋されるが不鮮明である。胎土は粗砂、白色粒子が僅かに含まれている。色調は橙色であるが一部ににぶい橙色である。残存状況はやや不良で、口縁部 $\frac{1}{4}$ を欠損する。

4. B-10区出土、推定口径15.0cm、器高4.6cmの土師器杯。丸底の底部から明瞭な段を持って外傾する口縁部に至る。口縁端部はやや尖り気味。内外面とも器壁表面がほとんど剥がれ、整形不明であるが、部分的に赤色塗彩が残る。胎土には白色粒子を多く含有し、透明粒子、灰色半透明粒子を僅かに含む。色調はにぶい橙色～明褐色で、口縁部は黒褐色となる。残存状況は不良で、口縁部 $\frac{1}{4}$ を欠損する。

5. C-8区出土、口径10.4cmの須恵器甕。口縁部の破片で、口縁端部はやや凹む。外面には沈線を伴う凸線を有する。凸線上方に1条(9本)、下方に2条の波状文を有する。波状文は0.55cm～0.6cmで往復する。内面には回転によるナデが旋され、釉が掛かるが剥離も多い。胎土は僅かに白色粒子を含有し、堅緻である。色調は灰色で、残存状況は良好であるが、口縁部1/6の小破片。



第71図 その他の遺物

6. F-8区出土、底径4.4cmを計るミニュチュアの高杯である。杯部は不明であるが、脚部は外反し開く。器面状態悪く整形不明であるが、赤色塗彩が残る。胎土は白色粒子、透明粒子を僅かに含有する。色調はによい橙色～褐灰色を呈する。残存状況不良で脚部一部残存。

7. C-9区出土、口径8.8cmの土師器手捏土器。口縁部は平坦で厚い底部から上方へ外傾し、端部で器壁を厚くする。右回転の巻き上げて形成され、粘土帯の接合痕が外面に露骨に残る。内外面とも赤色塗彩が施されている。胎土に白色粒子、透明粒子、灰色半透明粒子を含むが、特に白色粒子が多い。色調はによい黄橙色で、外面の一部に黒褐色部分がある。残存状況は不良で、底部は完形であるが、口縁部は少しが欠損する。

V 結 語

下椿遺跡は、中川左岸の自然堤防に位置する古墳時代集落と中世の遺跡である。遺跡は中川の氾濫原内の自然堤防上に存在するため、シルト質の堅硬な土質であり調査は困難を窮めた。また擾乱が激しく、住居の床面あるいは床面下にまで及んでおり、そのために消失した住居跡も多いと考えられる。

本遺跡で検出された遺構、遺物の詳細についてはそれぞれのところで既に述べているので、ここではこれらについて簡単にまとめておきたい。

今回の調査で検出された住居跡は24軒である。擾乱や後世の氾濫等で消失したり、一部分のみ検出された住居も多い。この中で住居の形態と規模が識別されるものは、1・4・5・6・9・10・18・20・21・24号住居跡だけで、他の住居跡は壁や床の欠損により本来の姿を残していない。規模の知り得る住居跡の床面における長軸と短軸の長さをみると、規模の小さい方から、9・5・21・4・18・24・10・1・20・6号住居跡となり、最大の6号住居跡は最小の9号住居跡の約3倍の床面積を有する。また短軸に対する長軸の長さの比率は最も差の大きい6号住居跡であっても105%であり、住居のコーナーも丸味を帯びるが、ほぼ正方形を呈しているといえよう。その他プランの不安定な住居跡もおおむね同様な規模の正方形を呈するが、8号住は極端に小さく、長軸が短軸に対して123%と長いが、調査中の所見から、床が消失している可能性が高い。唯一長方形プランであるのは11号住居跡で、カマドを通る軸方向に長い。

カマドが検出された住居跡は、1・3・4・5・6・9・11・14・18・19・20号住居跡であり、このうち3・14・18・19・20号住居跡のカマドは燃焼部が残存していただけである。1・4・5・6・9・11号住居跡のカマドは、地山と同じにぶい黄橙色～褐灰色のシルト質土によって袖を造っているが、9号住居跡のカマドは、切断の結果壁と袖の間および床と袖の間に間層を含ま託いことから、地山を掘り残して構築している可能性が高い。残存状況の良好なカマドのうち、1号住居跡では円柱形の土製支脚が、6号住居跡では支脚用の鉢形土器が残存していたが、他のカマドからは発見されていない。

壁溝は1・3・4・5・10・11・12・17・18・20・24号住居跡で検出された。このうち1・3・4号住居跡ではカマド下に壁溝が存在している。18号住居跡では削平多いが、カマド下には存在していないと考えられる。1号住居跡では壁から壁溝にかけて覆土が黒色を呈し、壁に接する何らかの施設が存在していたと考えられる。

柱穴は残存状況の良好な住居跡ではいずれも4本の主柱穴を持つ。13号住居跡はプランや床面は安定しているが付属施設は一切無く柱穴も無い。礎石等により柱を建てる事も可能であるが、そのような痕跡は認められなかった。

土坑は107基図示したが、プラン・規模等にバラエティーがあり、住居跡の貯蔵穴や柱穴と考えられる例も多い。時期は完形あるいは完形に近い形で遺物が出土した土坑以外は判定が困難である。同じく住居跡と重複関係にあっても覆土が類似しており新旧関係等が判別出来なかった。この中に

あって106・107・108号土坑は中世の所産と考えられる。3土坑ともプランは不定形であるが、規模はほぼ同様で、106・109号土坑はコーナーの1か所が中央へ突出し、108・109号土坑は覆土に類似性がある。近隣における類似する遺構は、庄和町馬場遺跡¹⁾、東京都清戸下宿遺跡²⁾、群馬県本宿・郷土遺跡³⁾、千葉県西屋敷遺跡⁴⁾、他各地で検出されているが、下椿遺跡の様なコーナーが突出する例はない。

溝は9本検出されている。このうち6号溝は最も新しく近世以降の可能性が有る。8・9号溝は出土遺物に時代差が存在するが、両溝とも同様な覆土を呈し、西側では一本となるため掘り返しと考えられ近世以降であろう。1号溝は近代以降と考えられる。2・3号溝は他の溝より幅が広く、深さ40~50cmを測り、鎌倉時代末期から南北朝時代初頭頃の遺物が出土し、中世の所産と考えられる。両溝の新旧関係は不明であるが、出土遺物から3号溝の方が古い可能性があるが大きな時期差はない。

古墳時代の遺物として須恵器が3点出土しており、中村浩氏の編年⁵⁾に従えば、C-8区出土の甕がI型式の4段階(500年前後)、2号住居跡出土の杯がII型式1段階(6世紀前葉)、17号住居跡出土の杯がII型式5段階(600年前後)に相当すると考えられる。唯一炉を有する24号住居跡の出土遺物は、炉を持つとはいえ6世紀を遡るとは考えられず、当遺跡へのカマドの導入は6世紀後半であるといえよう。また本遺跡では長胴と称する程の甕が少なく、胴部の膨らむ甕のほとんどに煮沸の痕跡を認める。また赤色塗彩が旋される杯が多く、9割以上を占める点が特徴的である。

中世の遺物は、108号土坑から常滑焼の甕・砥石・弓が出土している。甕は縁帯が短かく14世紀前半頃の製品と考えられる。弓は破片であるが非常に珍しい遺物である。重簾弓(簾を巻いた弓)は「将軍家並に大将の持つものである(貞丈雜記)」⁶⁾というが、本遺跡例ではそれを証明する事は出来ず、再利用という事も考えられよう。2号溝出土の椀、捏鉢もほぼ同時期かやや後出し、3号溝の甕も土坑出土例と同時期、9号溝の合子は16世紀前半頃と考えられる。またF-5区出土の捏鉢は鑑定の結果兵庫県明石市魚住町中尾・大久保町西島に所在する魚住古窯址群の製品で、現在のところ東日本では鎌倉でのみ発見されている⁷⁾おそらく14世紀前半代の製品であろう。

古墳時代の遺構は出土遺物から、5世紀代の住居跡の存在を予想させるが、今回の調査では6世紀中葉から7世紀前葉頃の時期で構成されている。中世の遺構は溝と土坑であるが、土坑は墓坑としての性格を与える。さらに調査区西側に屋敷跡の存在を予想させる。

以上、下椿遺跡の概要を要約して述べた。本来ならば十分な考察をするべきであるが、類似の増加を待って古墳時代・中世とも別な機会に改めて考察を行いたい。

注

- 1) 庄和町馬場遺跡調査会『馬場遺跡』1974.
- 2) 清瀬町東京川越道路遺跡調査会『清戸下宿遺跡調査報告書』清瀬町教育委員会、1969.
- 3) 富岡市文化財保護協会『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』1981.
- 4) 千葉県文化財センター『千葉市西屋敷遺跡』1979.

- 5) 大阪文化財センター『陶邑』III, 1978.
- 6) 麻生頼孝『弓』1933, 三省堂.
- 7) 鎌倉考古学研究所『鎌倉考古』No.15, 1982, p.5 で紹介されている.